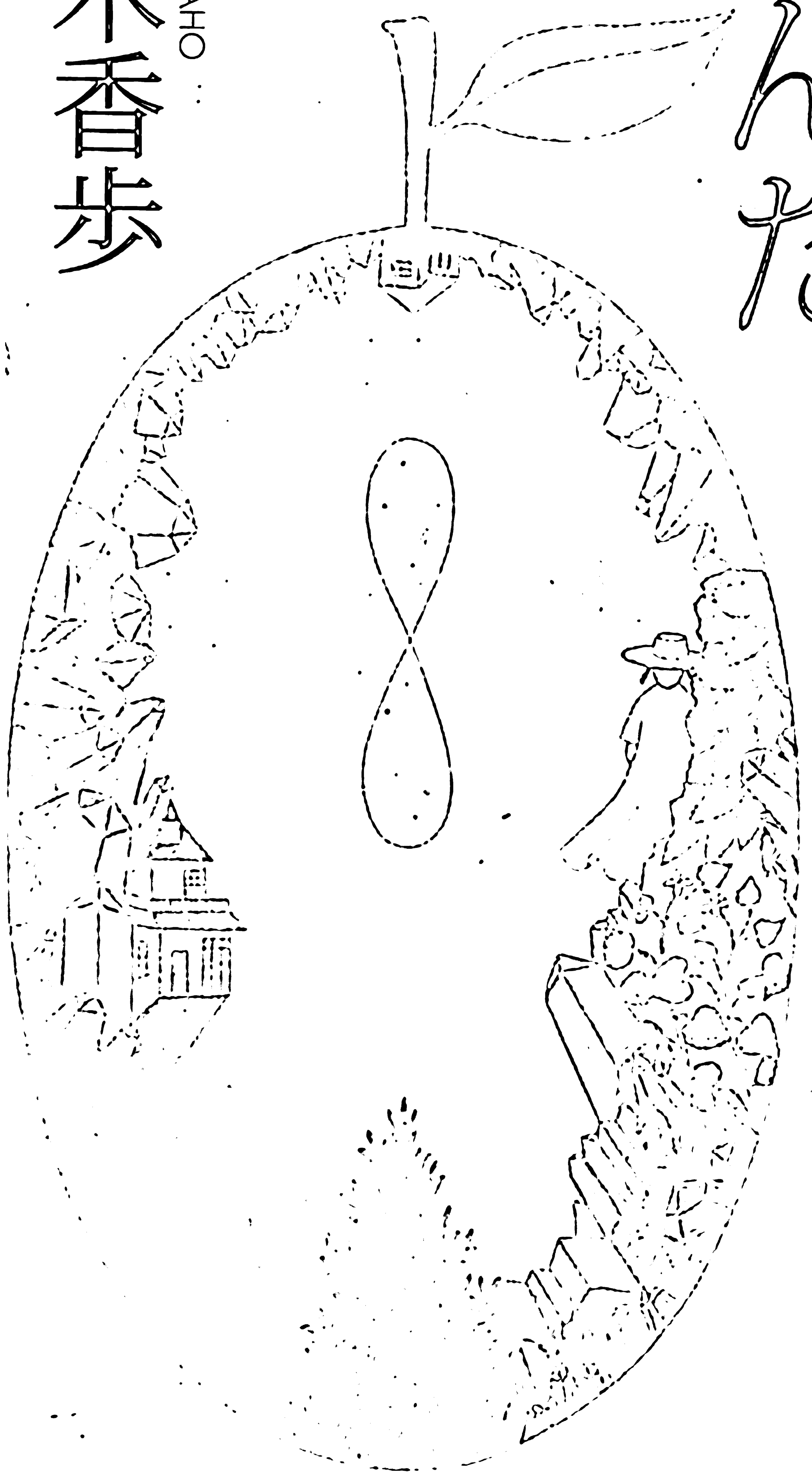
# 西の魔女が死んだ

梨木香歩

KAHO

$.50



新潮文庫

新潮文庫

# 西の魔女が死んだ

梨木香歩著

新潮社版

6709

梨木香歩
Nashiki Kaho

1959（昭和34）年生れ。小説に『西の魔女が死んだ』『丹生都比売（におつひめ）』『エンジェル エンジェル エンジェル』『裏庭』『からくりからくさ』『りかさん』『家守綺譚』『村田エフェンディ滞土録』『沼地のある森を抜けて』『ピスタチオ』『僕は、そして僕たちはどう生きるか』『雪と珊瑚と』『冬虫夏草』『海うそ』『岸辺のヤービ』など、またエッセイに『春になったら莓を摘みに』『ぐるりのこと』『渡りの足跡』『不思議な羅針盤』『エストニア紀行』『鳥と雲と薬草袋』などがある。

カバー装画　早川司寿乃

# 目次

西の魔女が死んだ……七
渡りの一日……一九三
解説　早川司寿乃

# 西の魔女が死んだ

西の魔女が死んだ。四時間目の理科の授業が始まろうとしているときだった。まいは事務のおねえさんに呼ばれ、すぐお母さんが迎えに来るから、帰る準備をして校門のところで待っているようにと言われた。何かが起こったのだ。

決まりきった退屈な日常が突然ドラマティックに変わるときの、不安と期待がないまぜになったような、要するにシリアスにワクワクという気分で、まいは言われたとおり校門のところでママを待った。

ほどなくダークグリーンのミニを運転してママがやってきた。英国人と日本人との混血であるママは、黒に近く黒よりもソフトな印象を与える髪（かみ）と瞳（ひとみ）をしている。まいはママの目が好きだ。でも今日は、その瞳はひどく疲れて生気がなく、顔も青ざめている。

ママは車を止めると、しぐさで乗ってと言った。まいは緊張して急いで乗り込み、ドアをしめた。車はすぐ発進した。

「何があったの？」

と、まいはおそるおそる訊いた。

ママは深くためいきをついた。

「魔女が――倒れた。もうだめみたい」

突然、まいの回りの世界から音と色が消えた。耳の奥でジンジンと血液の流れる音がした、ように思った。

失った音と色は、それからしばらくして徐々に戻ったけれど、決して元のようではなかった。二度と再び、まいの世界が元に戻ることはなかった。

「まだ……」

生きてるの、と訊こうとして、まいは思わず口をつぐんだ。そして大きく息を吐いてから、

「話ができるの？」

と訊いた。

ママは首を振った。

「電話がきたの。心臓発作らしいわ。倒れているのが発見されて、そのときはもう脈もなかったみたい。解剖したいって、病院では言っているらしいんだけれど、あの人はそういうことは絶対嫌なタイプだから断ったの」

そうだ、あの人はそういう「タイプ」だ。まいは車のシートを後ろに倒し、腕で目の上を覆った。ひどく体が重い。衝撃だった。悲しいというより。それでは、これから六時間余り車で走らなければならないわけだ。高速道路まで一時間、高速道路を四時間、高速道路から降りて一時間。それだけの距離をミニで走るのはきつい。地面を身体で測りながら這うように移動する車だから。

まいは腕をずらして、車のフロントガラスを見つめた。雨がポツポツとそこに水滴を付け始めた。ママはまだワイパーを動かさない。昨日、テレビが梅雨入り宣言をしていた。いや、テレビではなく、気象庁が。

雨はだんだん強くなり、窓越しの景色が見えにくくなった。ママはまだワイパーを動

かさない。

　まいはちらりとママの顔を盗み見た。ママは泣いていた。声も立てずに、ただ涙だけが勝手に流れ落ちているのだというように。これはママの泣き方だ。ずっと以前にも見たことがある。

「ワイパー」

　まいは小さく言った。

　ママは一瞬混乱したようだった。自分の涙にまず気づき、それから外の世界に気づいたのだろう。少し間を置いて、

「ああ、雨が降っているのね」

と言って、ワイパーを動かした。水滴が拭(ぬぐ)われて、街路樹のプラタナスの若葉が次々に現れては去り現れては去りした。

　プラタナスの芽吹きって、何か「勃発(ぼっぱつ)」って感じがする。まいは、ぼんやりそう思いながら、ポケットからハンカチを取り出しママに渡した。

「ありがとう」

ママは反射的に言って、片手でハンドルを握ったままハンカチで涙を拭いた。

まいは体がどんどん重く沈み込んでいくように感じた。そして二年前の、季節が初夏へと移り変わるちょうど今ごろ、おばあちゃんと過ごした一ヶ月余りのことを、急にすごい力で体ごとぐんぐんと引き戻されるように思い出した。部屋や庭の匂いや、光線の具合や、空気の触感のようなものが、鼻孔の奥から鮮やかに甦るような、そんな思い出し方で。

ママが真面目な顔で「そうよ、あの人は本物の魔女よ」と打ち明け、それ以後、二人だけのときはいつもおばあちゃんのことを「西の魔女」と呼ぶようになった、あの一ヶ月余りのことを。

二年前の五月、まいは小学校を卒業し、中学校に入ったばかりだった。始まりはいつもの季節の変わり目の喘息だった。けれど発作が起きなくなっても、まいは学校に行けなかった。学校に行くことを考えただけで息が詰まりそうだった。

ママは困った。しかし賢明だった。なだめたりすかしたり怒ったり、というむだなエ

ネルギーは一切使わなかった。なぜなら、もうそろそろ学校へ行ったほうがいいんじゃないか、とママが最初に何げなく言ったとき、まいはママの目をじっと見て諭すように真剣に言ったのだ。

「わたしはもう学校へは行かない。あそこは私に苦痛を与える場でしかないの」

ママは観念した。まいがこうまで言うのはよっぽどのことだから。けれど、かろうじてこう言った。

「わかったわ。じゃあ、とにかくしばらく学校を休みましょう。中学が始まって、まだ一ヶ月もたっていないじゃないの。そんなに早く結論を出すことはないわ。きっとまだ完全に回復しきってないのよ。二週間もすれば、気力も充実して元気になるかもしれない」

なぜ学校がまいにとって「苦痛を与える場でしかない」のか、ママが訊こうとしなかったのは不思議だ。おそらく知るのが怖かったのだろう。ママはハーフだったせいもあって、学校というものについぞ溶け込めなかった。当時も今もこの辺りにはインターナショナル・スクールなどはない。まいの話を聞いて、学校生活というものを追体験する

のが嫌だったのかもしれない。

　まいは思った。それでもとにかく、ママは日本で大学まで卒業した。りっぱだ。なのに、わたしはすでに中学で座礁しようとしている……。

　その夜、単身赴任しているパパにママが電話をかけた。まいはベッドに入っていたけれど、全身を耳のようにして身動き一つせず聞いていた。

「……ええ、喘息の発作はもうでないのだけど、学校へは行かないって言うの。……そう。あんまり強く叱ってもね、かえって逆効果でしょ。理由？　さあ。あの子はとにかく……。何ていうのかしら、感受性が強すぎるのね。どうせ、何かで傷ついたには違いないんだろうけど。昔から扱いにくい子だったわ。生きていきにくいタイプの子よね。……とりあえず、田舎の母のところでゆっくりさせようと思うの。空気がいいから、喘息にもいいしね。……登校拒否っていう言葉は知っていたけれど、まさかねえ……自分の子がそうなるなんて思ってもいなかったわ。晴天の霹靂ってこのことね。……ええ、まだそう断定するつもりはないわ、もちろん。でも優等生でずーっときた子でしょう。まさかねえ……」

　それからパパの仕事のことをきいている声が続いていたが、まいにはそんなことはもうどうでもよかった。ママはもうわたしに誇りが持てなくなったのだ。まいにはそれがいちばんつらく悲しかった。飛び出していって、「ごめんね、ママ」と謝りたかった。けれど心の底に、「扱いにくい子」「生きにくいタイプの子」という言葉が、錨のように重く沈んでいた。まいはそれは本当のことだと知っていた。

「認めざるをえない」

　まいは小さく呻るように呟いた。この言葉は初めてつかう言葉だ。まいはちょっと大人になった気がした。

「それは認めざるをえないわ」

　まいはもう一度呟いた。これですっかりこの言葉を自分のものにできた気がした。それから、学校に行くことに比べたらこんなことまだ我慢できる、と自分に言い聞かせた。それにほら、ママは「田舎の母のところでゆっくりさせ」るって言っていた。

　まいは、小さいころからおばあちゃんが大好きだった。実際、「おばあちゃん、大好き」と、事あるごとに連発した。パパにもママにもそんなことは照れくさくて言えない。

おばあちゃんが外国のひとで、そのことでかえってストレートに感情を表現できるのかもしれなかった。そういうとき、おばあちゃんはいつも微笑んで、

「アイ・ノウ」

知っていますよ、と応えるのだった。そのパターン化されたやりとりは、仲間同士の秘密の合い言葉のようだった。

おばあちゃんと一緒に暮らせる、と思っただけで嬉しくなる。と、同時に一抹の不安もあった。「一緒に暮らす」ことは、時々「遊びにいく」ということとは違う、とまいは思った。

わたしの全体を知って、おばあちゃんはがっかりしないだろうか。ママががっかりしたように。そしておばあちゃん自身もまた、どこか底知れないところがあって、まいは少し怖くもあった。

でもそれが、まいがおばあちゃんに魅きつけられる理由の一つでもあったのだけれど。

次の日曜日、まいはママの運転する車でおばあちゃんのうちへ向かった。当時まいた

ちは、おばあちゃんの家から車で一時間ほどのところに住んでいた。

ボストンバッグと段ボールに、学校の教科書や文房具、衣類、まんがや本、歯ブラシ、マグまで詰めた。

「おばあちゃんのうちにだって、ティーカップぐらいあるわよ」と、ママはあきれていたけれど、使い慣れたこのマグがあるとその回りにぼわんとした「自分の場所」のような空間が拡(ひろ)がって、きっと予想されるホームシックが防げる、とまいは思ったのだ。

まいは時々ひどいホームシックに悩まされることがあった。それは、たとえ自分の家にいるときでもやってきたから、「ホームシック」と呼ぶのはおかしいのかもしれなかったが、まいにとってはそれ以外の何ものでもなかった。胸が締めつけられるような寂しさを感じてしまうのだ。

それがなぜ、どこから来るものなのか、おばあちゃんのうちでもやってくるのか、このマグがどれくらい効果的か、まいにはわからなかったが、とりあえず万全の備えが必要だ。

車は長い長い峠の坂道を登り、山の中に入った。

やがて薄暗い孟宗竹の竹藪が右手に出てきて、それから荒れ果てた人家が見えた。その庭の奥から、数匹の犬が一斉に吠えた。

ママはスピードを落とし、左手に延びている小道に入った。ミニで入るのが精いっぱいの小道だ。楓の木が両側から枝をさしかけて、トンネルのようになっている。

車はくの字型に大きく一度曲がると、まいの身長より少し高そうな、古びた遺跡のような門柱を通って止まった。

そこはもうおばあちゃんのうちの前庭だった。庭の中心には大きな樫の木が一本立っており、その回りを囲むように小道や草花、庭木があった。

車のドアを開けて外へ出ると、ちょうどおばあちゃんが家から出てきた。

黒に近い褐色の大きな瞳。今はもう半分以上白くなり、後ろで無造作にひっつめられた褐色の髪。骨格のしっかりした大柄な身体。歯を見せずに、にやりと(どう見てもにっこりというよりにやりだった)笑いながら、じっとまいたちを見つめている。

ママはおばあちゃんに近づくと、厳かにおばあちゃんの肩に右手を回し、胴に左手を回した。そして両頬を交互におばあちゃんの頬に寄せると、振り向いてまいの方を見た。

まいも近づくと、

「おばあちゃん、久しぶり」

と言った。

「来ましたね」

と、おばあちゃんは流暢な日本語で応えて、まいの頬を両手で包むようになでた。

まいたちは、それから庭を伝って家の反対側に回り、台所ドアから台所に入った。

台所ドアはガラスの入ったドアで、開けると一畳ほどのサンルームになっている。台所に入るには、更にもう一枚ドアを開けないといけない。台所といっても、タイルを敷き詰めた土間の様な感じで、靴ばきで出入りできる。

台所には、裏庭に面して開けられた窓に寄せて、ダイニングテーブルと椅子が置いてある。まいたちはそこにかけて、おばあちゃんがいれてくれたお茶を飲み、缶から取り出したビスケットをつまんだ。ママは、来る途中の町の様子がだいぶ変わったこと、パパが赴任先で元気そうに生活していること、庭の植物が生き生きしていること、つまり当たり障りのないこと、要するにまいに関係のないことをしゃべり続けた。

裏庭には、料理の最中に台所から出てきてすぐ採れるよう、葱（ねぎ）、山椒（さんしょう）、パセリにセージ、ミントやフェンネル、月桂樹（げっけいじゅ）などが植えてあった。まいはぼんやりと外を見ながら、本当にそれらが陽（ひ）の光をいっぱいに浴びて生き生きしていると思い、話はまだ核心にきていないと思った。

まいは立ち上がって二枚のドアに挟（はさ）まれた小さいサンルームに行った。完全に外でもなく、完全に内でもないその空間には、ガラスの壁に細めの板が数枚渡してあり、小さい植木鉢や植木ばさみ、じょうろなどが置いてあった。下の方には棚はなく、長年の泥はねなどでガラスがひどく汚れていた。おまけに床のれんがには、隅の方に雑草が生えていた。

ママが声のトーンを落とした。さあ、また「扱いにくい子」を口にするのか。けれど、何をしゃべっているのかうまく聞こえない。

まいはしゃがんで、その雑草をつくづくと見た。小さな青い花をつけている。勿忘草（わすれなぐさ）をうんと小さくしたような花だ。

突然、おばあちゃんの力強い声が響いた。

「まいと一緒に暮らせるのは喜びです。私はいつでもまいのような子が生まれてきてくれたことを感謝していましたから」

まいは目を閉じた。そしてゆっくり深呼吸し、再び開けた。この小さな青い花はなんて愛らしいのだろう。まるで存在がきらきら光っているようだ。まいはその花をそっと両手のひらで包むようにした。

「まーい」

と、ママが声をかけた。

まいは弾けたように立ち上がって返事をした。

ママは笑っていた。

「サンドイッチをつくろう。裏の畑にいってレタスとキンレンカを採ってきて」

「はーい」

まいは明るく返事をして、外へ飛び出した。

畑は月桂樹の木の向こう側にある。畑に入ると、足が柔らかい土にめりこんだ。雑草だらけの畑だ。露で膝までぬれた。レタスは大きく広がっていたので、まいはまん中の

部分だけ力を入れて採った。その拍子に太ったなめくじがぽろっと落ちて、思わずぞっとした。それから急いで戻り、月桂樹の根元にわさわさと生えているキンレンカの葉を数枚採ると、台所に帰った。

ママは薄く切ったパンにバターを塗って（ぬ）いた。おばあちゃんはいり卵をつくっていた。バターに卵の溶けるいい匂（にお）いが部屋じゅうに広がっていた。

「これでいい？」

まいはママべともおばあちゃんへともなく聞いた。

「ええ」

と、ママとおばあちゃんは同時に言い、思わず顔を見合わせると、ママが譲るような表情で肩をすくめ微笑（ほほえ）んだ。

「それを洗って、ざるに入れておいて下さい」

おばあちゃんがゆっくりと、いかにも指示を出す人のように言った。

「レタスは何枚？」

「三、四枚かしら」

まいはレタスを三枚と半分はがし、キンレンカも一緒に洗いざるに入れて水を切っておいた。

おばあちゃんがやってきて、

「ありがとう」

と言いながら、レタスを一枚ずつ手のひらに載(の)せ、ぱん、ぱんと水けを切ると同時に平べったくした。そして、適当な大きさに裂(さ)いて、ママが並べておいたパンのうち、二枚のパンの上に載せた。それから冷蔵庫からハムを取り出し、その上に一枚ずつ載せていき、キンレンカの葉も同様にした。

残りのパンの上にはレタスだけ何枚も置き塩を振ったり、いり卵だけ置いたりして、端からパンをかぶせていった。そして、まな板の上に載せ、ざくざくと耳もとらずに無造作に三等分していった。その間、ママは沸騰(ふっとう)したお湯をやかんからポットに入れ、紅茶の準備をした。

「まい、棚からお皿を出して」

おばあちゃんがまいに言い、まいは丸い大きめの平皿を示した。

「これでいい？」

「そう。それが大体食事のときの皿になります」

まいはその皿を三枚配膳台の上に並べた。おばあちゃんはその上に、ポン、ポン、ポン、と出来上がったサンドイッチを載せていき、その手で配膳台の下部の引き出しからクロスを出してテーブルに敷いた。

「まい、カップを持ってきて下さい」

「ああ、まいはね、自分のカップを持ってきているのよ」

と、ママはまいの方を見た。

「そういえば、荷物がまだ車の中だったわね。まい、取っておいで」

「えー、全部一人で」

「ボストンバッグが一つと段ボールが一つでしょ。車にキャリーが入っているから一度で運べるわ」

「はーい」

まいはためいきをつきながら、台所から出ていった。そして、車の駐めてある前庭に

向かうと、見知らぬ男がしげしげと車の中をのぞき込んでいるのが目に入った。
その男は、真夏の強い日差しでできる影のように黒かった。ぶくぶくと締(し)まりなく太っており、目だけが異様に光っていた。
まいはたじろいだが、とにかく車から荷物を出さないといけない。
その男もまいに気づき、ばつが悪そうに目をそらした。車内には、ドライブの途中で食べ散らかしたお菓子の袋やジュースの缶などが散らかっていた。
まいはこの男のずうずうしさに腹も立って、つっけんどんに、
「こんにちは」
と声をかけた。
男はまじまじとまいを見て、何か口の中で「うむ」とか「ふん」とか応(こた)えた。そしていきなり怒鳴(どな)った。
「おまえはどこのもんじゃ」
まいはびっくりしたが、とりあえず、
「ここは、わたしの祖母のうちです」

と応えた。

男はもう一度まいをじろじろ見て、

「遊びに来たんか」

と訊いた。やはり、大きな声だった。

まいはちょっと迷ったが、

「しばらくここにいるんです」

病気なので、と小さく付け加えた。

「ええ身分じゃな」

と、吐き捨てるように言うと、男は門から出ていった。

まいは怒りのために腹わたが煮えくり返りそうだった。車のトランクを開けるときも、手が震えて力が入らなかった。

何でこんな言われ方をしなければならない？ 黙って人のうちに入ってきて、「おまえはだれだ」ってどういうこと？ 何であんなに威張っているの？

まいはトランクからキャリーを出して、パタンパタンと組み立て、段ボールの箱を載

せ、その上にボストンバッグを置いた。さっきまでの明るい気分はどこにも残っていなかった。キャリーにひもをかけるのも忘れ、注意深く押すこともしなかったので、何度もボストンバッグが下に落ちた。

やっとのことで、台所に入ると、おばあちゃんとママはもうテーブルについてまいを待っていた。まいは、時々涙が出そうになるのをこらえて、さっきの出来事を話した。

ママは困ったような顔をして、

「それはひどいわね。だれかしら」

と、おばあちゃんに向かって言った。

おばあちゃんはまいにテーブルにつくように言い、

「たぶん、ゲンジさんでしょう。犬が吠えて、見かけない車がうちに入っていったので、心配して見にきてくれたんでしょう」

「ゲンジさん。あら、あの人、戻ってきたの」

ママは眉をひそめながら、ボストンバッグを開け、まいのマグを出し、水道の水で洗ってから持ってきた。何度も落としたにもかかわらず、マグは無事だった。

「あの人はだれなの、どこに住んでるの」

まいはまだ興奮した口調で訊いた。

「ゲンジさんは道路の向かいの家にいます。時々、庭の仕事を頼むんです。買い物とか」

おばあちゃんはまいのマグにミルクを注ぎ、紅茶を入れてまいの前に置いた。

「いいカップね。まいはいい趣味ね」

まいは、大きくため息をついて一口すすった。濃く入れてあって、かぐわしく、おいしかった。

まいは、先程のおばあちゃんの口調からあの男をかばうような何かを感じていて穏やかではなかったのだが、ようやく少し落ち着いたような気がした。

「道路の向かい側のうちって、あの、犬がいっぱい吠えていたところでしょ。前来たときは、あの犬たち、いなかったと思うけど」

「ゲンジさんはずっと町にいて、少し前からあの家に帰ってきているんです。おとうさんが亡くなられたので」

ママがおばあちゃんの方を向き、小さい声で聞いた。
「やっぱり離婚したんでしょう？」
おばあちゃんはサンドイッチに手を伸ばしながら応えた。
「よく知りません。今は一人で住んでいるみたいですけど」
まいもサンドイッチを手に取り、キンレンカの葉だけ抜いた。このワサビのような、カラシのような、ぴりりと青臭い味がまいは好きではなかった。ママはまいがそれを抜いても何も言わなかった。
「あの人、しょっちゅう来るの？」
まいは、もうだいぶ落ち着いた声で、それをほおばりながら聞いた。
「そんなには来ませんよ。それより、まいの部屋をどちらにしますか。屋根裏の二部屋のうちどちらか」
話が急に変わったので、そしてそのことについてうかつにも全く考えていなかったので、まいは慌てて考えを巡らせた。
この家の一階は、前庭に面してリビングルームと納戸、おばあちゃんの部屋をまん中

にして、裏庭側にこのキッチン、という間取りになっている。

屋根裏と呼んでいる二階には、前庭側におじいちゃんの使っていた物置のような部屋と、裏庭側に昔ママが使っていた部屋がある。おじいちゃんは鉱石が好きだったので、前庭側の部屋はいまだに石だらけだ。それに窓からまたあの男の姿を目にするのではという不安が胸をよぎり、まいはママの部屋にすることにした。

「わたし、ママの部屋にする」

そう言うと、ママはにこっと笑い、

「もう、ずいぶんあの部屋にも入っていないわね。まだそのままなの？」

「そのままですよ」

「ちょっと行ってくるわ。お掃除したりしないと」

と言って、ママはそそくさと二階へ上がった。おばあちゃんはにやりとしてまいに目配(めくば)せした。

「ママは、まいに見せたくないものを片づけに行ったんです」

「えっ」

まいは驚いた。
「なんだろう。わたし、見たいなあ」
おばあちゃんは、やはり、にやりとして首を横に振った。
「まいにも、人に見せたくないものはあるでしょう」
「そうかなあ」
まいは一応とぼけた。
「人は大人になろうとするとき、そういうものがどんどん増えていくんです。まいのママは……」
と言って、おばあちゃんは、煙草(たばこ)とマッチの箱と灰皿を取り出し、煙草に火をつけた。
「あの部屋で大人になっていきましたから、そりゃあたくさんあると思いますよ」
まいは、おばあちゃんの煙草は全然気にならなかった。おばあちゃんもそれを知っていた。けれども、ママはまいの喘息(ぜんそく)を盾(たて)にとって、パパの煙草をやめさせていたし、おばあちゃんの喫煙も昔から嫌(きら)っていた。それで、おばあちゃんもママの前では煙草を控(ひか)えている。

台所のテーブルは長方形で、それほど大きくもなく小さくもない。五、六センチの高さの小さな陶製の花瓶に、庭の花が可愛らしく生けてあった。

裏庭に面した出窓のところにおじいちゃんの写真が置いてある。白髪混じりの不精ひげを生やした面長の顔に、麦わら帽子が影を落としていた。夏の日に、この庭で撮ったのに違いない。おじいちゃんは細い目をして笑っている。おじいちゃんの横で、ブラッキーと呼ばれていた黒い犬がいかにも利発そうな目をしてこちらを見ている。ブラッキーもおじいちゃんも、もういない。

まいは、この写真が好きだった。

おじいちゃんは、昔、ミッション系の私立中学の理科の教師をしていた。そこで英語の教師として赴任してきたおばあちゃんと出会い、結婚したのだ。おじいちゃんはまいの小さなときに亡くなったので、まいはほとんど覚えていない。

おじいちゃんとおばあちゃんが出会わなければ、ママは生まれず、自分も今ここにいないのだ、いや、そもそも、おばあちゃんが、日本に来ようと思わなければ……と、考えてまいは、なんだか不思議な気がした。

「おばあちゃんは、どうして日本に来たの？」

おばあちゃんは、煙草の煙をすーっと吐くと、

「明治時代の始まりのころに、おばあちゃんのおじいさん、まいにとっては曾々祖父に当たりますか、その人が日本を旅行したのです。そして、日本人の礼儀正しさや優しさ、毅然としたところ、正直さに大変感銘を受けて英国に帰りました。わたしは、小さいころから、祖父に日本のことばかり聞かされて育ちましたから、まるで未来の恋人のことを思うように、日本のことを思うようになったのです」

おばあちゃんは、そのころのことを思いだしているかのように、窓の外、遠くを見つめていた。

「大きくなって、ある教会活動に従事していたとき、そこで、日本へ英語教師として赴任する人を募集していると知り、迷わず応募しました」

「みんな、反対しなかったの？」

「祖父の影響もあって、みんな日本びいきでしたから。でも、そのときは、まさかわたしが、こんなに長く日本にいることになるとは、だれも思わなかったでしょうね。伯母

以外はね」

「それから一度も帰らなかったの？」

「新婚旅行で一度、それと父と母が死んだときに帰りましたよ」

「結婚、反対されなかった？」

「大喜びってわけではありませんでしたね。最初はね。不安だったんでしょうね。でも、伯母が、私が日本人と結婚することは大昔から決まっていたことだ、と味方になってくれましたし、おじいちゃんに会うと、みんな彼が好きになりましたから。問題はありませんでしたね。祖父が言っていたとおりの日本人でしたからね、彼は」

「じゃあ、おばあちゃんは小さいときからずっとおじいちゃんに恋していたようなものね」

「ふふふ、そうかもしれませんね。人の運命っていろんな伏線で織りなされていくものなんでしょうね」

バタンと二階の戸を閉める音がして、一段、一段、階段をきしませながら、ママが降りてきた。

「ずいぶんゆっくりしてきたのね」

おばあちゃんがママに優しく声をかけた。

「ええ」

と、ママはため息をつきながらテーブルについた。

「まいが棚や机の引き出しを使えるように、置いてあったものを段ボールに詰めてきたんだけど……」

「ひとつひとつ、懐かしかったのね」

「そう。最後にガムテープで止めたとき、私の人生の一部がここに封印されたような気がしたわ」

まいは、そのときのママの気持ちが何だかわかるような気がした。まいはまだ、生まれてから十三年しか経っていなかったのだけれど。

その日、ママはまいと一緒に屋根裏で寝て、次の日の朝、まだ暗いうちに帰っていった。

まいは、ベッドの中でママが下に降りていく気配を感じていたが、声はかけなかった。

夢うつつだったのと、ここで声を交わすとどうしても「さようなら」とか「元気でやるのよ」、「気をつけてね」などという言葉が飛び交って、寂しさを倍加させる事態になりそうだったからだ。それで、ママの車が出ていく音をかすかに聞きながら、自分を追い込むようにして、また眠りの世界へ入ってしまった。

もう一度目が覚めたとき、やはりママの姿がなかったので、突然またあのホームシックに襲われた。

今回のはきっかけが明らかなので、わけもわからず襲われるよりは、まだましだ。しかし、その原始的、暴力的威力は同じで、心臓をギューとわしづかみされているような、エレベーターでどこまでも落ちていくような痛みを伴う孤独感を感じる。そういうときは、ただひたすらそれが通り過ぎていくのを待つしかないのだ。

それでその朝も、その泣くに泣けない孤独感をやり過ごしながら、台所に降りていった。大人になったら、これがどこから来て、何でわたしにとりつくのか解明したいものだと思いながら。

おばあちゃんは、まいの顔を見るとにやりとして、

「おはよう」
と言い、パンをトースターに入れた。まいも、おはよう、と返し、
「ママはずいぶん早く帰ったんだ」
と、ポツンと言った。
「そうね。もう着いているでしょう。朝は車も少ないから。電話してみますか」
まいは首を横に振った。まだなんとか耐えられる。ママに電話するのは最後の切り札にとっておこう。それにほら、おばあちゃんがわたしのカップを持ってきてくれた。これでちょっとは元気が出るはず。
まいは、おばあちゃんの入れてくれた紅茶を両手でカップを包むようにして飲むと、皿に料理した卵を移しているおばあちゃんを、ちらりと盗み見た。目が合った。おばあちゃんはまたにやりとした。
まいはドキッとして慌てて目をそらした。このホームシックまで全部見通されているようだった。そしてすぐ、おばあちゃんが気を悪くしなかったかと心配になった。すると、

「今日は裏山で働いてみましょう」
おばあちゃんが突然言い出したので、まいはびっくりした。
「何をするの」
おばあちゃんはトーストと卵の皿を運び、
「行ってみたらわかりますよ。これを食べたら、まず、ひとりで裏を散歩してみたら」
まいは、食欲は全然なかったのだけれど、おばあちゃんの気を悪くしたくなかったのでがんばって全部食べた。そして外を散歩する気分でもなかったのだけれど、せっかくおばあちゃんが言ってくれているのだから、と自分に言い聞かせて重い足取りで外に出てみた。

まいの気分とは裏腹に、外はとてもいい天気だった。朝のすがすがしい空気が、陽（ひ）の光できらきらしていた。裏庭の右手の方から奥に延びている小道を行くと、すぐに鶏小屋があり、それから櫟（くぬぎ）や樫（かし）、榛（はしばみ）の木や栗（くり）の木などの点在する陽当たりのいい雑木林に出る。そこまでぼんやりと歩いてきて、まいは思わず、あ、と小さく声をあげた。木のまばらなその林の床一面、真っ赤なルビーのような野いちごの群生で覆（おお）われていたのだ。

まいは

「うわあ、すごい」

と呟きながら、それを踏まないように気をつけて歩いた。何だか本当に宝石のようだった。みずみずしく柔らかな、傷つきやすい宝石。まいは足元に神経を集中させて、苦労しながら木立ちを抜けた。

そこは見晴らしのいい丘になっていた。さすがに野いちごの波はここまでは届いておらず、かやつり草などが混じった行儀芝が今度はその丘を覆っていた。あたりはもう、初夏の草いきれの匂いさえしていた。

まいはそこに座り、遠くの薄青に輝く山を見つめた。風がすぐ下の栗の木の若葉をそよがせてゆき、遠くでホトトギスが「テッペンカケタカ」と、山々にこだまさせていた。

何だか、ついこの間まで、あの狭い教室の重く煮詰まったような人間関係に身動きもとれないような気がしていたのが嘘のようだ。

まいは思いきり深呼吸してから、

「エスケープ」

と、小さく声に出して言ってみた。
そうだ、これはエスケープだ、わたしは、またいつかあの世界に戻っていかなければならないのだ、と、まいは知っていた。泣きたいような気持ちだった。ああ、でも、とりあえずここは、なんて気持ちがいいんだろう……。
「まーい」
後ろで呼ぶ声がして、振り向くとおばあちゃんがバケツを両手に提げて立っていた。
「さあ、摘みましょう」
すぐにそれが野いちごのことだとわかった。
「これ、すごいね、おばあちゃん」
まいは、目を丸くさせながら立ち上がって、おばあちゃんの方へ歩いた。
「ジャムをつくるんです。さあ、がんばって摘んでしまいましょう」
「わかった」
まいはおばあちゃんと並んで、しゃがんで摘み始めた。おばあちゃんはバケツを重ねて三つも持ってきていた。まいはまさかと思ったけれども、結局最後には、三つとも満

杯になった。

おばあちゃんは手を動かしながら、亡くなったおじいちゃんは普通のストロベリージャムよりもむしろこのワイルドストロベリージャムのほうが好きだった話や（おばあちゃんは特に「ワイルド」のところに力を入れたものだ）、おじいちゃんが本当に自然を愛していたこと、特に鉱物が大好きだった話をした。

まいは聞きながら、おばあちゃんはおじいちゃんを失ってからどんなにつらかっただろうと思った。でも、それが本当にはどういうことなのか、少しもわかっていなかったんだ、と、まいはずっと後になって思ったのだった。

赤い野いちごの緑の茎には、ひっきりなしに黒い蟻が登ったり降りたりしている。その実を口に入れると日向臭い甘味があって、ブチブチと何か舌に触る。

「まいのおかあさんは、木いちごのほうが好きでしたよ。そっちは、もう一ヶ月ほど待たねばなりませんけど」

「おかあさんも、こうやって手伝ったの」

おばあちゃんは首を振って、

「あのころは、ここにはこんなに野いちごはありませんでした。おじいちゃんが亡くなった次の年からでしたよ。こんなに増えたのは」

「ふーん」

まいはその年のことを想像しようとした。おばあちゃんが、さっきのまいのように、初めてこの一面のルビーの絨毯（じゅうたん）を目にしたときの感激を。

「まるでおじいちゃんからのプレゼントのようだね」

「本当にそうなのです、なぜなら……」

おばあちゃんは意外なほど真面目（まじめ）な声で言った。

「その日は私の誕生日でしたから。私には、その意味がすぐわかりました。おじいちゃんは、それまで毎年私の誕生日を忘れたことはありませんでしたから」

まいは何と言っていいのかわからなかったが、とりあえず、

「おばあちゃん、うれしかったでしょう」

と言った。おばあちゃんはにっこりして、

「うれしくて、うれしくて、ここにうずくまって泣きました」

まいは、そのときのおばあちゃんの姿が急に目の前に現れたような気がして、慌てて瞬きした。

まいとおばあちゃんは、午前中のほとんどを費やして摘んでしまい、台所ドアの前までバケツを運んだ。台所ドアの前には、かまどが二つあり、外で大鍋で何かグツグツ煮るときに使う。おばあちゃんはかまどの横の水道で、野いちごを丁寧に一つ一つ中を調べて洗い、ざるにあげた。まいも手伝った。そうしないと、中に蟻が入っていることがあるのだ。

やっとのことでバケツ三つ分洗い終わると、おばあちゃんは台所からひと抱えもある大鍋を二つ持ってきて、水道でざっと洗い、そこにそのまま置いておいた。

それから、家の壁の庇の下に簡単につくってある薪小屋から、薪や杉の葉をひと抱え運んできた。そしてかまどの前にしゃがみこみ、よく枯れた杉の葉をまず敷いて、次に小枝、細めの薪、と置いていくと、エプロンのポケットからマッチを取り出して杉の葉に火を点けた。杉の葉はあっという間に燃え出し、パチパチと音を立てた。炎は小枝に移り、薪をくるんだ。

　完全に薪が燃え始めたと見ると、おばあちゃんは、今度は太めの薪をその上に置き、立ち上がって、まいに鍋を持ってこさせ、かまどの上に置くように言った。鍋に残っていた水が、しゅんしゅんと消えていった。片方の鍋にはバケツで汲（く）んできた水が、もう一方にはバケツ一杯と半分の野いちごが入れられた。

「まい、台所の配膳台（はいぜんだい）の下に砂糖の袋がありますから四つ持ってきて下さい」

　まいは、言われたとおり、台所へ行って砂糖の袋を一度に四つ運んできた。

　おばあちゃんは、またにやりと笑って、

「まいは案外力持ちですね」

と言った。

　それを聞いてまいは、ああ、やっぱり重かったんだと再確認した。でも、褒められたようで少しうれしかった。

　おばあちゃんは袋を二つ分、野いちごの鍋に空けた。

「そんなにお砂糖いっぱい入れると、身体（からだ）によくないんじゃないの？」

　まいは不安になって尋（たず）ねた。ママはいつも、砂糖の摂（と）り過ぎは身体によくないと言っ

ている。

「だいじょうぶです。ジャムなんて一度にいっぱい食べないでしょう。それにうんと甘いほうが、長いこと保存できるんです。さあ、まいはこれでゆっくりかき回して」

おばあちゃんは事もなげにそう言うと、まいに木じゃくしを渡した。そしてあらかじめ出してあった段ボールから次々にいろいろな形や大きさのガラス瓶を取り出し、ふたを開けては煮立ってきた鍋の湯の中にそろりと入れた。そうやって、しばらくぐつぐつ煮た後で、長い菜箸と厚手の鍋つかみを上手に使って順番にすくい上げ、大きな竹ざるに並べて乾かした。

ガラス瓶は冷えると同時に、気持ちのいいほどあっという間に乾いていった。ジャムのほうは、だんだん白いあくがわいてきて、おばあちゃんはそれを丁寧にすくって捨てるように言った。そして、かまどの風通し穴を小さくして、火があまり強く燃えないように調節した。

まいがそうやって、あくをすくってはかき回し、すくってはかき回している間に、おばあちゃんは空いたほうのお鍋に残りの野いちごと砂糖を入れ、同じように混ぜ始めた。

「まいはとっても上手ですね」

混ぜながらおばあちゃんは褒(ほ)めてくれた。

遠くでこじゅけいが「チョットコーイ」と鳴き始めた。

ジャムの匂(にお)いにひかれてか、蝿(はえ)もずいぶん集まってきたけれど、さわやかな乾いた風が時折吹き抜けるので、あまり気にならなかった。まいのお鍋のジャムはそろそろ糸を引き始めた。

「まい、こちらと交代して下さい」

おばあちゃんは木じゃくしをまいに渡すと、おたまを手に取ってお鍋の中を二、三回ぐるぐる回し、ジャムをすくって次々にガラス瓶に入れ始めた。そうやってできたたくさんの瓶詰のジャムは、日常使うほか、棚の奥にしまわれておばあちゃんが人を訪問するときの手土産になったり、まいたちが遊びにきたときのプレゼントになったりするのだ。

ようやく全部の瓶にジャムが詰められ、まだ熱いうちにきっちりふたも締められた。

「今年はまいが手伝ってくれたので、本当に助かりました」

薄く切ったかりかりのトーストにバターを塗(ぬ)り、できたてのジャムをスプーンですくって載(の)せ、ねぎらうように、まいにそれを渡しながら、おばあちゃんが言った。

まいは本当はとてもうれしかったのだけれど、できるだけさりげなく言った。

「来年も、その次も、ずーっと手伝いにくるよ、おばあちゃん」

おばあちゃんはうれしそうに笑って、何も言わなかった。

まいとおばあちゃんのつくったジャムは、黒にも近い、深い深い、透(す)き通った紅(あか)だった。嘗(な)めると甘酸(あまず)っぱい、裏の林の草木の味がした。

その日は夕食まで部屋の整理をして過ごした。夕食はカレーライスだった。たぶん、おばあちゃんはわたしのためにわざわざつくってくれたんだろうな、とまいは思った。

後片づけを済ますと、おばあちゃんは今日つくったばかりのジャム瓶のいっぱい入った段ボールを抱え、まいは紙やはさみの入った箱を持ってリビングルームに移った。

そこで、テレビを見ながら、日付やジャムの名前を書いたラベル張りをした。おばあちゃんのラベルは、長方形の何の変哲もない紙に黒いペンで書いただけのシンプルなものだったけれど、まいのは長方形の四角を落として長い八角形にしたり、色鉛筆を何本も使って縁取ったりした美しいものになった。

「まいはセンスがありますね。これなんか本当にきれいね。組み合わせる色の配色もよ

く計算されているのね」

そう言ってまいの頭をなでながら、

「感性の豊かな私の自慢の孫」

と、独り言のように呟いたので、まいは大いに照れてしまった。おばあちゃんにはそういう、誰はばかることなく身内をほめるところがあった。そして自分がそれを誇りにしていると、まるで植物に水を遣るかのように、さりげなく伝えるところも。

ラベル張りを終えると、まいはそのままテレビを見続け、おばあちゃんは裁縫箱を持ってきて、縫い物を始めた。

そのうちテレビもおもしろくなくなってきたので、おばあちゃんのそばへ行き、何を縫っているのか聞いた。

「だれかさんのエプロンですよ。庭仕事用と台所用と」

それを聞いて、まいは、思わずおばあちゃんの手にしているものを、もう一度見直した。古い水色の服が、裾から三十センチくらいのところで裁断されてある。おばあちゃんは、今その袖口にゴムを入れて縫い縮めているところだ。

「これは、まいのママのナイトウェアだったんです。上の部分はまいの庭仕事用のスモックにしてあげましょうね。裾のほうで、水はね防止用のかわいいエプロンが三つもとれますよ」

まいは、反射的に、

「ふーん」

と言ったが、だんだん胸の中で暖かいものが広がってきて、

「おばあちゃん、大好き」

といつものように早口で呟いて、おばあちゃんの背中に頭をすりつけた。おばあちゃんも、

「アイ・ノウ」

と微笑んで言った。それから、手を動かしながら、何げなく、

「まいは、魔女って知っていますか」

と訊いた。

「魔女？　黒い服を着て、箒に乗ったりする魔法使いのこと？」

「そうです。まあ、実際には箒に乗ったりすることはほとんどなかったでしょうけれどね」

「え？　魔女って本当にいたの？　テレビや、マンガや、物語だけのお話じゃないの？」

「そうねえ、まいの思っているような魔女とは、ちょっと違うかもしれませんけれど、本当にいたんですよ」

まいは思ってもいない話の展開に、今までまどろんでいた頭が急に覚醒していくような感じを覚えた。

「どんなふうに違っていたの？　ねえ、おばあちゃん」

「そうねえ、まいは病気になったらどうします？」

「病院に行くよ」

「明日の天気が知りたかったら？」

「天気予報を聞く」

「そうね、でも、ずーっと昔、病院もなくて、気象庁もテレビもラジオも新聞もなかっ

たころ、キリスト教すらなかったころは、どうしていたと思います？」

「キリスト教って、えーっと、それ、紀元前ってこと？」

「そうです、そのころだって人はたくさんいましたからね。今ほどじゃありませんけれど、もちろん。そのころ、人々は皆、先祖から語り伝えられてきた知恵や知識を頼りに生活していたんです。身体を癒す草木に対する知識や、荒々しい自然と共存する知恵。予想される困難をかわしたり、耐え抜く力。そういうものを、昔の人は今の時代の人々よりはるかに豊富に持っていたんですね。でも、その中でもとりわけそういう知識に詳しい人たちが出てきました。人々はそういう人たちのところへ、医者を頼る患者のように、教祖の元へ集う信者のように、師の元へ教わりに行く生徒のように、訪ねて行ったのです。そのうちに、そういうある特殊な人たちの持っているものは、親から子へ、子から孫へ自然と伝えられるようになりました。知恵や知識だけでなく、ある特殊な能力もね」

「それはつまり……」

まいは、頭の中を整理しながら言った。

「超能力？　超能力が、遺伝するってこと？」

おばあちゃんは、針を動かす手を止めて、近くの煙草と灰皿を引き寄せた。そして、ポケットからマッチを取り出して火を点け、ふうっと一服すると、

「そういうと、何かとてつもないもののように聞こえますけれど、多かれ少なかれ人にはそういう力があるんですよ。でも、人より多くそういう力のある人はいますね。人より上手に歌が歌えたり、計算が早くできたりする人がいるようにね。わたしの祖母がそうでしたよ」

「歌がうまかったの？」

おばあちゃんは笑いながら、

「そう、歌も上手でしたね。でも、もっと彼女に際立っていたのは、予知能力、透視、とでもいうのでしょうか、そういう能力でした」

まいは、息をのんでおばあちゃんの次の言葉を待った。

「わたしの祖父が日本に来たことがあったのは、まいも知っていますね。そのころ、祖母はまだ十九歳の若い娘で祖父とは婚約中でした。ある日の午後、彼女が結婚に備えて

何枚もの布巾を縫っていると、突然目の前に夜の海が広がって……」

「ええー？」

驚いて目を丸くするまいを、おばあちゃんはにやりと笑って制した。

「その中を祖父がたった一人で泳いでいるのが見えたのです。彼女は、彼が泳いでいる方角は間違っていると直感し、思わず、右へ、と叫びました。その瞬間海も祖父も消え、彼女の手には縫いかけの布巾が戻り、今のはまた白昼夢だったのだと悟ったのです。彼女にはそれが初めての経験ではありませんでしたから」

「そういうことがよくあったの？」

「ええ。彼女にはね。ちょうどそのころ、横浜から神戸に向かう途中の船で、眠れぬ夜を過ごしていた祖父は、甲板に出て夜風にあたっていました。そして、ふとしたはずみで、なんとまあ、海に落ちてしまったんです」

おばあちゃんは肩をすくめてささやくように言った。

「この世でいちばん起こってほしくないことの一つですよね。夜の海に落ちるなんて」

「それで、それでどうなったの？」

「不幸なことに、だれも祖父が落ちたことに気づかず、船はそのまま行ってしまいました」

「きゃー」

まいは悲鳴をあげて、両手で拳をつくり口のところにあてた。

「それで、それで？」

「しかたなく、船の行ってしまった方向へ向かって泳ぎ始めました。しばらくして彼は本当に惨めで孤独で心細く、泣きたくなりました。そして、このまま死んでしまったら、たぶん彼の婚約者には彼に何が起こったのか、一生わからないままだろうと思いました。彼はたまらなくなって、祖母の名前を呼びました。そのときです。突然祖母の懐かしい声があたりに力強く響いたのです。右へ、と」

まいはぞくっとして、思わず背筋をピンと伸ばした。

「彼は迷わず右へ向かって泳ぎだしました。もう寂しくも心細くもありませんでした。それから彼は砂浜に上陸でき、漁師小屋で震えているところを朝になって発見されました。そして、もしあそこで方向を変えなかったら、彼は今ごろ大渦巻きにのまれていた

だろうと聞かされました」

「ひゃー怖(こわ)ーい」

「祖父は旅の途中で、祖母にその不思議な体験を書き送りました。祖母はその返事に、祖父が助かった喜びとねぎらいのほか、何も述べませんでした」

「どうして？　あなたを助けたのはわたしなのよって、言ったらよかったのに」

「そういう時代だったのです。あまりにも長い間、祖母の持っていたような力は忌(い)み嫌(きら)われてきたのです。ある秩序(ちつじょ)の支配している社会では、その秩序の枠(わく)にはまらない力は排斥(はいせき)される運命にあったのです。祖母の時代ではあるいは排斥されないまでも、普通の幸せは望めなかったでしょうね」

「そうなのかなあ。今ならテレビスターになれるのにね」

おばあちゃんは力なく笑った。

「まいはそれが幸せだと思いますか。人の注目を集めることは、その人を幸福にするでしょうか」

まいは考え込んでしまった。まいたちの世代にとっては、テレビスターになるとい

うことはつまり成功を意味していた。成功ということは幸せだということではないの？
でも、ああいうふうに毎日人から注目されたり騒がれたりしていたら大変かもしれない。
「よく分かんないよ」
「そうね、何が幸せかっていうことは、その人によって違いますから。まいも、何がまいを幸せにするのか、探していかなければなりませんね」
まいはまだ考え続けながら言った。
「でも、人から注目を浴びることは、一目置かれることでしょ。そしたら邪険な扱いを受けたりいじめられたり……無視されることはないわけでしょう？」
「いじめられたり無視されたりするのも、注目されているってことですよ」
おばあちゃんは、まいの頬をなでながら優しく言った。
「あ！」
まいは、突然すっとんきょうな声を出した。
「もしかして、うちは、だから、そういう家系なの？」
「大正解」

おばあちゃんはにやりとした。

「でも今日はここまでにしましょう。夜もだいぶ更けてきました」

その夜、ベッドの中で、まいはそういう不思議な事件が自分の身の回りに起こったことがあっただろうかと、あれこれ思い返してみた。そして、どう考えてもわたしにはそういう力はない、という結論に達して、半分安心し、半分残念に思いながら眠りについた。

夢を見た。

真っ暗な、星一つない空と境目のない海。漆黒のビロードのようにまとわりつく海水。自分のたてる波音だけがあたりに響く。

まいは寂しかっただろうか。いや、そんなことすら考え及ばないで、ただ、ひたすら泳いでいた。ひとりきりだった。

そのとき、ある声が自分の内と外から同時に響いた。

「西へ」

次の日、まいが目を覚ますと、もうおばあちゃんは庭で草木に水をやっていた。昨日と同じように雲一つないいい天気だった。まいはパジャマのままで庭に出た。

「おばあちゃん、おはよう」

「おはよう、まい」

おばあちゃんは、水道の水を止めて、エプロンで手を拭(ふ)きながら、

「まいは植物の名前をどれくらい知っているかしら？」

と、いたずらっぽく笑いながら訊いた。

まいは唇(くちびる)に手をあてて考えながら、

「おばあちゃんが前にいくつか教えてくれたでしょう、これが金木犀(きんもくせい)で、これがバラ。まん中の大きな木が樫(かし)の木でしょう、秋にどんぐりがいっぱい落ちる……」

「そうです。よく覚えていましたね。ではこれは何だか分かりますか？」

と言って、おばあちゃんはバラの繁(しげ)みの間に勢いよく伸びている水仙のような葉っぱの群れを指した。

「水仙かなあ。違う？」

おばあちゃんはにやりとしたまま黙って首を横に振った。

「分かんないなあ、何なの、おばあちゃん」

「まいのよく知っているものですよ。に・ん・に・く」

「え？　あの臭いにんにく？　どこになるの？」

「ほほ、にんにくは球根のように地面を掘って収穫するんです。こうして、バラの間に植えておけば、バラに虫がつきにくくなるし、香りもよくなるんです。さあ、着替えていらっしゃい、朝ご飯にしましょうね。今日はお味噌汁とご飯ですよ」

「はーい」

まいは、こういうことを教わるのがうれしかった。夕べおばあちゃんの言っていた不思議な話の一部のような気がして。

朝食が済むと、鶏小屋の戸が開けられて、鶏たちが外に出てくる。雄鶏が一羽と雌鶏が三羽いる。雄鶏はいかにも尊大な様子で頭を高く上げ、周囲を睥睨しながら他の雌鶏を従えて出てくる。まいたちが毎朝食べているのはこの鶏たちの卵だ。

今日も天気がいいので、雄鶏は機嫌よく日光浴をしながら、羽をバタバタッとさせ、コケコッコーと鳴いた。そして、足で庭土を後ろに蹴りながら、せわしなく頭を上下させてミミズや虫を探している。他の雌鶏たちもそれに倣って、思い思いにあちらこちらつついている。雌鶏のうちの一匹がミミズなりオケラなり見つけると、すかさずやってきて横取りするのはいつもこの雄鶏だ。

まいはこの雄鶏をこっけいに思うと同時に、そういう場面に出くわすと、いつも腹が立って雌鶏たちの仕返しをしてやりたくてたまらなくなる。けれど、以前に箒の柄でつついて、逆上した雄鶏に飛びかかってこられたことがあるので、それからは用心してあまり近づかないことにしていた。

以来、まいと雄鶏はお互いに何となく意識しあって、(雄鶏がどう思っているのかは誰にもわからないのだが、雄鶏もしょっちゅうまいの方をちらちらと見るのは事実である)ぎくしゃくしている。

まいは雄鶏の視線を感じつつ鶏たちの横を通り、野いちごのあった林を抜けて、丘の上まで出た。そして、思いきり深呼吸した。五月の新緑の匂いが胸いっぱいに充満

した。

丘から下の方へ向かって斜めに細い道が延びていた。イタドリやギシギシ、蓬（よもぎ）などで半分覆（おお）われているが、昔おばあちゃんに連れられて降りていったことがあった。

まいは、そのときのことを思い出して何となくその道を降りていった。あのときはどこに行ったのだったか……よく覚えていないけれど、何か不思議なものを見たような思い出がある。

五メートルほど降りていったところに、回りを木に囲まれた陽当たりのいい場所があった。そこから左に竹林、右に杉林が始まっており、道は更に杉林の奥まで続いていた。

その目の前の陽当たりのいい場所は、ほの暗く湿った竹林や杉林の間に、ぽっかりと天に向かって開いたような所で、まいの記憶にある場所とは違っていたけれど、まいは何だか妙にその場所が気に入った。

古い切り株が幾つもあり、それぞれの窪（くぼ）みに、花をつけたあとのすみれが幾株も、弾（はじ）けんばかりの莢（さや）をつけて収まっていた。このすみれが全部花をつけている様を想像して、

まいはうれしくなり、そしてそれを見逃したことを残念に思った。

切り株の一つに腰をかけると、気持ちがしんと落ち着いてきて、穏やかな平和な気分に満たされる。

若い楠や栗の木、樺の木などが回りをぐるりと囲んでおり、まいはそこに座っていると、何かとても大事な、暖かな、ふわふわとしたかわいらしいものが、そのあたりに隠れているような気がした。小さな小鳥の胸毛を織り込んで編まれた、居心地のいい小さな小さな巣のようなもの。

「わたしはここが大好きだ」

まいはだれにともなく呟いた。

昨日と同じようにホトトギスが鳴き始め、さわやかな風が吹き抜けた。まいは、おばあちゃんが昨夜話してくれたことを、もう一度ゆっくり自分の言葉で考えようとした。

――もしそれが本当なら、(たぶん本当なんだろう。おばあちゃんが嘘をつくなんて考えられない。しかもこんな荒唐無稽の。)わたしにだって魔女の血が流れていることになる。ということはわたしにもこれから先、超能力が出てくるかもしれないってこと

だ。ちょっと怖いような気がするけれど、もし、そうなったら、もう学校のことでこんなにつらい思いをしなくてもすむんじゃないだろうか。すいすいと、まるで水の中を泳ぐ魚のように様々な障害を避けながら、スムーズに生きていけるようになるんじゃないかしら。

まいはそう思い立つと何だかうきうきとして、目の前が明るくなっていくような気がした。

その日の夕食のあと、リビングで縫いものを始めたおばあちゃんに、まいは思い切って訊いてみた。

「おばあちゃん、わたしもがんばったら、その、超能力が持てるようになるかしら」

おばあちゃんが、思いがけない言葉を聞いたように、まじまじとまいを見つめたので、まいは何だか自分がひどく軽薄なことを言ったような気がして思わず赤くなった。

「そうね、まいは生まれつきそういう力があるわけではないので、相当努力しなければなりませんよ」

おばあちゃんは何か考えながら、ゆっくりと言葉を選んで言った。

「わたし、がんばる」

まいは、破れかぶれのひたむきさで応じた。

「だから、教えて、おばあちゃん。どんな努力をしたらいいの？」

「よろしい」

おばあちゃんはわざと真面目(まじめ)くさって応(こた)えた。

「それではまず、基礎トレーニングをしなければ」

「基礎トレーニング？」

「そうです。超能力というのは要するに、精神世界の産物ですから、これを統御(とうぎょ)するには精神力が必要です。スポーツをやるときに、例えば水泳の選手でも陸上トレーニングをしたり、バレーボールや野球の選手でも、直接競技には関係のない、腕立て伏(ふ)せや柔軟体操などをしますね。なぜ？」

「体力をつけるためでしょう」

「そう。スポーツをするのに体力が必要なように、魔法や奇跡を起こすのにも精神力が必要です。腕の力が全くなくては、ラケットやバットは振れないでしょう」

「じゃあ、おばあちゃんは精神力をつけるために基礎トレーニングが必要だっていうのね」
「そうです」
まいは何だかいやな予感がしてきた。
「精神力って、根性みたいなもの？」
自分には根性という言葉で総称されるような、いわゆる持久力のたぐいが徹底的に欠けていると、まいは常日頃からひそかに認めていた。もし、魔女になるのに根性がいるというのだったら、まいはゼロからのスタートどころかマイナスからのスタートになる。見通しはずいぶん暗い。
「根性という言葉は、やみくもにがんばるっていう感じがしますね。おばあちゃんの言う精神力っていうのは、正しい方向をきちんとキャッチするアンテナをしっかりと立てて、身体（からだ）と心がそれをしっかり受け止めるっていう感じですね」
「ふうん」
まいはわかったようなわからないような変な気持ちだった。

「座禅を組んだり、瞑想したりするの？」

おばあちゃんは、またにやっとして、

「それはまだちょっと早いですね。いきなりバットを振って肩を脱臼するようなものです」

まいはがっかりした。座禅も瞑想もまだ早いのだったら、超能力で未来を予知したり、呪文を唱えて何かに変身するなんてことは、もう気が遠くなるくらい先のことではないか。

「いいですか、まい」

おばあちゃんはわざと冗談めかし、声をひそめて言った。

「この世には、悪魔がうようよしています。瞑想などで意識が朦朧となった、しかも精神力の弱い人間を乗っ取ろうと、いつでも目を光らせているのですよ」

半分冗談だと思いながらも、まいは背筋がゾクッとした。

「おばあちゃん、悪魔って本当にいるの？」

と、おそるおそる訊いた。きっと否定してくれるものと思いながら。

でもおばあちゃんからの答えは簡単明瞭(めいりょう)だった。

「います」

まいは一瞬息をのんだ。

おばあちゃんはまたにやりとして、

「でも、精神さえ鍛(きた)えれば大丈夫」

「どうやって鍛えるの？」

まいは畳(たた)みかけるように熱心に訊いた。

「そうね。まず、早寝早起き。食事をしっかりとり、よく運動し、規則正しい生活をする」

この返事を聞いたときのまいの気落ちを想像していただけるだろうか。まいはしばらく黙(だま)っていたが、やがて深いため息をついた。

「わたし、そんなのすっごく苦手。夜は遅くまで本を読んでいるし、休みの日にはお昼過ぎまで寝ていることもある。体育も見学していることのほうが多いくらいだし、ご飯も食べたり食べなかったり……でも今おばあちゃんが言ったことは『体力を養う』こと

で、『精神を鍛える』ことではないんじゃないの？」

おばあちゃんはうなずいた。

「不思議ね。最初はほとんどおんなじなのね」

まいは更に食い下がった。

「おばあちゃんの言うとおり、悪魔が本当にいるとして、そんな簡単なことで、悪魔が本当に防げるの？」

「本当に、大丈夫。悪魔を防ぐためにも、魔女になるためにも、いちばん大切なのは、意志の力。自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力です。その力が強くなれば、悪魔もそう簡単にはとりつきませんよ。まいは、そんな簡単なことっていいますけれど、そういう簡単なことが、まいにとってはいちばん難しいことではないかしら」

まったくそのとおりなので、まいは唇をとがらせて、不承不承うなずいた。

おばあちゃんは微笑んだ。

「まいにとっていちばん価値のあるもの、欲しいものは、いちばん難しい試練を乗り越えないと得られないものかもしれませんよ。まあ、だまされたと思って」

まいも、このころにはもう覚悟ができてきた。

「分かった。やってみる……ことにする」

おばあちゃんはうれしそうににっこりと笑った。

「よく言いました。偉いね、まい。じゃあ、自分で朝起きる時間から寝る時間まで決めてごらんなさい。そして、それをきちんと紙に書いて壁に張って」

「おばあちゃんはいつも何時に起きるの？」

「六時です」

「六時は絶対無理。じゃあ七時にするわ」

「それだと、ちょうど一緒に朝ご飯が食べられますね」

おばあちゃんは励(はげ)ますように言った。

「睡眠時間を八時間とるとすると……十一時には眠らないといけない……でも、きっとわたし、眠れないわ。寝つきがひどく、ひどく悪いの」

「まあ、眠れなくても、七時には起きましょう。まいはいつもは何時に寝るの？」

「二時か、三時かな」

おばあちゃんは目を丸くしたが、そのことについては何も言わなかった。

「あと、身体（からだ）と頭のために何かしましょう」

「わたし、運動は苦手なんだけど……」

「掃除と洗濯。やったことある？」

「毎日じゃないけど、ある」

「午前中はそういう家事エクササイズに当てましょう。午後はまいが自由に時間割を組んで、頭のために空けましょう。学校の勉強でも、読書でも何でもいいのよ」

まいの目がぱっと、輝いた。

「じゃあ、それ、今夜じゅうに考えるわ」

「十一時までにね」

おばあちゃんが念を押した。

「ねえ、おばあちゃん。意志の力って、後から強くできるものなの？　生まれつき決まっているんじゃないの？」

まいは聞いてみた。

「ありがたいことに、生まれつき意志の力が弱くても、少しずつ強くなれますよ。少しずつ、長い時間をかけて、だんだんに強くしていけばね。生まれつき、体力のあまりない人でも、そうやって体力をつけていくようにね。最初は何にも変わらないように思います。そしてだんだんに疑いの心や、怠け心、あきらめ、投げやりな気持ちが出てきます。それに打ち勝って、ただ黙々と続けるのです。そうして、もう永久に何も変わらないんじゃないかと思われるころ、ようやく、以前の自分とは違う自分を発見するような出来事が起こるでしょう。そしてまた、地道な努力を続ける、退屈な日々の連続で、また、ある日突然、今までの自分とは更に違う自分を見ることになる、それの繰り返しです」

おばあちゃんはゆっくりと続けた。

「ただ、体力をつけたり、他の能力をつけたりするのと違って、意志の力をつけることの難しいのは、それに挑戦するのが意志の力の弱い人の場合が多いので、挫折しやすいということですね」

なるほど、と、まいは心の中で呟いた。

「さあ、もう部屋に戻って明日からのプランを練(ね)りましょう」

まいがリビングから出ようとしたとき、おばあちゃんは何げなく付け足した。

「私は、まいの意志の力が弱いと思ったことはありませんよ」

まいは驚いておばあちゃんの顔を見た。おばあちゃんは笑っていた。

「わたしは弱いと思う」

まいは力なく言うと、自分の部屋へ戻った。そして、ベッドの中に紙とペンを持ち込んで、午後の時間割を考えた。

まいは数学や理科が苦手だ。だからこれらには十分時間を割(さ)く必要があると考えた。国語や英語は好きだ。だからこれらにも十分時間をとりたいと考えた。

いろいろ考えた末、文系と理系の教科を一つずつ合わせて一単位とし、午後は二単位することにした。例えば国語と数学、少し休んで、英語と理科をやる、というふうに。国語は、ママの昔の本棚に並んでいる本の中から好きな本を読むことにし、英語はおばあちゃんに教えてもらうことにした。

「よーし、決めた」

時計を見ると十時半だった。階段をギーギーいわせて、おばあちゃんが登って来る音がした。

「まい？」

ドアを小さくノックしながら、おばあちゃんが小声でささやいた。

「はい、どうぞ」

おばあちゃんはそうっと入ってきて、まいの枕の上の方のベッドの柱に何か吊り下げた。平和な台所の香りがした。

「何、これ」

「ゆっくり眠れるおまじないですよ。ナイ、ナイ、スウィーティ」

「ありがと。おやすみ、おばあちゃん」

おばあちゃんは軽く手を振りながら出ていった。

見ると吊り下げてあるものは、ネットに入ったたまねぎだった。

それからまもなく、まいは暗示にかかったようにぐっすりとよく眠った。まだ十一時になっていなかった。

次の日、まいは六時に目を覚ましたが、まだ早いと思いまた眠り込んだ。そして、おばあちゃんがドアをノックする音で気がついた。

「まい、七時ですよ」

「はーい」

パジャマのまま慌てて下に降りていくと、

「さあ、まい、着替えて卵をとってきて下さい」

と言われたので、またもう一度屋根裏に戻って、Tシャツとショートパンツに着替えた。

そしておばあちゃんからボウルを受け取ると、外に出て鶏小屋へ向かった。

卵をとりにいくのはこれが初めてではない。以前にも泊まりにきて、朝ママと二人でとったことがある。まだ温かい、糞と羽毛のちょっぴりついた生みたての卵。本当のことを言うと、まいはこんな生みたての卵を食べるのは気持ち悪かった。親鶏の、「何をするんだ」と言わんばかりに騒ぎ立てる声も後ろめたさをかきたてた。でもそのことをそのままおばあちゃんに言うには、まだまいには遠慮があった。

「本当に扱いにくい子だよ」

まいは、前にママが電話で言っていた言葉を無意識に口にしていた。

今日もいい天気だ。まだひんやりと夜露を含んだような空気を、朝の日差しがどんどん日中の空気に造り変えていく。

鶏小屋の横にある飼料袋から餌をすくって餌箱に入れ、鶏たちが餌箱に集まった間に、まいは小屋の前に置いてある、料理で使うおたまの柄に細く長い棒をくくりつけたものを取って細めに戸を開け、鶏たちを刺激しないようにそろそろとそれを差し込んでいき、巣の中にある卵をまず一つ取った。

あの雄鶏が餌をついばみながら、ちらりとこちらを見たが、今回は不問に付すとでもいった鷹揚さで一瞬目を閉じただけであまり騒がなかった。

まいは持ってきたボウルに採った卵を入れて、もう一度同じことを繰り返した。

台所に帰ると、もうフライパンの中でハムがじりじりと焼かれて待っており、おばあちゃんは

「ありがとう」

と言うが早いかボウルから両手で二個をとり、そのままコンコンと流しの角にぶつけてフライパンに割り入れ、あっという間にハムエッグをつくった。
わたしだったら、まず卵を洗うなあとまいは思ったが、おばあちゃんは見事に卵の汚い箇所を避けて割っていた。
朝食がすむと、おばあちゃんは二人の使った食器を流しに持っていき、手早く洗った。まいはそれを見ながら、明日からはわたしがしようと思った。それだけではなく、おばあちゃんのするどんな動作も、まいは注意深く見守った。——何のために？　いつかおばあちゃんの役に立つために。まいは、本当に心の底からおばあちゃんが好きになり始めていたのだ。
「今日は表の道路に清掃車が来る日ですから、まいも部屋にゴミがあったら持っていらっしゃい」
おばあちゃんに言われて、まいは部屋からくず入れを取ってきた。
「普通の白い紙は捨てないでね。カラー印刷のしてある紙やプラスティック、ビニール製品はこの袋に入れてちょうだい」

「普通の白い紙って、こういうの？」

まいは書き損じのルーズリーフを見せた。

「そう、焚き付けにしますから」

おばあちゃんのうちのゴミは、まいのうちのゴミの量の五分の一ぐらいしかなかった。

まいはそれを持って、表の道路に出しにいった。

門から表の道路までの小道は、両側から楓が枝を差しかけて、すがすがしい新緑の天井になっていた。透明な風が吹き抜けるようだった。

小道が大きくカーブしているところで、まいは小道の両側に注意深く目をやった。もうずいぶん昔のことになるが、まいはここで蛇が道を横切るのに出くわしたことがあるのだ。

小学校に入ったばかりの年の夏。

午後、この小道にござを敷き、宿題の絵を一人で描いていた。

ふと、蟬時雨が一瞬やみ、しんとした風景が辺りに深い影を落とした。そのとき、右の藪から大きなシマヘビが、まるでこの世で唯一動いているもののように小道をゆっく

りと横切った。そして左の藪へ入る直前に、急に鎌首をもたげたかと思うと、徐ろにその首を左から右へ動かし、辺りを見回した。

　まいは見つかったらどうしようと恐怖を感じつつも、すくんでしまって動けなかった。幸いにも目は合わずに済んだけれど、もし、合ってしまっていたらどうなっていたのだろうとまいは時々思う。あの蛇は必ずまいがまだひ弱な子供だということを見通して、何か信じられないようなことをしかけたに違いないと思う。

　あれ以来、ここを通るたびに、まいはあの凍るような恐怖を思い出し、用心深くなってしまう。

　けれど、それだけを恐れて、この美しい小道を通ることをやめるのはあまりにも悔しいと、まいはいつも自分を励ましてここを通る。よし、今度も何とか大丈夫だった。

　表の道路は明るかった。向かいの竹林が風にざざーっと音を立てた。そして、数匹の犬が一斉に吠えたてた。あのずうずうしく庭に入り込んできた男の家の犬たちだ。

　まいは目印の電信柱の下にゴミの袋を置こうとした。すると、すでにそこにひもでくくられた何冊かの雑誌が置いてあるのが目に入った。いちばん上の表紙には女の人の裸

の写真が奇妙な姿態で載っていた。

すっかり湿気を吸って歪んでしまったようなその本は、明るい陽の光の中でそこだけ暗い陰湿な臭いを発散させているかのようだった。

まいは思わず目を背けた。そしてその目を消毒してしまいたかった。こののどかで鷹揚な田舎の風景は、そういう異質なものすら拒絶せずにそこに溶け込ませているのだった。

しかし、まいはその不思議な田舎の許容の仕方を、信頼していた何かの裏切りのように感じ、足早にそこを立ち去った。犬たちが追い立てるようにますます吠えたてた。

たぶん、あの人だろう、あの、おばあちゃんたちがゲンジさんと呼んでいた男。そうに違いないと、まいは心の底から沸き起こる黒雲のような嫌悪感でいっぱいになりながら、おばあちゃんのところへと走った。

——台無しだ。これですべて台無しだ、何もかもおしまいだ、あの、下品で、粗野な、卑しい男のせいで。何で、あんな男がわたしの生活にかかわってくるの？　ほとんど、うまくいきかけていたのに。

まいは犬に吠えられたことも加わって、嫌悪と憤りでほとんど息が詰まりそうだった。

おばあちゃんは裏庭にたらいを出して、洗濯の準備をしようとしていたところだった。血相を変えて走って来るまいを見て、ちょっと驚いたようだったが、すぐにいつもの表情に戻って声をかけた。

「まい、台所の汚れたテーブルクロスと布巾を持ってきて下さい」

まいは、たった今受けたばかりのショックを口にしておばあちゃんに伝えることは不可能だと瞬時に悟った。それはあまりにもここにそぐわなかった。そしてまいは、あの雑誌のことはしゃべりたくなかった。それで黙っておばあちゃんに言われたものを台所から持ってきた。ほかにどうしていいかわからなかったから。

おばあちゃんはまた大鍋でお湯を沸かしていた。そして、ありがとう、と言って、受け取ると、その布巾類と石鹸を一緒に鍋の中に入れて煮始めた。

「まい、たらいの中で足踏みをしてシーツを洗って下さいね、裸足になって」

まいはやはり黙ったままで、言われたとおり、裸足になってたらいの中に入り、足踏みをし始めた。冷たい水が足首のあたりでパシャパシャとはね、気持ち良かった。踏ん

でいるうちにどんどん泡が出て、水が少しずつ濁っていく。まいは熱心に踏み続けた。いつまでも踏み続けていたかった。

「まい、その調子よ、上手、上手。そろそろその水を流して、すすぎに入りましょう」

まいは一旦たらいの外に出て、石鹸水を流した。おばあちゃんはたらいにまた新しい、冷たい水を注いだ。まいは今度は泡を押し出すように踏み続けた。最後のすすぎの水は陽の光にきらきら光った。

すすぎ終わると、おばあちゃんとまいはシーツの端と端を持って反対方向にひねって絞った。びっくりするくらい水が出て、それからもう一度広げて畳んでいき、ぱんぱんとたたいてしわを伸ばした。おばあちゃんはそれをふわりとラベンダーの茂みの上に広げた。

「汚れない？」

「さっき、上から水をかけておいたのできれいです。こうすると、シーツにラベンダーの香りがついて、よく眠れます」

大鍋の中で煮沸されていた布巾類は、びっくりするくらい真っ白になっていた。そ

れを冷たい水にさらして、一枚一枚絞っていき、庭に渡された洗濯ロープにかけていった。

　まいはとても熱心に、たらいの洗濯物を踏み続けたので、全部の洗濯が終わるころにはさすがに少し疲れていた。

「ここには洗濯機はないの？」

「昔はありましたね。でも、私一人になってからあまり使わなくなって、そのうち壊(こわ)れてしまいました」

　そのうち壊れてしまいました、と、おばあちゃんは実に悲しそうに、でもどこかとぼけて言ったのでまいは思わず吹き出した。なんだか力が抜けていくようだった。

　昼食を食べたあと、まいは昨日見つけた、あの裏山の日当たりのいい場所に出かけた。そして木の切り株に腰を下ろして、ただぼんやりと時を過ごした。

　シジュウカラやコガラ、エナガなどのカラ類の一群が目の前の若い榛(はしばみ)の木にやってきて、ひとしきりさえずったあと、どこかへ飛んでいった。そしてまた静かになった。

　まいはすぐそばの枯(か)れ葉(は)を取って手のひらに載(の)せた。この陽の光も、乾(かわ)いた枯れ葉(は)に

覆われた柔らかな腐葉土も、まいを守るように取り囲んでいる新緑に輝かんばかりの若い木々も、まいは心から好きだと思った。

そこにいるだけでまいは一刻一刻を楽しんだ。一息一息の空気でさえ甘露のように味わった。今朝の出来事にあれほど動揺したのが嘘のようだった。

しばらくそうしていたが、午後から勉強する予定があったのを突然思い出し、慌てて立ち上がった。そしてもう一度深呼吸してから家に戻った。

翌日、朝食を食べながら、おばあちゃんがふと思い立ったように、

「まいちゃんも、どこでも好きなところ、畑を作ってもいいですよ」

と言った。

まいは一瞬何のことか分からずに、ポカンとおばあちゃんの顔を見つめ返した。

「おばあちゃんのうちの庭の中、山の中で、まいの好きな場所を選びなさい。そこをまいにあげましょう」

パンを口に運びかけていたまいの手は、止まったままだった。思いもかけないプレゼ

ントだった。うれしくてほとんど息が詰まりそうだった。

「どこでもいいの？」

と、まいは息をひそめて聞いた。この幸運が逃げていかないように。

「どこでも。ブラッキーの墓のほかは」

おばあちゃんはうなずいた。

まいの魂は一瞬にして現し身を抜け、庭や野山を風のように駆け巡った。そして決めた。

「おばあちゃん、わたし、決めた。いちばん好きな場所」

「もう？　それじゃあ、後からそこへ行きましょう。でも、その前に、それを早く食べてしまいなさい」

もう朝ごはんどころではなかったけれど、まいはきちんと最後まで食べた。そして台所へ食器を持っていき、おばあちゃんの分まで洗った。それから、普通のタオルくらいの大きさのある布巾で丁寧に拭いた。おばあちゃんのうちの布巾は皆大きかった。拭き終わると、棚にしまい、最後に布巾を洗って絞り、畳んでパンパンとたたき、台所ドア

の外の布巾掛けに干した。そして、ドアとドアの間に生えているあの勿忘草のような雑草にも忘れずに水をやった。まいはその日最初にそこを通るとき、いつもそうすることにしていた。これはまいが毎日秘かに実行すると決めたことの一つだった。

おばあちゃんは、裏庭の繁りすぎたセージを、手際よくパチンパチンとはさみで切っては、あけびの蔓で編んだ籠に入れていた。別の籠には、朝食前にすましたらしいミントの葉の大盛りがすでに入れてあった。ミントとセージのすがすがしい草いきれでむせかえるようだった。

横のかまどでは、お湯が沸騰し始めていた。

「まい、うちにある鍋やボウルを全部持ってきて下さい」

まいは言われたとおり、台所に入って鍋やボウルを可能なかぎり重ねて持ってきた。

「ありがとう。それを地面に並べて置いて下さい」

まいがそうすると、おばあちゃんは端からミントとセージの葉を入れ、上からお湯をかけていった。

「さあ、これでよし。帰ってきたらミントティーとセージティーができていますよ。さ

あ、行きましょう」

と、おばあちゃんは促(うなが)すように微笑(ほほえ)んだ。

まいは裏山へ向かう道を歩きながら、

「でも、おばあちゃん、あんなにいっぱい何に使うの？　わたしの薬なの？」

と、少し不安になりながら聞いた。

「ふふふ。違いますよ。あれはみんな私の庭や畑が飲むんです。虫よけの薬になります」

「ふうん」

鶏小屋の横まで来たとき、おばあちゃんはちょっと立ち止まって、

「まいはこの草の名前を知っていますか？」

と言って、小屋の前に堂々と根を張っている一株の草を指した。

「わかんない。何て名前？」

「クサノオウといいます。いかにも草らしい草でしょう？　けれど猛毒です。気をつけなければなりませんよ」

「見ただけでは全然わからないわ。どこにでもある草みたいだけれど」

おばあちゃんは近づいていって葉をつまみ、さっと茎から裂いた。見る見るうちに、まるで血のような汁が出てきた。

「決してこの汁を口に入れてはいけません。けれどもおもしろいことに、この汁は同時に大変優れた薬にもなるのですよ。特に眼病の特効薬です。でも、繰り返して言いますが、決して飲んではいけません」

おばあちゃんがひどく真面目な顔だったので、まいも緊張して、

「わたし、飲むも何も、絶対近寄らないわ」

と宣言した。

おばあちゃんは、ちょっと微笑んで言った。

「今はね。そのほうがいいかもしれませんね。でも、そのうち詳しい使い方を書いておいてあげましょう。いつか必要なときがくるかもしれませんから」

外でミミズをつついていた雄鶏が、さっきからまいのほうをチラチラと見ていた。まいも気がついて、

「元気？」

と、声をかけた。雄鶏はもちろん返事はしなかったけれども、満足そうに瞬きをしてミミズつつきに専念し始めた。

「仲がいいのね」

おばあちゃんがおもしろそうに言った。

「ううん」

まいは、おばあちゃんのようににやりとした。

「すごく悪いの」

「あらあら」

おばあちゃんは笑った。

「まいも魔女らしくなってきましたね」

摘み残した野いちごがチラホラと残る明るい林を過ぎ、丘を越えて、まいは杉林と竹林の間の陽の当たる場所を指し示した。

「ここよ。おばあちゃん」

おばあちゃんは微笑んで、少しためらったあと、その場所に入っていった。そして、切り株の一つに腰を下ろした。

「ここはまいの好きそうな場所ね。古い切株たち。昔、私たちがここに移り住む直前に、ここにあった木たちが切られたのです。下見に来たときは、小さいけれども見事な森だったのに。私はその素晴らしくいい香りをさせている新しい切り株を見て、とても悲しかった。でも、今はこうやって切り株の間にすみれが花を咲かせるようになったり、若い木たちも伸び伸び葉を繁らせていますねえ。野バラもあるのね。私はあのときの悲しい思いがずーっとあったので、こうやって、ここでゆっくりと時を過ごすことがなかったのだけれど」

おばあちゃんは独り言を言うように遠くを見つめながら言った。

「どれくらい昔の話?」

「そうねえ、四十年くらいになりますか。そのころはまだ表の道路も舗装されていなくて、とても細くて車もほとんど通らないくらいでした。ここと竹林との境が段になっているでしょう」

「うん」

「そこからこっち、杉林までと、今、通ってきた裏庭から丘、それに畑と前庭、おじいちゃんが買ったのです。当時は、今よりも辺鄙（へんぴ）で不便なところでしたけれど、おじいちゃんはできたら山ごと買いたかったんです」

「じゃあ、この場所はぎりぎりうちの土地なのね。あの竹林から向こうは違うのね」

「そうです。よかったわ。まいはここが好きなのね……。でも、ここに畑ができるかしら」

まいは、はっとして気分が重くなった。こんなにたくさんの切り株。張り巡らされた根。ここを耕すことができるだろうか。何より、ここを畑にしたらここはここでなくなってしまう……。でも、まいはここが大好きだ。おばあちゃんがどこかをまいの土地にしてくれると言うのだったら、まいはここ以外考えられなかった。

黙（だま）り込んでしまったまいを見て、おばあちゃんは慰（なぐさ）めるように言った。

「ここはまいの場所にしましょう。でも、いじらないで、このままにしておいて、植えるものは、そうね……野アザミとか、ツリガネニンジン、リンドウ、いろんな種類のス

ミレ、そういう強くて優しい草のものにしましょう。スコップで移せるぐらいのね。そうしておいて、秋には、スノードロップの球根を、宝物を隠すようにあちこちに埋め込むといいわ」

まいはそれを聞いて、目の前がパッと明るくなる思いがした。それがまいの欲しかったまいの「場所」だ。

「おばあちゃん、それ、すごくいい。おばあちゃん、大好き」

おばあちゃんは目を細めて満足そうに、

「アイ・ノウ」

と言った。

この場所をもっと居心地良くしよう。裏で見つけた7センチくらいの楓の赤ちゃんも移してあげようか。それから何かの「巣」もあったらいいな。小鳥でも、ヤマネでも……。ああ、でも何も変えないほうがいいような気もする、わたしの場所。帰る道すがら、まいは、いろんなことを考えた。おばあちゃんはあそこを「マイ・サンクチュアリ」と呼んだ。

裏庭に着くと、仕込んでおいたハーブティーはすっかり濃い色をしていた。おばあちゃんはそれをじょうろに入れ、水を足して、まいに畑に撒いてくるように言った。まいは何度も往復した。

おばあちゃんも別のじょうろで裏庭に撒いていた。紫色のキャベツの外葉に注がれたハーブティーは、くるくると透明な琥珀色の玉となって揺れた。眠っていたような青虫やアブラムシはあたふたと逃げ出した。まいは大声で笑いながらそれを見つつ、ずーっとあの場所のことを思っていた。ああ、本当にあの場所がわたしの場所になったのだ……。

ずっとずっと後になって、まいは、おばあちゃんが、法律的にも本当にその土地をまいのものにしてくれていたことを知った。そして結局そのことが、おばあちゃんの山全体を開発の波から救うことにもなったのだった。

まいの毎日は、そのように幾つかの仕事と自由なくつろぎの時間の組み合わせがだんだんにパターン化され、心地よい一定のリズムを持ったものに整えられていった。

魔女の修行のほうは、当初まいが望んだものとは違うもののようにも思えたが、それはそれで新鮮でおもしろかった。

夕食後の時間は、いつの間にか「魔女の心得講座」のようになってしまった。どうやら魔女になるための必須(ひっす)条件とは、「自分で決める」ことに尽(つ)きるらしかった。例えばある夜はこんなふうだった。

「目を閉じてごらんなさい」

まいは言われたとおり目を閉じた。

「まいの大好きなあのマグを思い描いて」

「うん」

「しっかり描けましたか？　手を伸ばせば本当に触れるんじゃないかと思うくらい？」

「ええ？　まさか」

あんなに日常慣れ親しんだマグなのに、まいはその細部をうまく再現できなかった。

「できますよ。コツはね、朝、目覚める寸前の、あの夢と現実の境の感じをしっかり自分のものにするんです。これから毎朝、その瞬間を意識して捉(とら)えてごらんなさい。そし

て、自分で見ようと決めたものを見ることができるように訓練するんです。最初はマグでも、りんごでもいいんです。それができるようになったら、今、現実には見えないもの、例えばこの箱の中身だとかそういうものを見たいと思い、実際に見えるようにするんです。そうなるまでにはかなり時間がかかりますけどね。でも、気をつけなさい。いちばん大事なことは自分で見ようとしたり、聞こうとする意志の力ですよ。自分で見ようともしないのに何かが見えたり、聞こえたりするのはとても危険ですし、不快なことですし、一流の魔女にあるまじきことです」

じゃあ、おばあちゃんのおばあちゃんが体験したというあの白昼夢は一体何だったの、とまいは疑問に思ったが、おばあちゃんはまるでまいの考えていることがわかったかのように、

「私の祖母の場合は、自覚した魔女ではありませんでした。最初はね。ですから何の準備もしていないときに、そういうものが突然見えるというのは、祖母には大変つらいことだったのです。よく訓練された魔女にはそういうことはありません。見たいと思うものが見えるし、聴きたいと思うことが聞こえる。物事の流れに沿った正しい願いが光と

なって実現していく。それは素晴らしい力です」
まいには本当にそれが素晴らしい力であるように思えた。それが獲得できるのはいつのことだろう。おばあちゃんは本当にそんなことができるのだろうか。
「おばあちゃんもそういうことができるの？」
と、まいは思わず聞いてしまった。
おばあちゃんは例のにやりとした魔女笑いを浮かべて、
「できるかできないかは別にしても、私はそういうことはやりません。必要がありませんから」
まいは肩すかしを食ったような気がして、
「どうして？」
と大きな声を出した。
「そうですねえ」
と、おばあちゃんは視線をまいから少しずらして、考えながら答えた。
「朝、起きるでしょう。まだ暗い季節もあれば、今ごろのようにもう太陽が登っていて

十分明るい季節もあります。空気はとても冴(さ)えざえとしていて、新しい一日が始まったんだな、と思います。お湯を沸(わ)かして、お茶の準備をします。そして庭に出て、草木の様子を楽しみます。時には思いもかけなかった植物が、もくもくとした土の間から芽を出していたり、つぼみがふくらんでいたり、新しい緑の葉がつやつやとして朝露(あさつゆ)を抱いているのを見つけたりします。庭は毎日変化します。そして仕事をします。私はそういう毎日のほかにどんなことも望みません。変化を前もって知ることは、私から surprise(サプライズ) の楽しみを奪います。だから必要ないのです」

「でも、わたしにはそういう生活を続けることはできないわ」

「どうして？」

「え？」

まいは口ごもった。そんなこと決まっているじゃないか、なぜおばあちゃんはそんなことを聞くんだろう。

「だって、学校があるじゃない、それに……」

「まいはずっとここにいてもいいんですよ。まいがそうしたかったら、私からママに頼

んであげます」
おばあちゃんは甘やかすように優しく言った。まいはあっけにとられた。
そんなこと、考えてもみなかった。おばあちゃんと、ここでずっと暮らせるなんて。
嵐(あらし)の荒野をずっと一人で歩いてきた旅人が、やっと小屋を見つけ、中に入ると暖かい暖(だん)炉(ろ)に湯気(ゆげ)をたてているごちそうがあり、そして何より愛情あふれる笑顔があって、もう外に出なくていいんですよ、と言われたようなものだ。
そんなこと言われると、まいは何だか身体(からだ)じゅうの力が抜けるような気がした。いつかは戻らないといけないのだと、ずっと思い込んできたので、何というか、身体がまだ戦闘態勢を解いていなかったのだ。
「でも、わたしが帰らなかったら、ママは一人になってしまうし……。おばあちゃんと一緒に暮らすのは大好きなんだけど……」
「わかりました。それなら、まいには魔女修行が必要ですね」
と、すぐさまきっぱり言って、おばあちゃんはにっこりと笑った。
なぜ、そのとき、荒野の中の唯一(ゆいいつ)の避難所のようなあの家で暮らすことを選ばなかっ

たのだろうと、まいは後々まで不思議に思った。しばらく考えさせて、と言うことだってできたのに……。

まいは何だか、大慌て、という感じで即座に断ってしまった。ママのことは口実に過ぎなかった。それは、おばあちゃんもわかっていたに違いない、とまいは思う。

まいの心と身体は、戦闘態勢を解いて穏やかな生活に入ることを拒否したのだ。それが健康なことだったのか、それともひどくいびつなことだったのか、もっと大人になってからも、まいにはわからなかった。

まいは、おばあちゃんからの申し出を断ったことに何となく後ろめたさを感じて、

「おばあちゃんはだれから魔女修行を受けたの？」

と、とりなすように尋ねた。

「伯母からです。妹と一緒に。妹のほうが優秀でした。妹はそういうことが好きでしたし、先天的な能力もありましたから」

おばあちゃんの妹という人は、まいも少し知っていた。毎年まいのママのところにもクリスマスカードが送られてくる。それにはいつも必ずまいへも一言添えられていた。

そうか、あの人もそうだったのか。まいは、漠然としてしか感じていなかったおばあちゃんの英国の一族が急に身近に思えた。

「妹は、今ではそれを生業のようにしていますけれど」

「おばあちゃんは本当にそういう力をもう普段に生かすことはないの？」

おばあちゃんは口元をちょっと上げて静かに微笑んだ。そして、どこか遠いところを見つめた。

「そうね、一つ、いつ起きると分かっていることがあります」

「なあに？」

「ひ・み・つ」

と言って、おばあちゃんは片目をつぶった。

「そう言われると、よけいに知りたくなる。でも、おばあちゃんは、前もって起きることがわかってもしようがない、みたいに言っていたでしょ。それは別なの？　いつ起きるって分かると何か役に立つことなの？」

「そうですね。私を多少あせらせはしますけどね」

「何だろうなあ」
「そのうちまいにも分かりますよ」
そして、二年後、まいにも分かるときがくるのだった。

まいがおばあちゃんの家にきてから、三週間ほどたったたある朝のことだった。いつものように、半分寝呆(ねぼ)けたまま卵を採りに鶏小屋へ向かった。

まいはそのときの妙に静かすぎる外の気配をまだ覚えている。何か変だ、とぼんやり思った。

その奇妙な、風景が息を殺して何かを見守っているような気配は、鶏小屋のところを頂点としていた。鶏小屋がまいの目に入った瞬間、見てはいけない、と何かが強くまいに命じた。けれどまいの視覚は、まるで記録映画でも作るようにその一瞬の映像を深く心に刻み込ませた。

散乱した羽。とさかの付いた頭部。白い眼。筋ばった足。そして羽の付いた肉塊(にくかい)。

一瞬呼吸を忘れ、それから自分自身をその場から遠ざけるかのように、あらんかぎりの悲鳴を上げた。そして大急ぎで走って逃げた。びっくりしたおばあちゃんが台所のドアから飛び出してきた。

「どうしたのっ？」

「鶏が……」

まいは顔を手で覆（おお）った。だめだ、わたしはパニックになる、と、どこかで冷静に成り行きを見つめている眼があった。

「ああ」

おばあちゃんは、すべてを合点（がてん）したようだった。

「中へお入り」

まいは逃げ込むように中へ入ると、ちらっとガス台へ眼を遣（や）った。フライパンの火は消してある。よし。さすがおばあちゃん。それではこの事態の収拾（しゅうしゅう）に専念しなければ……どこか遠いところで、そういう呟（つぶや）きが聞こえた。

おばあちゃんは温かいミルクをまいに一口飲ませて台所に立った。

「前にもあったんです。野犬か、いたちの仕業でしょう。ブラッキーのいたころには……」

おばあちゃんはやかんを火にかけ、外に出てミントを摘みながら続けた。

「こんなことはなかったのだけれど」

そしてざっとミントを洗い、ティーポットに入れ、沸騰したお湯を注いだ。

「おばあちゃん、わたし、何も食べたくない。朝ご飯いらない」

まいは力なく言った。おばあちゃんは気の毒そうにまいを見遣って、

「そうね。でも、お茶を一杯飲みなさい」

と、まいのマグにミントティーを入れて持ってきた。

ミントティーを飲むと、まいはいつもこのお茶はわたしの味方だと思う。慰め、落ち着かせ、励まそうとする意志が感じられると思う。

「ゲンジさんに言って、金網の修理をしてもらわないと……」

それを聞いて、まいは肩の辺りにひどく重いものを感じた。ゲンジさんが来る。ミントティーの力もここまでだ。

おばあちゃんは、まいに今日の午前中は家の掃除をするように言いおいて、鶏小屋の後片づけに行った。

まいは二階の自分の部屋から始めることにして、箒とちりとりを持ってのろのろと上がった。開いたままになっていた読みかけの本に、しおりを挟んで本棚にしまい、ベッドをおばあちゃんに教わったように整えてベッドカバーをかぶせた。そして、窓を開けた。鶏小屋と、掃除をしているおばあちゃんが見えた。

今にして思えば、夜中に鶏たちの騒いでいるのを確かに聞いた覚えがある。でも、今までにもそういうことは時々あったので、また、鶏が寝呆けたか、野良猫でも通ったのだろう、ぐらいにしか思わなかったのだ。最近、この辺まで捨て猫に来る人たちがいる、とおばあちゃんが言っているのを聞いたことがあったので。でも、あれは違ったのだ、あれは鶏の断末魔だったのだ。なぜ、わたしはそれに気がつかなかったのだろう。おばあちゃんの部屋からは聞こえにくいのだから、わたしが気づくべきだったんだ。でももう遅い。まだ朝暗いうちからときの声をつくる、あの雄鶏の声を夢うつつで聞くことはもうないのだ。

まいはたまらなくなって、すごい勢いでベッドの下に箒を突っ込んで掃除を始めた。掃き終わるとドアを開けておじいちゃんの部屋のドアを開けた。

ほこりっぽい古い本の匂いが、まるでここだけ時が止まっているかのように充満していた。入り口は大人が何とか立っていられるぐらいの高さはあるが、天井が奥に向かって低く傾斜しているので、部屋としてはあまり使い道がない。

窓から前庭が見える。樫の木の梢がすぐそこにある。厚く、深々とした、たのもしい緑だ。窓際で不思議な輝きを見せているのは、おじいちゃんがおばあちゃんと英国に行ったときに手に入れた蛍石で、そのものは緑色だが、青白い光を辺りに放つ。おじいちゃんは鉱物が好きだった。

壁に大ざっぱに板を渡しただけの棚に、小さな剣の形をした輝安鉱の結晶や、氷の国のかけらのような水晶、雲母や石英の混じった花崗岩、そのほかまいの知らない赤や青や緑の様々な石がきちんと整理もされずに転がっていた。床の上には、本棚に入りきらない本があちらこちら積まれている。

おばあちゃんはおじいちゃんが死んだ後も、この部屋をそのままにしておいた。

まいは窓を開けて簡単に床を掃(は)いた。それから階段も掃き、バケツと雑巾(ぞうきん)を持ってもう一度二階へ上がると、机の上や棚を拭(ふ)いた。下のリビングやおばあちゃんの部屋もそうやって掃除をし、最後に台所の椅子(いす)を全部テーブルの上に上げ、モップで床を拭いた。

全部終わったときはもう十二時近かった。途中で、たぶんおばあちゃんが呼びに行ったのだろう、話しているゲンジさんの声が聞こえたが、ぞっとして絶対に外へ出なかった。

手を洗っていると、おばあちゃんが入ってきて、

「まあ、きれいになったこと。ありがとう、まい。お昼はどうしましょうね。まだ何も食べたくない？」

まいは黙(だま)ってうなずいた。

「じゃあ、透(す)き通ったきれいな色のゼリーでもつくってあげましょうね」

と、おばあちゃんは優しく言った。

午後は国語の勉強と称して、本を読む予定にしていたのだけれど、全く集中できなかった。窓から見える鶏小屋は、金網が外されてずいぶんすっきりしていた。ゲンジさん

の説によると、野犬やいたちは金網の下を掘って中に入るので、少なくとも三十センチは網の下の土を掘り、セメントを流さなければならない。小さな小屋なので、すぐに仕上がるだろうと、お昼におばあちゃんが話していた。とにかく、今日は溝だけ掘り、明日またセメントを持ってゲンジさんはやってくる。

まいは本を置いて外に出た。まいの「場所」に行こうと思ったのだったが、そうするためにはあの鶏小屋の前を通らねばならない。胸が痛んだが勇気を出して行くことにした。クサノオウの上に破れた金網が片づけてあった。クサノオウは無惨につぶれていた。無神経なやり方だ、とまいは思った。

さっさと通り過ぎようと心ではせくのだが、身体はぼんやりと立ち止まったままだ。いったいどんな動物がどういうふうにしてこの網を破ったのだろう。昨日まで生きて動いていた鶏、卵を産んだり、羽をバタバタさせたり、ミミズをつついていた鶏。それがああいうふうに物体として転がっていた様を思い出すと、何とも言いようのない切なさと悲しみでまいの心はいっぱいになる。

ふと、金網に付いている薄茶色の毛の塊を見つけた。いたちだろうか、狐だろうか、

それとも犬だろうか。まいには分からなかったが、この毛が、かつてその動物に付いていたことを思うと、憎しみのようなものと同時に不思議な思いもした。とにかく、そういう動物が存在して、ここで修羅場が展開されたことは事実なのだ。この毛がそれを物語る。ああ、あの誇り高い雄鶏は、突然の襲撃に驚きながらも、雌鶏たちを守ってどんなにか果敢に戦ったことだろう。

　まいは奥歯を噛んでその場を後にした。そしてまっすぐにまいの「場所」に行き、いつもの切り株に腰を下ろした。これでようやく少しは慰められると、まいは思っていたが、そのうちあたりの様子がいつもと少し違うのに気がついた。

　最初、それは、ただの意味をもたない雑多の音の集合のようだった。葉と葉の擦れ合う音や小枝や葉の落ちる音、遠く車の走る微かな音などの。けれども、まいの敏感になっているアンテナが、まい自身の制御からわずかに外れて、その雑音の中から勝手に何かの意味を拾おうとした。

　そのとたん、木の幹のゴツゴツとした楠や、その向こうの枯れかけた竹、葛の葉の覆っている藪などがひそひそざわざわささやいているような気が、まいにはしてきたのだ。

それはこんなふうにも聞き取れた。

——ゆうべの、ゆうべの、あの惨劇。

——闇を切り裂く断末魔。

——ああ、厭わしい、厭わしい。

——肉を持つ身は厭わしい。

突然、空が暗くなり、風がさっと吹いて木々は一斉に白い葉裏を見せた。びゅ、びゅ、びゅ、びゅ、と、烏がまいのすぐ上を羽ばたきして通過する力強い音も聞こえた。まいは急に恐ろしくなって、一目散におばあちゃんの台所へ走って帰った。

その晩、まいはおばあちゃんと一緒に眠りたいと言い、おばあちゃんはどうぞと言った。

おばあちゃんの部屋は畳敷きで、布団を敷いて寝る。おばあちゃんは自分の布団の隣にまいの布団を敷いた。まいは二枚のシーツを持って、まるでベッドメイキングのように、一枚を敷き布団に、もう一枚を掛け布団に折り込んだ。おばあちゃんからベッドメ

イキングを教わってから、何となく癖になってしまったのだ。

まいが布団に入ると、おばあちゃんは電灯を消して枕元の電気スタンドの小さな明かりだけにした。そして自分も布団に入った。まいは、おばあちゃんがおやすみを言う前に、急いで話しかけた。今日の、あのいつも大事に思っていた場所での気味悪い出来事についてだった。まいが話し終わると、おばあちゃんは、

「何でもありませんよ。まいは今日はだいぶ動揺していましたからね。そんなことは気にしないことです。無視するんです」

「どうして?」

「だって、その声は、まいが心から聞きたいと願ったものではなかったのでしょう。そういう一見不思議な体験を後生大事にすると、次から次へそういうものに振り回されることになりますよ。けれども不必要に怖がることはありません。それも反応していることになりますからね。ただこうべを高く挙げて」

と言って、おばあちゃんはおとがいをあげた。

「無視するんです。上等の魔女は外からの刺激には決して動揺しません」

そんなこと、絶対無理だわ、と、まいは思った。
でも、そんなことよりも、今まいにはおばあちゃんに聞いておかなければならないことがあった。それはまいがもう何年もの間、ずっと考え続け、恐れ続けてきたことだった。夜になると考えまいとしても、そのことが頭から離れなくなるのだ。そしてブラックホールに吸い込まれていくような気持ちになって、叫び出したくなる。もう何年もそうだった。
「おばあちゃん」
まいは低い声で呼びかけた。
「なあに」
おばあちゃんも低い声で返事をした。
「人は死んだらどうなるの」
それを聞いて、おばあちゃんは声にならない唸り声のようなものを出した。それからため息と共に、
「分かりません。実を言うと、死んだことがないので」

　まいは張りつめていた緊張が、変な緩み方をしたように思った。そして何だか急におかしくなって、そんなつもりはなかったのに吹き出してしまった。

「もう、おばあちゃんたら」

　おばあちゃんも笑いながら、

「でも、自分の死はまだですけれど、おじいちゃんの死は体験しましたし、魔女トレーニングは受けましたから、ある程度の知識はあります。それに、この歳になりますと、死後のことを射程に入れて生きるようになりますから」

　おばあちゃんはまいを見て、片目をつむりながら、

「まあ、言わば、エキスパートですよ。まいは運がいいですね」

「そうね。パパよりはおばあちゃんのほうが知っていそう。最初からおばあちゃんにきけばよかった」

「パパにも聞いてみたんですか」

　まいは一瞬黙り込んでから、

「うん。もう何年も前の話だけれど」

「パパは何て言っていました？」

まいはまた黙り込んだ。ややあって、口を開こうとしたが、胸が詰まり、どうしても涙声になるのだった。

「パパは、死んだら、もう最後の最後なんだって言った。もう何もわからなくなって自分というものもなくなるんだって言った。もうなんにもなくなるんだって言った。でも、わたしが死んでも、やっぱり朝になったら太陽が出て、みんなは普通の生活を続けるのってきいたら、そうだよって言った」

もう、最後のところはしゃくりあげていた。

おばあちゃんは黙って聞いていたが、布団の端をあげて、

「まい、こっちにおいで」

と、優しく言った。

まいは、しゃくりあげながらおばあちゃんの布団の中に入った。おばあちゃんはまいの背中をなでながら、

「それでは、まいはずっとつらかったたね」

と言った。まいは、返事の代わりにまたひとしきり声をあげて泣いた。

おばあちゃんはしばらくそうして背中をなでていたが、まいの泣き声がやがて切れ切れになると、

「おばあちゃんの信じている死後のことを話しましょうね」

と、ささやくように言った。まいも小さな声で、

「うん」

と、返事をした。

「おばあちゃんは、人には魂っていうものがあると思っています。人は身体と魂が合わさってできています。魂がどこからやって来たのか、おばあちゃんにもよく分かりません。いろいろな説がありますけれど。ただ、身体は生まれてから死ぬまでのお付き合いですけれど、魂のほうはもっと長い旅を続けなければなりません。赤ちゃんとして生まれた新品の身体に宿る、ずっと以前から魂はあり、歳をとって使い古した身体から離れた後も、まだ魂は旅を続けなければなりません。死ぬ、ということはずっと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になることだと、おばあちゃんは思っています。き

っとどんなにか楽になれてうれしいんじゃないかしら」

「じゃあ、魂がわたしなの？」

「まいは魂と身体が合体して、まい自身なんですよ」

まいはしばらく考えたが、やはりよく分からなかった。

「じゃあ、こうやって、考えたり、うれしかったり悲しかったりするわたしの意識はどうなるの。わたしはそれが消えてなくなるのがいちばん怖(こわ)いの」

「まい、おばあちゃんはさっき、上等の魔女は、外からの刺激に反応しない、って言いましたね。でも、それを完璧(かんぺき)に遂行(すいこう)するのは無理です。正確には、上等の魔女ほど、外部からの刺激に反応する度合いが低い、と言うべきでした。なぜなら、肉体を持っている人間なら、だれでも傷を負ったら痛いと思うし、風邪をうつされて高熱が出たら、意識が朦朧(もうろう)としてくるでしょう。食べ物がなくなってお腹がすいたら、怒りっぽくなる人もいるし……」

「わたしも少しそういうところある」

「そう？　最近では、カルシウムが足りないといらいらするとも言われていますよね。

それだって身体(からだ)があるからで、やっぱり身体が意識に影響を与えていますよね」

「だからわたしは魂(たましい)と身体の合体っていうわけなの？」

「そうです。で、死ぬってことは、その身体の部分がなくなるわけですから、やっぱり、死んだ後もまいは今のまいのままだとは、言いづらいですね」

「じゃあ、魔女って生きているうちから死ぬ練習をしているようなもの？」

「そうですね。十分に生きるために、死ぬ練習をしているわけですね」

まいはしばらく考え込んだ。

「それじゃあ、身体を持っていることって、あんまりいいことないみたい。何だか、苦しむために身体ってあるみたい」

まいは、無力にも物体と化して転がっていた、バラバラの鶏のことを思っていた。

「あの鶏はかわいそうなことをしましたね」

おばあちゃんもしんみりと言った。まいは、なぜおばあちゃんはわたしの考えていることが分かったのだろう、といぶかったが、そんなことを詮索(せんさく)していてはきりがないので、

「もしああいう目に遭うとしても、身体をもつ必要があるの？」

と、責めるようにきいた。

「あの鶏にはあの鶏の事情があったのでしょう。魂は身体をもつことによってしか物事を体験できないし、体験によってしか、魂は成長できないんですよ。ですから、この世に生を受けるっていうのは魂にとっては願ってもないビッグチャンスというわけです。成長の機会が与えられたわけですから」

「成長なんて」

まいは、なぜだか分からなかったが腹が立ってきた。

「しなくったっていいじゃない」

おばあちゃんは困ったようにため息をついて、

「本当にそうですね。でも、それが魂の本質なんですから仕方がないのです。春になったら種から芽が出るように、それが光に向かって伸びていくように、魂は成長したがっているのです」

まいは何となく、納得したくなかった。けれど、長年心にあって苦しんできた重石が

ようやく取り除かれて、別のドアが開かれたような、明るい気分にもなってきているのも事実だった。

「それに、身体があると楽しいこともいっぱいありますよ。まいはこのラベンダーと陽の光の匂いのするシーツにくるまったとき、幸せだとは思いませんか？　寒い冬のさなかの日だまりでひなたぼっこしたり、暑い夏に木陰で涼しい風を感じるときに幸せだと思いませんか？　鉄棒で初めて逆上がりができたとき、自分の身体が思うように動かせた喜びを感じませんでしたか？」

確かにそうだった。まいは返事の代わりに少しふくれてうなずいた。おばあちゃんは笑いながら、さあ、もうそろそろあきらめなさい、というように、

「今夜はこれでおやすみなさい」

と、言った。

次の朝、まいは目を覚まして一瞬自分がどこにいるのか分からなくなったが、すぐに思い出して隣を見ると、もうおばあちゃんはいなかった。昨夜おばあちゃんとの長い話

の後も、まいはいろいろ考えて結局眠るのがかなり遅くなってしまった。時計を見るともう七時半だ。慌(あわ)てて起き上がり、台所へ急いだ。

「おはよう、おばあちゃん」

と声をかけて、いつもの卵を採るボウルを取ろうとした。

「ああ、まい……」

おばあちゃんは何ともいえない顔をして首を横に振った。

「あ、そうだったね」

まいもようやく思い出した。今日は昨日の続きだった。

おばあちゃんはおかゆをつくっていた。まいはテーブルを拭(ふ)き、お箸(はし)とスプーンを両方用意した。おばあちゃんはおかゆをよそって、トレイに載(の)せて運んで来た。

「結婚してから初めておかゆをつくったとき、私はお砂糖を入れて甘くしてしまったんです。うんとおいしくするつもりでね」

まいは心底驚いた。

「どうして？」

「そんな種類のスウィートがあるんですよ。それで、おじいちゃんが、風邪をひいて、おかゆが食べたい、おかゆっていうのは、ライスをどろどろにしたものでって説明してくれたので、私は、ああ、それならできるって言って……」

おばあちゃんは、くすくす笑いながら続けた。

「干しぶどうやミルクやいろいろ入れて、運んでいったの。おじいちゃんに言われたように、梅干しをトップに置いてね。何だか変だとは思ったんだけれど……」

「おじいちゃんは食べたの？」

「ええ。食べなきゃ悪いって思ったのと、熱があって味がよく分からなかったので何とか食べられたんですね」

「おじいちゃんって優しい人だったのね。でも、今のおばあちゃんを見ていると、もうすっかり日本人みたいだから、そんなころがあったなんて信じられない。わたしより日本語もよく知っているし……」

「鍛錬（たんれん）、鍛錬。まいの魔女修行もそのうち成果があがりますよ」

おばあちゃんは楽しそうに笑った。まいも昨日より気分が晴れやかになった。おかゆ

もおいしかった。

「おばあちゃん、わたし、夕べ、変な夢みたの」

まいは、ふと思い出して、おかゆをすすりながら言った。

「どんな夢？」

「蟹(かに)になった夢なの。蟹の赤ちゃんのころは体も柔らかくて、居心地がいいんだけれど、だんだん大きくなると、体もどんどん硬くなるの。そして体のいちばんまん中の核のところまで、硬くなりそうになって、ああ、もうだめだ、と思ったら、脱皮が始まったの。たぶん、以前、ざりがにを飼っていたときに見た、脱皮の影響だと思うんだけれど」

「それで、まいはどんな気持ちでしたか？」

おばあちゃんは興味深そうにきいた。

「久しぶりにお風呂(ふろ)に入ったみたいにすっきりして、それでね、ああ、死んで魂(たましい)が身体(からだ)を離れるときってこんな気持ちなのかなあ、と思ったの」

おばあちゃんは目を閉じて、しみじみと言った。

「ありがたい夢ですね」

「うん、すごく楽になった気がした」

まいも素直にうなずいて、

「でも、まだ本当のところは分からないけれどね」

「おばあちゃんが死んだら、まいに知らせてあげますよ」

と、おばあちゃんは軽く請け合った。

「ええ？　本当？」

まいは一瞬喜んだが、すぐにきまり悪そうに、

「あの、でも、急がなくても、わたしはただ……」

おばあちゃんは、珍しいことに大声で笑った。

「分かっていますよ。それに、まいを怖がらせない方法を選んで、本当に魂が身体から離れましたよって、証拠を見せるだけにしましょうね」

「お願いします」

まいは深々と頭を下げた。

「でも、わたし、おばあちゃんだったら幽霊でもいいな。夜中にトイレに行くとき以外

だったら」

「考えときましょう」

おばあちゃんはにやりと魔女笑いをした。

そのとき、リビングの方で電話が鳴った。

「この時間だったら、ママが仕事に行く前にかけているんでしょう」

と言って、おばあちゃんが立ち上がり、まいも後から続いた。おばあちゃんは足早にリビングに入り、受話器を取って、

「もしもし……ええ、たぶん、あなただろうと、まいと話していたのよ」

おばあちゃんは、ほらね、と言うようにまいを見て片目をつむってみせた。

「……ええ、元気よ。まいのおかげで楽しいわ。夕べは一緒に寝たんですよ。……ほほ、あなたのときは……あらそう、それはそれは……ちょっと待ってね」

と言って、まいに受話器を渡した。

「あ、ママ？　うん、大丈夫、ちゃんとやっているから。……え？　パパが来るの？

なぜ？……ふーん。……別に、いいけど……うん。分かった。じゃ、気をつけて行ってらっしゃい」

まいは受話器を置いた。そして目を丸くしておばあちゃんの顔を見、

「パパが来るんだって」

おばあちゃんもつられて目を丸くし、

「夕べの噂話が聞こえたのかもしれませんね」

と、ひそひそ声で言った。

まいとおばあちゃんは台所へ戻りながら、ひとしきりパパのことを話題にした。

「わざわざわたしのために来るのかなあ」

「ママは、このあいだの連休がとれなかった埋め合わせで、休めるんだと言ってましたよ」

「でも、まだ一週間先だって言っていたね」

「そのときは何かごちそうでもつくりましょうか。卵がないとやっぱり寂しいかしら」

「そんなことないんじゃないかなあ」

そのとき、外で人の通る音がした。まいが窓をのぞくと、セメント袋を肩に担(かつ)いだゲンジさんが歩いていた。まいは思わず首を引っ込めた。おばあちゃんも気づいた。

「あら、ゲンジさんね。早いですね」

と言って、外に出て、彼を追っていった。

まいはゆっくり時間をかけて、後片づけをし、いつものようにドアとドアに挟(はさ)まれた場所の隅に咲いている小さな勿忘草(わすれなぐさ)のような雑草に水をやった。本来は透明のガラスでサンルームのようになっているのに、その草の生えている辺りのガラスは、相変わらず泥はねでくもりガラスのようだ。

そうだ、この草は、ヒメワスレナグサと呼ぼう、とまいは決めた。植物の中で、そのものよりも一回り小さい、よく似た植物を、ヒメ――と呼ぶことをまいは知っていた。

鶏小屋の方から人のやって来る気配がしたので、まいは慌(あわ)てて家の中に引っ込んだ。ゲンジさんだった。何か忘れ物でも取りに行ったんだろう、まるでちょっとした小山が移動しているように肩を揺(ゆ)らしながら歩いていった。

なめくじの這(は)った跡に、一目で分かる白い帯がつくように、あの人の通った跡は、そ

の生臭さに草木さえざわついてもう元には戻らない。おそらく清浄で冷たい夜露に晒され、朝の汚れない陽の光に干されるまでは。まいは苦々しくそう思った。

　またゲンジさんが戻って来る気配がした。まいはリビングに移動した。そしてドアを締め、カーテンを引いて、籠城の構えをとった。

　昼間カーテンを引かれたリビングは、全く別の部屋のようだった。まいはそこで辛抱強く嵐の過ぎ去るのを待った。そしておばあちゃんの救出を。じっとしていると、喉の奥がヒューヒュー鳴りだした。力を入れないとうまく息が吐けない。ああ、まただ。でも昼間から始まるなんて。暗くしたから身体が夜と間違えているんだろうか。まいは繭のようにじっとして身体の様子をうかがった。

「まあ、こんなところにいたんですか」

　ドアが開いて、光と共におばあちゃんが入ってきた。

「ゲンジさんと一緒に、お茶にしようと思っていたんですけど……」

「わたし、気分が悪いの。少し休んでいていい？」

と、まいは大慌てで言った。別に嘘をついているわけではないのがありがたかった。た

だ、順序がちょっと逆だっただけだ。気分が悪くなったから、ここにいるのではなくて、ここにじっとしていて気分が悪くなった、という。でも、これは言わなくてもいいだろう。

「まあ。じゃあ、上のベッドで寝ていなさい。……暗いほうがいいの？ カーテンなんか引いて……」

おばあちゃんは心配そうにやって来て、まいの額に手を当てた。

「熱はないみたいですね」

「またゼイゼイいい始めたの」

おばあちゃんは眉をひそめた。

「カーテンにほこりがたまっていたんでしょうか」

「大丈夫。これはすぐ治りそう」

と、まいは弱々しく言って、屋根裏へ上がっていった。

「あ、そうそう、ゲンジさんが卵を持ってきてくれてたんです。あとで、いただきましょうね」

おばあちゃんが下からまいに向かって明るい声で叫んだ。
まいは階段の途中で立ち止まり、
「いらない」
と、そっけなく言って部屋に入った。
陽の光の差し込む部屋で、清潔な乾いたシーツにくるまって、昼間からベッドに入るのはとても気持ちが良かった。それに、ここにいれば、ゲンジさんと顔を合わせなくてもいいのだ。まいが窓のところまで行って鶏小屋の方でも見ない限り。喉の奥のヒューヒューは治まりつつあった。昨夜遅かったこともあって、まいは本当に眠くなってきた。
目を覚ましたときは、もう部屋の中が暗くなり始めていた。一瞬、朝なのか昼なのか分からなかった。ああ、そうだった、昼寝をしたんだ、ずいぶん長いこと眠っていたんだわ。まいは思い出した。何だか世界中でたったひとり取り残されたようで、心細く、寂しかった。ああ、またいつものホームシックがやって来る……と、まいは覚悟した。とりあえず、おばあちゃんを探そう。
おばあちゃんは台所で、何かぐつぐつ煮ていた。まいは心からほっとして、

「おばあちゃん」
と、声をかけた。おばあちゃんは振り向いて、
「ああ、びっくりしました」
と言ったが、あまりびっくりしたようには見えなかった。
「もういいんですか、まい。よく眠っているようだったから起こさなかったんですけれど……」
おばあちゃんは火を止めて、まいの方へ近づいた。
「ぐっすり寝たから、すっきりした。もう何ともない。夕べいろいろ考えて寝るのが遅くなったから、あんまり寝てなかったの」
「それならいいんですけれど。昼寝をすると、夜は眠りにくいと思いますけど」
と言いながら、おばあちゃんはまいの髪をなでた。
「いろいろ考えたからね。これからは眠れるようになるかもしれない」
「それならいいんですけれど……」
おばあちゃんはもう一度そう言って微笑んだ。

それから二日過ぎ、まいはもう元の生活のリズムを取り戻していた。多少、脱線することがあっても、そういうふうにすぐに元に戻そうとする意志が働けば、まあ、魔女修行としては軌道に乗っていると、おばあちゃんは満足そうに言った。

あれから一度あの場所にも行ってみたが、以前と同じようにこぢんまりとして居心地が良かった。あそこではいつも自分に好意的な、暖かく包み込んでくれるような「場所の意志」というようなものが感じられて、まいは安心しきっていたのだ。あのとき感じた得体の知れない不気味さは、きっと何かの間違いだろう。まいはそう思おうとした。

おばあちゃんは、自分が心から聞きたいと願った声でない声が聞こえたときは、即座に無視するのだと言っていたけれど、わたしが何かの声を、心から聞きたいと思うことなんかあるのかしら。そんなうす気味の悪いことをわたしが願うことがあるなんて思えないけれど……。でもそういう能力もないと、本当の魔女は目指せないのかしら……。

鶏小屋は修復できていたが、まだ鶏は入っていなかった。

もしその気があったら、ゲンジさんが知り合いからチャボをもらってきてくれると、

おばあちゃんが朝食のとき、まいに告げたが、まいはもうしばらく鶏は見たくない、と応えた。けれど本当は、ゲンジさんから、というのがいちばんひっかかったのかもしれない。

「でも、おばあちゃんが欲しかったらいいよ」

まいはおばあちゃんのためなら、多少のことなら我慢できると思っていた。

「そうですねえ……。あんなことがあったばかりですからねえ、もう少し、喪に服してからにしましょうか」

喪に服す、というのはまいには初めての言葉だったが、何となく意味は分かった。そして、まいの気持ちを表すのにぴったりの言葉だと思った。

まいが食器を持って席を立とうとしたとき、おばあちゃんが、引き出しから封筒を取り出した。

「ああ、そうそう、後片づけはおばあちゃんがやっておきますから、まいはゲンジさんのところに行って、このお金を渡してきてください」

まいは一瞬心臓が凍りついたかと思った。黙って食器をテーブルに降ろし、封筒を受

け取った。

「今？」

まいは沈んだ声できいた。

「そうですね。ゲンジさんが出かける前がいいでしょうね」

おばあちゃんはまいの気持ちには全然気づいていないように思えた。今度は逃げられない。まいは覚悟を決めたものの気が重かった。

風の強い日だった。まいが前庭を通りかかったとき、乾(かわ)いた砂ぼこりが風に舞った。これは修行のひとつなのだ。何者もわたしを動揺(どうよう)させることはできない。まいはリラックスしようと思った。ご飯を食べたり、掃除をしたり、洗濯をしたりするのと同じ日常の一つなのだ。わたしはおばあちゃんに言われて、野菜に水をやりに行く。わたしはおばあちゃんに言われて、この封筒を届けに行く。同じようなことだ。ほら、届ける家が見えてきた。後は渡して帰るだけだ。

猛スピードの車が、二台続けて走ってきたので、まいは道路の手前でちょっと立ち止まった。すぐ左の電信柱の元に、まだあの陰湿(いんしつ)な気が漂(ただよ)っていると感じた。不快になる

のは止めようがなかった。こういう、わたし自身を支配するような感情が生じないように、自分でコントロールできるようにならなければいけない。魔女修行とはそういうものなのだから。まいは自分に言い聞かせた。

　車が走り去り、安全を確認してから、まいは振り切るようにずんずん道路を横断して、ゲンジさんの家の庭に入っていった。

「おはようございます」

　まいは大声で家の中へ向かって声をかけた。納屋と母屋の間の通路で、一斉に犬が吠えた。通路の入り口に、鉄製の柵がしてあり、その境の所で数匹の犬が重なり合うようにしてこちらを見ている。玄関から、破れた障子と日に焼けてささくれ立った畳が見え、その向こうから二人の男が怪訝そうな顔をしてこちらをのぞいていた。一人はゲンジさんだった。もう一人は、ゲンジさんによく似た、まいの知らない人だった。

「あの、これを……」

　まいは玄関の敷居ぎりぎりのところから封筒を差し出した。ゲンジさんは、立ち上がって封筒を受け取り、中を確かめると、

「おう」

と呟くように言ってうなずいた。確かに領収した、という意味らしい。奥の方で、もう一人の男が声をかけた。

「どこの子じゃ」

ゲンジさんは封筒を持ったまま奥に戻っていった。

「外人とこの孫じゃ。学校怠けて遊んどんじゃ」

「そいじゃ、おまえとよう似たもん同士じゃの」

二人の高笑いが響き、まいは屈辱と怒りと、それを抑えようとする力が一瞬交錯して、何が何だか分からなくなった。とにかく帰ろうとして、振り返ると、庭の片隅に薄茶色の毛の吹きだまりが目に入った。まいはなぜかその家の庭を出るまでそれから目が離せなかった。

左右も見ずに道路を走ったので、そのとき車が通らなかったのはまいの運が良かったのだろう。おばあちゃんのうちの台所に入るまでに、まいはあの毛の塊によく似たものを以前見たことがあるのを思い出した。鶏小屋の金網に付いていたものとそっくりだ。

まいの心に、冷たくて暗い確信のようなものが走った。
「ご苦労さまでした」
おばあちゃんは布巾を干しているところだった。
「おばあちゃん、あそこのうちの犬の毛、このあいだ金網に付いていた毛とそっくりだった」
まいは息を弾ませながら、早口で言った。
おばあちゃんはパンパンと布巾をたたきながら、
「金網？」
と、悠長にきいた。
「このあいだ、鶏が襲われたときに金網に付いていたの。薄茶色の……」
「いたちの毛も薄茶色ですよ」
「違う。わたし、絶対あそこの犬の毛だと思う。あそこの犬が夜中に抜け出して、うちの鶏を襲ったんだ」
まいは肩で息をしていた。

「でも、まいはそれを見ていたわけではないでしょう」

「見なくても分かる」、

おばあちゃんはため息をついた。

「まい、ちょっとそこへお座りなさい」

まいはテーブルについた。おばあちゃんも向かいに座った。

「いいですか。これは魔女修行のいちばん大事なレッスンの一つです。魔女は自分の直観を大事にしなければなりません。でも、その直観に取りつかれてはなりません。そうなると、それはもう、激しい思い込み、妄想となって、その人自身を支配してしまうのです。直観は直観として、心のどこかにしまっておきなさい。そのうち、それが真実であるかどうか分かるときがくるでしょう。そして、そういう経験を幾度となくするうちに、本当の直観を受けたときの感じを体得するでしょう」

「でも……」

「まいは自分の思っていることがたぶん真実だと思うのですね」

まいはうなずいた。

「あまり上等でなかった多くの魔女たちが、そうやって自分自身の創りだした妄想に取りつかれて自滅していきましたよ」

　まいは一瞬おばあちゃんに敵意のようなものを感じた。闇の中の白刃のようにそれはきらりと光った。

　おばあちゃんは見通したように、まいの手を両手で包んだ。

「まい、どうか分かってください。これはとても大事なことなのです。おばあちゃんは、まいの言っていることが事実と違うことだといって非難しているのではないのです。まいの言うことが正しいかもしれない。そうでないかもしれない。でも、大事なことは、今更究明しても取り返しようもない事実ではなくて、いま、現在のまいの心が、疑惑とか憎悪とかいったもので支配されつつあるということなのです」

「わたしは……真相が究明できたときに初めて、この疑惑や憎悪から解放されると思うわ」

　まいは言い返した。

「そうでしょうか。私はまた新しい恨みや憎しみに支配されるだけだと思いますけれ

ど」

おばあちゃんはまいの手を優しくなでた。

「そういうエネルギーの動きは、ひどく人を疲れさせると思いませんか?」

まいはきつくきつく奥歯を噛んだ。それから何だか憑きものが落ちたように肩を落とした。そして、ポツンと言った。

「そう思う」

ひどい疲労感がまいを襲った。

「マイ・ディア」

おばあちゃんはテーブルの向こうから手を延ばしてまいの頬をなでた。

パパがやってきた。まいはパパに会うのはお正月以来だった。照れくさいようなうれしいような気もしたが、それよりも、パパが今の自分の状態をどう思っているのかという不安のほうが強かった。

パパの車が入ってきたとき、まいはちょうど前庭にいた。パパはまいを見つけるとうれしそうに降りてきた。

「やあ。元気そうだね」

まいは手にしていたじょうろを置いて駆(か)け寄(よ)った。

「パパ、会社休んだの?」

パパはその長身で細身だけれど、どこか平べったい印象を与える身体(からだ)を反らして大き

な伸びをした。

「うん。ちょうどよかったんだよ。まいのおかげで骨休めができる」

「おばあちゃんは台所にいるよ」

「よし、行こう」

パパはまいの肩に手を置いて歩き始めた。まいはパパの手が重かったので、さりげなく先に歩いてパパから離れた。

おばあちゃんは台所でパイか何かの生地をこねていた。

「ああ、いらっしゃい。疲れたでしょう」

「ここに来ると、本当にのんびりしますよ。まいがお世話になっています」

パパは頭を下げた。おばあちゃんはこねていたものをぬれ布巾（ふきん）でパッパッと包み、冷蔵庫に入れた。そして、手を洗い、やかんに水を入れ、火にかけた。

「まいがいてくれるおかげで、毎日楽しいですよ。私はずっといてほしいくらいなんですけれど……」

おばあちゃんはにやりと笑って、まいとパパの顔を見た。

まいは、おばあちゃんがわざと言っているのが分かったので、パパの顔を盗み見た。

パパは笑っていたけれど、顔はこわばっていた。

「パパ、お土産(みやげ)は？」

まいはパパの持っている紙袋を見ながらきいた。

「あ、そうそう忘れてた。これはママから」

と言って、パパは袋からチョコレートやクッキーの缶、芽キャベツなどを取り出した。

「まあまあ」

おばあちゃんはうれしそうに受け取って、冷蔵庫にしまいにいった。芽キャベツはおばあちゃんの大好物だった。パパは今度は別の大きな茶封筒を取り出し、まいに渡した。

「学校のプリント類だよ」

言われなくても分かっていた。茶封筒は信じられないくらいずっしりと重かった。

「それから、これが本物のお土産」

パパは赴任先(ふにんさき)のT市のお菓子を渡した。今風のモスグリーンのきれいな包装紙で、かけてあるひもも細く繊細な金糸で美しかった。

「きれいですね。何が入っているんですか」

おばあちゃんがトレイにお茶の準備をして持ってきた。

「お菓子です。一応和菓子なんだけれど、中がカスタードクリームなんです」

「まあ。ありがとうございます。まい、いただきましょう」

パパは、たぶんおばあちゃんが外国の人だから気を利かしたんだろうけれど、もし、そうだとしたら、パパは未だにおばあちゃんのことがよく分かっていないんだ。まいはそう思った。これはおばあちゃんの趣味ではない。おばあちゃんは、たとえ自分の口に馴染んでいないものであっても、その土地に深く根ざした本物のほうがいい人なんだ。

お菓子は、カスタードクリームがふわふわとしたスポンジ地にくるまれていてそれなりにおいしかったけれど、まいにはあまりに軽くて甘くて、捉えどころがなかった。おばあちゃんのどっしりとした、香辛料やドライフルーツの入ったお菓子に慣れすぎていたからかもしれなかった。

おばあちゃんは、真面目な顔で何か神聖なものでも口にしているように黙々と食べていた。

まいは何か緊張した空気を感じた。
突然、パパが改まった口調で切り出した。
「ママとも話したんだけれどね。もうそろそろ三人一緒にT市に住もうかと思うんだ。どうだろう」
これはまいの全然予想していなかった展開だった。まいが口を開くより先に、おばあちゃんがパパの方を向いて確かめた。
「じゃあ、ママは仕事をやめるんですか」
「彼女はそうしてもいいと言っています」
「学校は？」
まいは自分でもびっくりするくらい大きな声を出した。
「転校することになるね」
パパは真面目な顔をして答えた。
まいは、パパとおばあちゃんが自分の反応を確かめようと、一瞬息を詰めるようにしてこちらをうかがっているのを感じた。どう反応していいのか分からなかった。

単純に考えると、あんなに嫌な学校に行かなくてもいいのだったら喜んでもいいはずだった。でも、まいは自分でも意外だったのだけれど、これは何か違う、という感じがして落ち着かなかった。

「今すぐ決めないとだめ？」

パパはてっきりまいが喜ぶものと思っていたのだろう、ちょっと驚いたようだった。

「え？　うん、そうだね。パパは今夜ここに泊めてもらって明日帰るから、それまでにまいの気持ちを聞かせてもらえるかな？」

「分かった」

まいはうなずいた。

「それはそうと、せっかく車で来たんだから、町の方までドライブしてみようか」

パパはにこにこしながら提案した。

まいの顔がパッと明るくなった。

「本当？　おばあちゃんも？」

「もちろん」

おばあちゃんは微笑(ほほえ)んで、近くにあったペンとメモ用紙を取った。

「ありがたいけれど、いろいろ用事もあるので、久しぶりに二人で行ってらっしゃいな。その代わりと言ってはなんだけれど、買物をしてきてください。今日はパパの好きなキッシュを久しぶりに焼こうと思っていたんですけれど……」

わあ、と、まいとパパは同時に声をあげた。

「さっきこねてらしたのがそうですか？　だったらいいなあと、実は思っていたんですよ」

「いい勘ですね。では、マッシュルームと、赤ピーマン、卵に牛乳……と。ああ、それからベーコンと……」

おばあちゃんは、思いつくままに書き連ねた。まいはそれを受け取り、早速立ち上がった。

「じゃあ、行ってくるね、おばあちゃん」

「え？　もう？」

パパは慌(あわ)ててお茶を飲み干して立ち上がった。

「楽しんでいらっしゃい」

まいとパパはおばあちゃんに見送られて車で出発した。

「まいは本当に日に焼けて元気そうになったね」

パパは車を運転しながらうれしそうにまいに言った。

「え？　黒くなった？」

「健康そうになったよ。まるでハイジみたいだ」

「え？」

「ほら、町で病気になったハイジが、山に帰ってすっかり元気になるところがあるだろう？」

「ああ、そうだね」

なるほど、そっくりだ、とまいは心の中で思った。

町まで車で三十分ほどかかる。車に乗るのは久しぶりだったので、まいは窓の外の変わりゆく景色を存分に楽しんだ。急に開ける見晴らしや、青々とした麦畑、飛び交う鳥、少し下っていって木々の間を流れる川やそれに沿うようにしてある田んぼ。窓からの風。

「T市に行くと、今のように頻繁(ひんぱん)にはおばあちゃんの家に来れなくなるかもしれないけれど……」

「新幹線を使ったら三時間くらい？」

「そうだね。でも、ここは駅からだいぶ離れているから、T市駅までの時間、新幹線の待ち時間、駅からおばあちゃんの家までの時間を入れたら、結局半日はかかって車で行くのとあまり変わらないよ」

「……そうか」

まいは、まだ生まれてからそんなに長い年月をこの世で過ごしたわけではなかったけれど、この窓から広がる風景がとても貴いものだと本能的に知っていた。

いつまでもこのままではいられないのだ。田んぼの向こうに一列に並んで、一様にてっぺんを風に吹かれている杉の木や、その向こうを流れる少し暗い川、緑の山、白い雲、更(さら)に続く青い空。まいは何だか切ないような懐(なつ)かしいような気持ちでこの風景に見入っていた。

「おばあちゃんはね、ママが仕事をやめることについては大賛成なんだよ」

パパは確信ありげに言った。

「どうして分かるの？」

「おばあちゃんは、女の人は家にいて家庭を守るべきだって考えの人なんだ。たぶんね。パパとママが結婚するときも、おばあちゃんはママに仕事をやめた方がいいんじゃないかと言ったんだけれど、ママはやめなかった。ママはそのころ、おばあちゃんの考え方に反発していたんだよ」

パパは、当時ママがおばあちゃんに押しつぶされそうな気がする、と言っていたことは話さなかった。けれど、ママがおばあちゃんに反発していたというだけでもまいには驚きだった。

「おばあちゃんとママはとても仲が良さそうだから、そんなことがあったなんて考えたこともなかったわ」

「もちろん仲はいいよ。ただ、おばあちゃんが立派すぎたのかな。パパもおばあちゃんのことは尊敬しているけれど、時々、今の時代の流れが分かっていないんじゃないかなっていう気はするね」

　パパの向こうには、確かにコンピューターやコピーの情報の山、流れ出るファクスの川が感じられた。それは、かつては少年だったことのある痩せた顔に、疲労のしわとかすかな隈をつくっていた。けれども、それにはいつでも直面できるリアルな社会の確かさもある。それは、まいが山の向こうに置いてきたものだ。

「パパが単身赴任を始めてもう一年になるだろう。そろそろ何とかしないといけないなと思っていたんだ。でも、ママに言い出しにくかったんだ。だから、まいのことがきっかけで、このことが言い出せて、パパとしてはまいに感謝している……って言ったら変かな」

「変だね」

　まいはうなずいた。峠の坂道を降りきったところにある最初の信号が見えてきた。それが黄色だったので、パパはゆっくり減速してふわりと止めた。ママの車はいつも急に止まるので、身体がカックンと前に揺れるけれど、パパの車は本当にゆっくりと止まる。

　まいは深く呼吸して息を整えた。

「あのね……」

「何だい？」

「覚えてる？　パパ。ずーっと前に、わたしが、人は死んだらどうなるのって聞いたときのこと」

「そんなこともあったかなあ。で、パパは何て答えたんだい？」

まいはあきれてしまった。でも辛抱強く教えてあげた。

「人は死んだらそれまでだって言ったのよ」

まいの声がひどく低くて恨みがましく聞こえたので、パパは思わず吹き出した。

「それは、そしたらずいぶん前のことだろうね。そのころはそれが常識だったんだよ。でも、今は正直に言うと、よく分からないんだ。いろんなことを言う人がいるからね。最近では、死んだらそれまでっていう考えは、あんまり流行っていないみたいだね」

信号が青になった。パパは止まったときと同じようにゆっくりとアクセルを踏んで発進した。

「流行っていない……」

まいはぼんやりと繰り返した。

おばあちゃんのキッシュは素晴らしくおいしかった。パパはドライブのときに買ってきたビールを飲んで、すぐに眠そうにしていたので、おばあちゃんはまいに屋根裏のまいのベッドに案内するように言った。

「シーツを持っていって、ベッドメイキングしてください。まいはおばあちゃんの部屋にお布団(ふとん)を敷(し)いてあげますから」

まいはうなずいて立ち上がり、パパを促(うなが)した。

「さあ、パパ行こう」

「すみません。このところ、ほとんど眠ってなかったんです」

「大変でしたね。どうぞゆっくり休んでください」

「ありがとう。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

まいは廊下の途中にある戸を開けて、中からシーツを二枚取り出した。

「こんなところに棚があるなんて知らなかったよ。見事なもんだな。バスタオルやタオ

ルもみんなきちんと畳（たた）んであって。まいも手伝うのかい？」

「そう。みんな畳み方が決まっているんだよ。並べたときにきれいなように」

まいはちょっと誇らしかった。

「大したもんだ」

パパはポンポンとまいの頭を軽くたたいた。屋根裏のまいの部屋のドアの前で、パパはちょっと立ち止まり、おじいちゃんの部屋のドアに手を置いた。

「パパはおじいちゃんが大好きだった。ママはあまり石に興味がなかったので、パパとママが結婚することになると、おじいちゃんは会うたびにパパに石のことを教えてくれた。本当の息子のようにね。おじいちゃんは、石のこととなったら、まったく子供のように目を輝かせて夢中になるんだ。一緒に山を歩いていて、急に立ち止まって石を拾って、しげしげと見ていたと思ったら、あっという間に口の中に入れて、もぐもぐやりだしたこともあったよ」

「……食べたの？」

「いや、そうやって、石を鑑定するんだよ」

「……」

「パパはおじいちゃんが好きだったよ」

パパはうつむいてポツンと言った。

それから、顔を上げて、まいの部屋に入り、まいが手早くベッドメイクするのを目を丸くして見ていた。

「驚いたなあ。ついこの間まで赤ん坊だった子が、もうこんなことまでできるようになるなんて。おばあちゃんに授業料を払わないといけないないなあ」

まいは最後にベッドの四角をポンポンとたたいた。

「はい、出来上がり。じゃあ、パパ、おやすみなさい。今日はありがとう」

「こっちこそ楽しかったよ。ありがとう。おやすみ」

まいは何だか一人前の主婦になったような気分で意気揚々と台所に帰った。台所ではおばあちゃんが、余ったキッシュを包みながら後片づけをしていた。

「これは明日ママにお土産に持っていってもらいましょうね」

「ああ、そうだね。ママ、喜ぶよ、きっと」

まいは洗い場に立ち、腕まくりして皿を洗い始めた。おばあちゃんはその横で、まいの洗ったお皿を布巾で拭いた。

「転校のこと、どう思う？　おばあちゃん」

「そうですねえ、基本的には家族は一緒にいたほうがいいと思いますけれど……」

「パパったら、自分が言ったことも覚えていなかったんだよ。ほら、死んだらおしまいっていう……」

「ほほ、まいは怒りましたか？」

「怒る気もしなかったよ、もう。死んだらおしまいっていうのは、最近流行らないんだって。だから自分でも今はよく分かんないんだって」

おばあちゃんは笑い転げた。まいもつられて吹き出した。

「あんまり無責任じゃない？　ひどいよね。父親の自覚のない人なんだ」

「まいのパパはいつだってそのときの自分に正直なんですよ。まいに対しても、一人の人間として、対等で誠実でなければならないと思っているんです」

おばあちゃんはたしなめるように言ったが、笑いすぎて目に涙を浮かべたままだった

ので、あまり効果はなかった。

「まあ、悪い人じゃないよね。ただ、ちょっと想像力がなかったんだな。自分がこう言ったら、年端のいかない娘はどう思うかっていう……」

「そうですね。でもその手の想像力の欠如している人って世の中には多いですよ」

「知ってる」

まいは短く言って、洗い桶の中の水をざっとこぼした。おばあちゃんも最後の皿を拭き終わると、使った布巾を洗って干した。

「後はおばあちゃんがやっておきますから、まいはもう寝る準備をしなさい」

まいが歯を磨いたり、パジャマに着替えたりしておばあちゃんの部屋の布団に入ると、おばあちゃんもすぐにやって来て電気を消し、まいの隣の布団に入った。

「早かったね。おばあちゃん」

「まいが手伝ってくれたので、もうすることはありませんでしたよ」

「ねえ、おばあちゃん」

「はい？」

「何でパパはわたしが学校に行かないのか聞かないんだろう」

「ママは聞きましたか?」

「ううん。そういえばおばあちゃんも聞かなかったね」

「みんな、まいのことを信頼しているからでしょう。まいが行かないと言うからには、きっとそれなりの理由があるからだとみんな思っているんですよ」

まいは布団をあごまで引き寄せた。

「女子の付き合いって、独特なんだよね」

まいは、ぼそぼそとそう言うと、ためいきをついた。

「クラスの最初にバタバタッて幾つかのグループができるんだ。そして休み時間に一緒にトイレに行ったり、好きなスターの話とかするんだけどさ」

「大変ですね」

「その波に乗ったらそんなに大変じゃないんだよ。最初気の合いそうな友達のグループに入るまでがすごく気をつかうけれど。去年まではわたし、すごくうまくやれたのよね。でも、何だか今年は、そういうのが嫌(いや)になったんだ」

「グループに入るのがですか？」
「うん。グループができるときの心理的な駆け引きみたいのがね。グループになりたいなって思う子の視線を捉えてにっこりするとか、興味もない話題に一生懸命相づちを打つとか、行きたくもないトイレについて行くとか。そういうのが、何となくあさましく卑しく思えてきたんだ」
「分かりますね」
「それで、今年はもう一切そういうのやらなかったんだ。そうしたら、去年まで仲が良かった子まで、ほかのグループに入っちゃって、結局一人になっちゃったんだ」
「他のグループに入った子は、もう、まいと仲良くできないんですか？」
「できないんだよ」
まいはおばあちゃんの方に向きを変えた。何だかステレオの使い方を教えているような気分だった。
「その子がわたしと話をしたいと思っても、そのグループの子が呼んだらすぐそっちに行かないといけないんだ。つまり、どっちを大事に思っているかという忠誠心がそこで

問われるんだよね」

「難しいんですね」

「けっこうね。でも、わたしはその子のことを恨んでいないよ。だって無理ないもの」

まいは淡々と醒めた声で言った。

「そういうグループ同士では交流はないんですか？」

「敵対するところもあったり、わりとグループ同士仲がいいところもあったりするんだけれど、今度のわたしのクラスは、珍しいことにそれぞれのグループがお互い友好的になろうとしたらしいんだよね」

「そういうことも可能なんですか？」

「うん、簡単だよ。みんなで、だれか一人を敵に決めればいいんだもの」

「……」

これだけ聞けば十分だった。

おばあちゃんは深いため息をつき、まいはしばらく黙り込んで気持ちを落ち着けた。

泣かなかったのは我ながら上出来だと思った。

「それでね、明日までにパパに転校の返事をするって言ったから、ずっと考えていたんだけれど……」

「魔女は自分で決めるんですよ。分かっていますね」

おばあちゃんは人さし指でまいのおでこをつっついた。

「うん、分かってる。でもちょっと聞いて」

「はいはい」

「たとえ転校してあのクラスからは抜け出せたにしても、いちばん根本的な問題は解決しないんだよ。だから、何か素直に喜べないのよね。敵前逃亡みたいで、後ろめたいんだ」

「根本的な問題の解決なんて、まいのような新米の魔女見習いには無理ですよ。この場合の根本的な問題は、クラス全体の不安ですからね。クラスのみんながそれぞれ不安なんですよ」

「でも、わたしの問題もやっぱりあると思う」

まいは、けなげにも言い切った。

「わたし、やっぱり弱かったと思う。一匹狼で突っ張る強さを養うか、群れで生きる楽さを選ぶか……」

「その時々で決めたらどうですか。自分が楽に生きられる場所を求めたからといって、後ろめたく思う必要はありませんよ。サボテンは水の中に生える必要はないし、蓮の花は空中では咲かない。シロクマがハワイより北極で生きるほうを選んだからといって、だれがシロクマを責めますか」

これは説得力があった。でも、まいも負けてはいなかった。もうまいはほとんどおばあちゃんに遠慮することはなくなっていた。

「おばあちゃんはいつもわたしに自分で決めろって言うけれど、わたし、何だかいつもおばあちゃんの思う方向にうまく誘導されているような気がする」

おばあちゃんは目を丸くしてあらぬ方向を見つめ、とぼけた顔をした。

次の日、パパが起きてきたのはまいたちがお昼をすませた直後だった。パジャマのままぼーっと降りてきたパパを見て、おばあちゃんはまいそっくりと言って笑った。まい

はちょっとふくれてみせた。パパは照れくさそうに笑ってテーブルについた。
「本当にゆっくり眠れました。まい、ありがとう」
まいは早速パパの食事の支度をし始めた。おばあちゃんはパパと顔を見合わせて微笑(ほほえ)んだ。
「それで、結局、まいはどうしたいんだい？」
パパはお茶を飲みながらまいに聞いた。今度はまいがおばあちゃんと顔を見合わせた。
「やっぱりママと一緒にパパのところに行くよ」
パパの瞳(ひとみ)が輝いた。
「そうかい。やっぱり」
まいはパパのうれしそうな顔を見て、やっぱりこれでよかったんだと思った。新しい学校がまいにとっての「北極」であるかどうかはわからないけれど、試してみる価値はある。そこを魔女の卵としての自分の秘(ひそ)かな修行の場とするのだ。まいはそう決心したのだった。
「手続きなんかもあるし、なるべく早いほうがいいね」

「パパ、わたし、自分で学校の下見をしたいんだけれど……。自分で学校を選びたいんだ」

「おお、何という生活に対する前向きな姿勢だ。いいぞ、いいぞ」

パパは上機嫌だった。

おばあちゃんは、その間に、畑から採ってきた野菜を段ボールに詰めたり、ハーブを束にしたりと、せわしなく動いていた。

そして以前、まいとつくったジャムの瓶(びん)と、昨夜のキッシュをきれいな箱に入れながら、

「このジャムはまいがつくったんですよ」

と、自慢そうに言った。パパは感嘆した。

「まいはすっかり、りっぱなカントリーガールになったなあ」

おばあちゃんの理想の、という言葉をのみこんだ。

未来に明るく開けた展望を持って、パパはママのところに帰っていった。まいとおばあちゃんは庭に出て見送った。

夕方の虫たちがいつになく慌ただしかった。

蟻は行列をつくって大移動しているし、小さな蠅の仲間や蜂たちもひっきりなしに飛び回っていた。

西の方からは、濃い灰色の雲が流れてくる。

「何だか雨になりそう」

おばあちゃんが呟いた。

次の朝、目を覚ますとやはり雨だった。明け方、夢うつつの中で雨の音が聞こえていた。窓から庭を見ると、草木が少しうつむいて柔らかな雨に打たれていた。

まいの周辺がにわかに落ち着かなくなった。二、三日うちにおばあちゃんのところを引き払って、引っ越しの準備にかからなければならない。ママからの電話もしょっちゅうくるようになった。

T市に行けば、もうそんなにここにも来れなくなるだろう。まいも、おばあちゃんも、口には出さなかったがそのことはよく分かっていた。

まいは雨が少し小やみになったのを見計らって「あの場所」に出かけた。そしていつもの切り株に腰を下ろして、外界から隔絶(かくぜつ)された空間を確かめた。すると、前方の竹薮(たけやぶ)

の辺りで、藪が不自然な動きをした。鳥でもいるのかな、とまいが目を凝らすと、何とそれは、くわを持ったゲンジさんだった。

まいは仰天した。心拍数が一気に跳ね上がった。ゲンジさんはまだこちらには気づいていないらしかった。くわで無心に竹藪との境の段のところを切り崩している。あれは何をしているのだろう。あれは……わたしの土地を侵して、自分の土地を広げているのだ。まいはそう気づいた瞬間、身の毛がよだつくらいぞっとした。思わず立ち上がった。すると、こちらに気づいたゲンジさんと目が合った。瞬間、ゲンジさんはさすがにバツが悪そうな顔をしたが、すぐににたりとした。そしてまいの燃えるような憎悪を感じてか、

「竹の子を掘っとんじゃ」

と珍しく弁解した。

まいは思いっきりにらみつけると、物も言わずにその場を走り去った。

「おばあちゃんっ」

血相を変えたまいの様子に、畑にいたおばあちゃんは急いで戻ってきた。

「どうしたんです?」

おばあちゃんは、とりあえずまいをテーブルにつかせ、話を聞いた。聞き終わると、まだ肩で息をしているまいの隣に座り、背中をなでた。

「魔女修行のこと、忘れましたか、まい」

まいは、あっと小さく声を出し、それからぐっと何かをのみこんだような気分になった。

「そんなに動揺してどうしますか。まるで殺されかけたような顔をして」

まるで殺されかけたような気分だったのだ、とまいは思った。あんな、粗野な嫌らしい人間に、自分の聖域を侵略されていく気持ちはたまらなかった。

「でも、どんなことがあったって、わたしがあの人を嫌だと思う気持ちは抑えようがないわ」

まいは、このことだけはおばあちゃんに一歩も譲るつもりはなかった。

「ゲンジさんは竹の子を掘っているんだと言ったんでしょう。だったらそれでいいじゃありませんか」

「そんなことが本当なわけないじゃないのっ」

なぜ、おばあちゃんにはこのことが分からないんだろう。なぜ、おばあちゃんはあんな卑劣（ひれつ）で、下品な男と付き合うのだろう。あの男に関しては、おばあちゃんはまるで見知らぬ他人のようになって自分から遠ざかってしまう。まいはいらだち、寂しく、泣きたかった。そしてかろうじて言った。

「あれは犯罪だわ」

おばあちゃんは黙（だま）っていた。

「あんなことをいつまでもやらせておいたら、あの土地は全部とられてしまうわ」

おばあちゃんはまいを見て微笑（ほほえ）んだ。

「楠（くすのき）があるでしょう？　あと、栗（くり）の木やいろいろありましたね。あそこを越えてまでは来ませんよ。たとえ、ゲンジさんが本当にまいの言うようなことをしているのだとしてもね」

おばあちゃんは、反論しようとしていたまいを軽く制して更（さら）に続けた。

「それにまいは、ゲンジさんにとても失礼だったと思いますよ。挨拶（あいさつ）もせずに帰ってき

たんでしょう？　そんなことをされたらひどく傷つくと思いますよ」
まいは唇を噛んだ。じゃあ、あの人が今までわたしにしてきたことは何なの？　おばあちゃんは何にも知らない。あの人が陰でおばあちゃんのことを何て言っているのかも。でも、そんなことはおばあちゃんには言えない。わたしにはそんなことは言えない……。
「わたしはそういうことに動揺せずに、平気になんか、絶対なれない。わたしはあの人を好きになんか、絶対なれない。あんな汚らしいやつ、もう、もう、死んでしまったらいいのに」
「まいっ」
おばあちゃんは短く叫んでまいの頬を打った。瞬間の出来事だった。まいはあっけにとられた。それから涙がじわりとわいてきた。
「おばあちゃんは、わたしよりあの男のほうが大事なんだ」
必死でそれだけ言うと、立ち上がってバタバタと屋根裏の自分の部屋に駆け込み、ベッドに飛び込んで頭から布団を被った。

おばあちゃんはひどい。わたしをこんな屈辱的な目に遭わせるなんて。それも、あんな男をかばうために。おばあちゃんはひどい。こんなに野蛮な人だとは思わなかった。それもこれもみんなあの男のせいだ。あの男さえいなかったら、おばあちゃんとわたしは本当にうまくいっていたのに。あんな男は生きている価値がないんだ。ああ、悔しい……。

まいはやがて泣き疲れて、そのまま眠ってしまった。

夜中に物音で目を覚ました。おばあちゃんがそうっとドアを開ける音だった。まいは少し決まりが悪かったけれど、ちゃんと気がついているんだということを示すためにも声をかけた。

「今、何時？」

静まりかえった部屋に、その声はぶっきらぼうに響いた。おばあちゃんはささやくような声で答えた。

「十一時です。お腹減ったでしょう。下へ行って何か食べませんか？」

そのとき、本当にタイミングよくまいのお腹が鳴った。奇妙な、長い響きで。おばあ

ちゃんは思わず吹き出した。まいも吹き出す感じになったのだが、顔がこわばって変なしかめ面になった。降りていくしかなかった。

トマトスープど、バナナとりんごにヨーグルトをかけたサラダがテーブルの上においてあった。おばあちゃんは手早くスープを温めなおし、薄く切ったトーストを焼いた。まいはふくれっ面をしてしゃべらなかった。おばあちゃんはまるでまいが風邪でもひいているかのように優しかった。まいは、こんなことにはだまされないぞ、というかたくなな思いと、また前のような暖かな生活を続けたいという思いが交錯してどうしていいのか分からなかった。

食べ終わり、部屋へ戻ろうとするまいに、おばあちゃんは背中から声をかけた。

「ナイ、ナイ、スウィーティ」

まいは振り返り、思い切って言った。ずっと遠くに離れてしまったボートに必死でロープを投げるように。

「でも、おばあちゃんだって、わたしの言った言葉に動揺して反応したね」

おばあちゃんはにやりと笑って片目をつぶった。

「そういうこともあります」

次の日も朝から雨だった。内も外も静かだった。部屋の中にいると、腐葉土に落ちて浸み入っていく雨の音が聞こえるようだった。そしてそれが心にも浸み入って、まいは傷ついた小動物のようにじっとしていた。

少しずつ小雨になり、午後から雨がやんだ。それでもいつ降り出してもおかしくない空模様だった。まいはおばあちゃんに声をかけてから裏山に出かけた。明日はもうここを去らねばならないのだった。

腐葉土がたっぷり水を吸い込んでいたので、踏みしめるつど、滑らないように気をつけなければならなかった。けれども「あの場所」の入り口まで来て、やはりまいは入るのをためらった。

小道の奥の杉林の方から、霧がゆっくりと這ってくる。まいは何となくそちらに足を向けて歩き出した。向こうにはもっと明るい落ち着いた悲しみの世界が広がっているような気がした。

まいは、何だかもっとしみじみと悲しみたかったのだ。針葉樹林の中を歩いた。この林の向こう側は沢になっている。霧はそこから立ち昇るのだ。晴天のときとはまた違う、どこかひそやかな草いきれが、細かな緑色の水の粒子となってまいの肌の毛穴や鼻孔に浸み込んでいく。

ここはいつか来たことがあるような気がする、とまいはぼんやり思った。

ふと、急に空が明るくなって陽が微かに射し込んだ。同時に何かとても甘やかな匂いがして、まいはその方角に瞳を凝らした。

沢の向こう側の山の斜面に、二、三十メートルはあろうかと思われる大きな木が、これもまた、二、三十センチはありそうな白い大きな花を、幾つも幾つもまるでぼんぼりを灯すようにしてつけているのが目に入った。花は泰山木を一回り大きくしたようでもあり、蓮の花のようでもあった。

そうだ、あれは空中に咲く蓮の花だ。おばあちゃんは、蓮の花は空中には咲かないと言っていたけれど。霧の中で夢のように咲いている。まいはすっかり魅了されて動けなかった。ああ、おばあちゃんの言うとおり、人間に魂があるのなら、その魂だけになっ

てあの花の廻りをふわふわと飛遊していられたらどんなに素敵だろう。

引かれる気持ちが強すぎて、まいは怖くなった。例の、「自分が心から聞きたいと願ったわけではない声」が、また聞こえてきそうな気がしてきた。きびすを返してそこを立ち去ろうとし、まいは足を滑らした。そして大きく段がついているようになっている、穴の中に落ちてしまった。けがはしなかったが、すっかり泥だらけになった。立ち上がろうとして、まいは、あっと目をみはった。

穴の脇は更に深い洞のようになっていて、その一面に美しい銀色の花が咲いていたのだ。暗い林の奥の、そのまた暗い、ほとんど陽も届かないはずの場所に。その植物は、二十センチくらいの、葉を持たない銀白色の鱗をつけた茎の先に、やはり銀細工のような小さい蘭に似た花をつけていた。それが何十本となく、まるで茸がつくしのように地面から生えているのを見るのは不思議な光景だった。

まいはそこでしばらく我を忘れて見入っていたが、やがてかさこそと木々の合間を縫って雨の落ちる音を聞き、立ち上がった。膝が痛かった。その不思議な美しい花を一本採り、穴から出た。

台所の裏庭のところで、傘を持って出かけようとしていたおばあちゃんに会った。たぶん、雨が降りだしたのでまいを迎えに行こうとしていたのだろう。おばあちゃんは泥だらけのまいの様子を見て駆け寄った。

「どうしたんです。こんなに汚れて。けがはありませんか？」

「わたし、見たこともない花、見つけた。新種かもしれない」

まいは声が上ずらないように気をつけた。まだ完全におばあちゃんと和解したわけではないのだから。ああ、こういうことって、なんてわずらわしいのだろう。おばあちゃんは一瞬キョトンとしたが、すぐにうれしそうに、

「まあ」

と言ってその花を受け取った。

「これは銀龍草（ギンリョウソウ）です。私も今年初めて見る。まいはあの穴に落ちたのですね。さあ、とにかく中へ入って着替えなさい」

まいは、それが新種の発見でなかったので、ちょっとがっかりした。とりあえずシャワーを浴び、着替えて台所に入ってくると、銀龍草は一輪差しに生けられて、おじいち

ゃんの写真の前に飾ってあった。おばあちゃんはまいに熱い紅茶をいれてくれた。

「これはおじいちゃんの大好きな花でした。おじいちゃんはこの花を鉱物の精と呼んでいました。だから、毎年この時期になると、こうやって写真の前に飾ってあげるのです。まいが小さかったとき、一緒に採りに行ったこともありましたよ。でも、今年は」

おばあちゃんはおじいちゃんに話しかけるように呟いた。

「まいが一人で採ってきてくれました」

まいは紅茶を飲みながら聞いた。

「毎年この時期だけ咲くの？」

「そうです。雨がたっぷり降って、地が水を吸い込むとき、毎年甦るのです。この花には太陽は必要ではないのです」

「それから、沢の向こうに、大きな白い花をいっぱいつけた木があったよ」

「ああ、それは朴の木です。その花は陽の光を浴びて開きます。少し古くなると開いたままですが、陽がかげると閉じ、陽が射して明るくなるとまた開くのです。朴の木が咲くと匂いでわかります」

「何か、甘ずっぱい匂いがしていた」

「そうでしょう。何だかふらふらと誘われていきそうですね」

まいは銀龍草（ギンリョウソウ）を見つめた。――鉱物の精。光の届かない地の世界の美。まいには、それが何だかおじいちゃんからのプレゼントのように思え、すぐそばにおじいちゃんが寄り添ってくれているように感じた。そんな不思議な存在感が――まいとおばあちゃんと共に、もう一人のだれかが静かにお茶を飲んでいるような――その日のそのときの台所のテーブルの辺りにはあった。

いよいよまいが、おばあちゃんの家を去る日は、昨日までとは打って変わって晴れ渡った穏（おだ）やかな日だった。迎えにきたママは、まいが少し元気がないことに気づいたが、おばあちゃんと別れるからだろうと思った。おばあちゃんはママに本当に仕事をやめるのかと尋（たず）ねた。ママはまいが台所ドアとドアの間にいるのを確かめてから言った。

「パパとも相談した結果なの。家族がバラバラで、私が仕事を持って忙しくしているっていうのは、かなりまいには負担だったんじゃないかって。それでとりあえず、私が仕

事をやめてT市へ行くのがまあ、いちばん妥当な線だと思うのね」

「よく決心しましたね」

「まあね、私には何がいちばん大切かっていう優先順位を考えたわけ」

おばあちゃんはにやりと笑った。

「考えないと分からないんですか」

その笑いがママの気に障った。

「言っておきますけれどね。私はこれで一切仕事をやめるつもりじゃないんです。おばあちゃんのような生き方は私にはとてもできないわ。私は私の人生を生きるし、おばあちゃんだからといって私にもまいにも自分の生き方を押し付けることはできないはずよ」

おばあちゃんは寂しそうに微笑んだ。

「確かにもうオールド・ファッションなのかもしれませんね」

言うまでもなく、このやりとりの一部始終は、まいにも聞こえていた。まいはヒメワスレナグサに最後の水やりをしていたのだ。おばあちゃんの言葉があまり寂しそうに聞

こえたので、まいはいたたまれなかった。ママもさすがに胸が痛んだらしかった。
「どうしたの。今のはおばあちゃんらしくないわ」
「どういうのが私らしいのですか?」
「いつも自信に満ちているのよ」
まいは本当にそうだと思った。おばあちゃんはいつも自分がそのときやるべきことが分かっている。庭の草木のように確かな日々を暮らしている。それに比べてまいはいつも不安で自分のやっていることに自信がない。
しばらくしてみんなで、ここに来た最初の日と同じように、サンドイッチをつくって食べた。ママはまいがキンレンカの葉を抜かずに食べているのに気づいたけれど、口に出しては言わなかった。
最後に車に乗っておばあちゃんにさようならを言うとき、まいは泣きたかった。おばあちゃんとの別れが悲しいというより、自分の心にあるしこりの重さがつらかった。おばあちゃんは、心配そうな悲しそうな顔でまいを見つめた。まいには分かっていた。おばあちゃんはまいに言ってほしいのだ。あの事件以前のように、「おばあちゃん、大好

き」と。けれど、まいには言えなかった。

車が発進し、門を出て、小道を曲がり、見えなくなっても、まだまいはおばあちゃんの訴えるような視線を感じていた。

あれから二年たった。まいは毎日学校に通っている。

新しい学校にも、もちろん派閥のようなものはあったが、前の学校ほど徹底はしていなかった。それにまいには、新しい友達ができたのだった。その子の名前はショウコといった。

ショウコは独特のセンスと価値観を持った子で、まいは一緒にいるだけで楽しかった。歯に衣を着せぬ物言いをする子だったが、悪意はないし、言っていることは大抵筋が通っていた。けれど何となくクラスからは浮いていた。

もっとも、ショウコには群れは必要なかったのだ。ショウコはいつもまっすぐ立っていて、正面から見つめた。ショウコが爪を切ったとしたら、その切られた爪の一部でさえショウコ以外の何者でもないのではないかと思われるほど、その個性は清潔に際立っ

ていた。

まいは転校してすぐに、ある出来事からショウコと親しくなった。以来ずっと何をするにも、何となく二人寄ってしまうのだった。

魔女修行のほうも忘れたわけではなかった。まいは今でも自分で決めたことは、何にしても黙々と最後までやり抜くべく努めるようにしている。そういうふうに努力することで、何とかおばあちゃんとの糸が切れないようにしていたのかもしれない。

おばあちゃんのことを思うと、いつも胸が痛んだ。あのときゲンジさんのことをあんなにひどく言ったのは、自分でも止めようのなかった感情の「流出」だったとまいは今でも思う。(「流出」という言葉は最近本で覚えた。でも実生活で使ったことはないので、まだ自分の言葉という気がしていない) 後悔も反省も今はまだするつもりはない。

けれど、おばあちゃんにとっても、まいにああいう手荒なことをしたのは、やはり止めようのなかった感情の「流出」だったのではないだろうか。おばあちゃんだって、魔女である前に人間なのだ。まいは、おばあちゃんと離れてからそんなことを考えるようになった。

確かにまだ、おばあちゃんのことを許せないとがんばる部分が心のどこかにあるけれど、そういう状態を心の中に保つのはけっこうエネルギーが要る。まいは何だか面倒くさくなっていた。それに……わたしが最後におばあちゃんに対してしたこともひどかった。ああいう別れ方でおばあちゃんをひとりあそこに残して去ったのは、もしかするとひどく残酷（ざんこく）なことだったのではないだろうか。

ようやく想像力の翼がそこまで達すると、まいは何だか重い気分になってくる。自分がされたことよりも、自分のしたことのほうが、はるかに許しを請（こ）うべきことのように思えて。思い切って、今度おばあちゃんに会ったら、こういうことを全部話してみよう。手の内を全部見せて、おばあちゃんに委（ゆだ）ねるのだ。そうしたらおばあちゃんはまたにやりと笑って、まいが安心して夜ぐっすり眠れるようなことを話してくれるだろう。

まいはいつも自分にそう言い聞かせた。ただ、最初会うときと、こういうことを話し出すまでがちょっと気が重いけれど……。

それまでは、まいはとにかくおばあちゃんに教えられたことはなるべく実践していこ

うと思っていた。今度会ったときに少しでもおばあちゃんを喜ばせられるように。まいはあらゆることに粘り強く取り組んだ。

まいとしては思いがけないことだったが、その態度はショウコに尊敬と賞賛の念を抱かせた。ショウコはどちらかというと飽きっぽい性格だったのだ。

おばあちゃんの家へは、とうとう結局あれから一度も行かなかった。まいの学校生活が軌道に乗ったのを見計らって、ママはまた仕事を始めたし、パパは相変わらず忙しかったし、まいはまいで、結構予定が詰まっていたのだ。

おばあちゃんの家へ向かう途中、まいはあの二年前の日々を思い返していた。あの、あんなに好きだった「あの場所」のことを。そして、自分がこの二年間、ほとんど「あの場所」のことを思い出しさえしなかったことも。大事なものには変わりないのだ、まいにとっては神殿にも匹敵するような場所なのだ。なのに、どうして忘れてしまえていたのだろう……。まいは後ろめたかった。

車がおばあちゃんの家の前庭に入ると、すでに見知らぬほかの車が駐めてあった。ま

いとママは大急ぎで車から出て、まっすぐ玄関から入った。奥からゲンジさんが出てきた。まいは複雑な思いで久しぶりに見るゲンジさんを眺めた。

「母は？」

ママは挨拶もせずに事務的に聞いた。ゲンジさんは黙って奥のおばあちゃんの部屋を指した。ママはそのまま物も言わずにそちらに突進した。

ゲンジさんはまいを見ると、弱々しくうなずいた。まいもぎこちなく会釈を返して、ママの後を追った。

おばあちゃんはきちんと布団に寝かされていた。顔にかけられた白い布がまいに冷水を浴びせるようなショックを与えた。――おばあちゃんも、こんなものを被らないといけないの？

そのとき、ママがぞっとするほど冷静な声で言った。

「家ではこんなものはかけないのよ」

そして、その白い布を取った。痩せて、老いたおばあちゃんの顔が出てきた。人は二年でこんなにも老いるものなのだろうか。

「この人はこういう死に方をする」

ママは抑揚のない低い声で言った。

捨てられた子供みたいだと、まいは人ごとのように思った。

「まい、悪いけれどしばらく台所へ行っていてちょうだい」

まいは黙って言われたとおりにした。おばあちゃんが死んだという悲しさより、もう取り返しがつかないという恐ろしい後悔の念が、どす黒いコールタールのように、まいの心を覆い始めていた。胸に深く長い刀傷がぱっかりと開き、まいの存在のすべてがその痛みで締めつけられているような感じだった。まいは、もう二度と今までと同じような朝を迎えることはできないと思った。

そのとき、爆発するようなママの泣き声が聞こえてきた。まいは自分の唇が冷たくなって震えているのを感じた。長いこと、そうやってじっと動かなかった。ママが台所に入ってきた気配で我に帰った。

「英国へ連絡しなくちゃ。パパはもうすぐこっちへ来ると思うけど……。おばあちゃんの教師時代の知り合いの住所録がこの辺にあったと思うんだけれど……」

ママは戸棚を開けて探し始めた。まいも立ち上がって手伝った。住所録は裁縫箱の中から出てきた。

「じゃあ、ママはあっちでしばらく電話をかけているから」

「分かった」

二人はそれぞれの後悔を抱いたまま、一人は残り、一人はリビングへと去った。ママが行ってしまうと、まいはテーブルに突っ伏した。そして顔を歪めて、

「ああ」

と絞り出すような声を出した。ただ悲しいというのとは違う、どうしていいのか分からない、悲痛という言葉が今のこの状態にいちばん近いといったらそうかもしれない。涙も出ないのだ。この冷酷さ。わたしは一体どうなっているんだろう……。

そのとき、突然、トントンと台所ドアをたたく音がした。まいは顔を上げた。ゲンジさんだった。まいはのろのろと立ち上がって、ドアを開けた。すべての感覚が自分から去り、何千枚もの薄いオブラートで繭のように体を包まれているようだった。

ゲンジさんには、以前の威嚇するような横柄な態度は微塵も見られなかった。一回り

も二回りも小さく見える身体(からだ)を、折り曲げるようにして、何か差し出した。
「これを、飾ってあげてくれんか」
銀龍草(ギンリョウソウ)だった。
まいは思わず、あっと声を上げた。そして、両手で受け取った。
「ここのじいさんが好きだったでの。わしは出来は悪かったけんど、よくしてもろうた」
ゲンジさんは眼をしょぼしょぼさせて言った。よく見ると、ゲンジさんは泣いているのだった。
「何かすることがあったら、ゆうてくれ」
そう呟いて、立ち去ろうとしたが、ふと、足元に目を止めた。
「えらい、キュウリ草がようけ咲いとるのう」
まいも気づいた。まいがヒメワスレナグサと呼んでいた花が、見事な一株になって、咲き誇っていた。
「これ、キュウリ草っていうんですか?」

思えば、これがまいが初めてゲンジさんに嫌悪感なしに話しかけた言葉だった。オブラートの繭の中にすっぽりと入っているように感じていたせいかもしれなかったけれど。

「そう呼んどるがの」

ゲンジさんはうなずくと出ていった。

まいの手の中にあったのは確かにあの銀龍草だった。銀細工のような不思議な花。二年ぶりで見るその花は、こんなときでさえ、まいの目をくぎづけにする。

まいはおばあちゃんがしていたように一輪差しに銀龍草を生け、おじいちゃんの写真の前に飾った。

それから、あの懐かしいヒメワスレナグサにも水をやりに台所ドアの間に行き、腰をかがめ、何げなくあの汚れたガラスに目を遣った。そのとたん、電流に打たれたようなショックを感じてそこに座り込んでしまった。

その汚れたガラスには、小さな子がよくやるように、指か何かでなぞった跡があったのだ。

ニシノマジョ　カラ　ヒガシノマジョ　ヘ

オバアチャン　ノ　タマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウ

さっきはなかった、とまいは思った。さっき、ゲンジさんが来たときは。それとも、やっぱりあったのだろうか。気づかなかっただけなのだろうか。

ああ、おばあちゃんは、おばあちゃんは、覚えていたのだ。あの、約束。

まいはその瞬間、おばあちゃんのあふれんばかりの愛を、降り注ぐ光のように身体中で実感した。その圧倒的な光が、繭を溶かし去り、封印されていた感覚がすべて甦ったようだった。そして同時に、おばあちゃんが確かに死んだという事実も。嬉しいのか悲しいのか分からなかった。

まいは目を閉じた。打たれたように拳を固く握った。堪えきれずに叫んだ。

「おばあちゃん、大好き」

涙が後から後から流れた。

そして、そのとき、まいは確かに聞いたのだった。

まいが今こそ心の底から聞きたいと願うその声が、まいの心と台所いっぱいにあの暖かい微笑みのように響くのを。

「アイ・ノウ」

と。

# 渡りの一日

「加納さんが迎えにきてるわよ。いつまで寝てるの」
母親の順子さんにむりやり布団(ふとん)をはがされて、ショウコはくしゃみした。最近急に冷え込むようになった。秋も深まりつつある。
「ああ、寒い。風邪ひくじゃないか、もう」
「外で待ってる加納さんの方がよっぽど寒いわよ」
もと婦人警官の順子さんは、やることがラフだ。もっとも、普段はもう少し細やかな人なのだが、こと加納まいに関する限り、順子さんはとても気を遣う。
ショウコにはその理由がよくわかっている。逃げられたくないのだ。
「早くしなさい。ああ、もう。中に入っていてもらおうかしら」

「だいじょうぶだよ。別に何時までに行かなきゃならないってことはないんだから」
ショウコはあくびしながら、もう一度布団に潜り込もうとして、順子さんにぐいっと腕を捕まれ、上半身を起こされた。
「もうお昼なのよ」
ドスのきいた声音で告げられると、起きないわけにはいかなかった。
洗面を済ませて、茶の間に入ると、すでに引きずり込まれた加納まいが待機していた。
「おはよう」
ショウコは目覚めた直後のかすれた声であいさつした。
「もうお昼よ。今日の日曜は昼前に杖指山に登ってサシバの渡りを見ようって前からいってたじゃない」
口調とは裏腹に、加納まいの顔は穏やかだった。こんなことでいちいち腹を立てていては到底ショウコとはつきあえない。自分の側に非がないとわかっているときは、物事に寛大になれる。
「今からじゃ無理か」

ショウコもさすがにすまなさそうだ。

「秋の陽は落ちるのが早い。登って、降りて来るのがせいぜいだと思う」

「ほんとにこの子ったら。ごめんなさいねえ、加納さん。よかったらお昼食べていって」

そういうと、順子さんはまいの返事も待たずに台所に消えた。

まいは、ショウコの家の茶の間が好きだ。いつも佃煮のようなにおいが微かに漂っている。新しくはないけれど、拭き清められた畳に、どっしりした欅の水屋が置いてある。濡れたような艶の、木目が美しい。その中には、蓋付きの漆の菓子鉢があって、いつも羊羹や煎餅などが入っている。切れていたことがない。ショウコはいつも当然のように水屋を開けて、目ぼしいものを口に入れる。今日もそうした。

「いいわね」

まいはためいきをつく。

「え？　食うか？」

ショウコは意外そうに、今まさに口に入れんとしていた煎餅を差し出した。

「そうじゃなくて」
まいは煎餅を押し戻しながら、またためいきをついた。言っだって、どうせショウコには分からないと思う。
まいの家は、ほとんど料理には時間をかけていない。ママが働いているのと、合理的で無駄を嫌う性格のせいだ。甘いものは健康に悪いし、長時間の煮炊き(にた)は資源の無駄、おまけに食品の栄養を損なう、と思っている。だから、むしろ料理はまいの管轄(かんかつ)になってきている。まいがつくったものだったら(どんなに時間がかかっていて健康に悪そうでも)ママは喜んで食べる(この辺が、少し理不尽だ、とまいはいつもあやしんでいる)。
いつも菓子鉢をいっぱいにしている母親の気遣いなど、ショウコは考えたこともないのだろう。その「守られた」環境を、まいはうらやましいと思うのだ。煎餅が欲しいのではなくて。
食事の後、順子さんは、急に思い出したように言った。
「そうだ、展覧会の券が二枚あるの。もし加納さんも予定がないんだったら、ショウコと二人で行ってこない？　今日までなの」

順子さんは、水屋の下の引出しからごそごそと、二枚のチケットを取り出した。
「ああ、その画家なら知ってます。私、行きたかったんだけど、チャンスがなくて……」
まいの目が輝いた。
「あら、よかった。悪いけどついでに画集買ってきてくれない？　ちょっと重いけど……」
「いいですよ」
軽く請け合ったまいに、ショウコは眉間(みけん)にしわを寄せた。順子さんは、そそくさと立ち上がった。
「最終日は、早く終わるかもしれないから、じゃあ、もう出かけた方がいいわ」
まだパジャマ姿で髪もとかしていないショウコは追い立てられるようにして二階へ上がり、上がったかと思ったらすぐに降りてきた。すでに着替えている。
私のママだったら、身支度に一時間はかかる、とまいは思った。まいだって、十五分はかかるだろう。服を選んで、髪をとかして、リップクリームだって塗らなくちゃ。も

っていくもの、バッグに詰めて……。ショウコはきっと、最初に目についたジーンズとトレーナーに着替え、いつも必要最小限のものが入っているポシェットをひったくるようにして降りてきたんだろう。そのシンプルさは憧れるけれど、真似は出来ない、とまいは思った。それにしても、今日のショウコはなんていいかげんなのだろう。今日のことは、だいぶ前から計画を立てていたのに。

まいとショウコは、この夏休みを共同研究の野鳥観察に費やして以来、暇を見つけては、杖指山や杖指山野鳥の森公園に鳥を見に出かけていた。

今の季節のビッグイベントである、雄大なサシバの渡りが、ちょうど杖指山上空にかかるというので、二人で見に行こうと前から申し合わせてあったのだ。

でも、まあ、しようがない。行ったって、渡りが見られる確率は五分五分だっただろうし、まいはもともともっと小さな鳥が好みだった。サシバの渡りに固執していたのはむしろショウコの方だったのだ。そのショウコがこんな有様なんだから。

平気な顔をして横を歩いているショウコを、まいは少し非難がましく見つめた。立てたプランがだめになるというのは、まいにはストレスフルなことなのだ。

「あんた、ほんとに展覧会なんか行きたいのかよ。母親のためにああ言ったんじゃないのか」

まいの非難にはまったく気づかぬ風でショウコはぶつぶつと言った。ショウコは展覧会なんかには、はなからまったく興味をもっていない。

「私、前からほんとに行きたいと思ってたし、おばさんのご用がたせて、役に立てたら嬉(うれ)しいじゃない」

「ほう」

ショウコは短い感嘆詞をあげ、あげたきり何もコメントしなかった。

人の役に立てて嬉しい、なんて、普通は、言わない。言っても、周りをシラケさせるだけだし、優等生ぶって、と攻撃されるのがオチだからだ。

ショウコは、口は悪いが、何事によらず、異なる文化の香りに出くわすと、まず感嘆するという美徳があった。排斥にかかるのではなく。だからまいもショウコの前では構えずに本音が言える。

二人でバス通りの方へ歩いていくと、角のバス停のところで猛スピードで走ってきた

自転車とぶつかりそうになった。自転車は、ハンドルを切り損ねて横転した。

「いってえ」

乗っていた男の子が膝を抱えた。

「あれ、藤沢君じゃない」

「およ、ワニと加納」

和邇、というのはショウコの姓の方だ。藤沢君は同じクラスの子だ。

「あやまれよ、おめえら」

「あんなスピードで、回りも見ずに飛ばしてきたおまえの方が悪いだろう。自業自得だ」

ショウコは洟もひっかけない。そのまま通り過ぎようとする。

「ちょっと待ってよ。なんであんなに急いでいたの？」

まいは、ショウコを引き留めて、藤沢君に声をかける。足をくじいたらしい。顔をしかめながらうめくように話した。

「杖指ユナイテッドの練習試合がもうすぐ始まるんだよ。下の兄貴がメンバーなんだけ

どうっかりしてユニフォームをまちがえてもっていったんだ。電話がかかってきて、大急ぎでもってきてくれって。練習試合ったって、相手は隣の県からわざわざやってくるんだから、ユニフォーム着てなきゃ失礼だろ」

「どこであるんだ？」

ショウコが思いがけず興味を示してこう聞いたとき、まいの心に嫌な予感がよぎった。

「新しくできた市立競技場」

「え、あんなとこまで自転車でいくつもりだったの？」

その市立競技場というのは、辺鄙（へんぴ）な山の中腹を切り開いて最近出来たもので、ショウコたちの住む町とは、駅を挟んでまったく反対側に位置している。バスだって、一日に何便も出てないに決まっている。

「あ、バスが来た」

「うっそお」

なるほど、向こうの四つ角で車体を新しく塗り変えたバスが信号待ちをしている。

「ほら、市立競技場行きって書いてある」

「うっそお」

ショウコとまいが慌ててバスの時刻表を見ると、確かに真新しい「市立競技場行き」の時刻表が貼ってあった。競技場のオープンに伴って新設されたらしい。が、まだ一日に三本しかない。

「貸しなよ、それ、それ、行ってやるよ」

「え」

まいと藤沢君はあっけにとられた。ショウコは藤沢君のもっていた紙袋をもぎとった。

「あんた、足くじいたんだろ」

それから、まいに向かって、

「(あんた、人の役に立つのが)好きなんだよ、な」

ショウコは肝心のところをはしょって言わない、という悪癖があって、これまで何度あらぬ誤解を受けてきたことかしれない。

まいの頬は、一瞬怒りのために紅潮した。もとよりショウコの言おうとしていることは分かっている。それも、さっきのまいの、「おばさんの役に立てるんだったら……」

発言の揚げ足を取るつもりではなく、もしかして、ショウコは、本気でまいがそうすることを望んでいると信じているのかもしれない。
だがまいもそれほどお人好しではない。今だって「それはたいそうおきのどく」と終わって通り過ぎるつもりでいたのだ。
まいにはわかっていた。ショウコは最初っから展覧会なんか行きたくなかったのだ。「サッカーの練習試合」という言葉に、とりもちにくっついた葉っぱのように引き寄せられたのだ。おそらく本人も意識してないと思うけど。なのに、まるで、まいのための選択のようにもっていこうとする、ショウコの無意識のずるさに、まいは腹を立てたのだ。
バスが止まってドアが開いた。
「さあ、急ごう」
あっというまにショウコはバスに乗り込んだ。仕方なくまいも後に続いた。
取り残された藤沢君の頭の中では、ショウコの「好きなんだよ」という言葉が反響していた。

……知らなかった。ワニの奴（やつ）、俺のこと、好きだったのか。そうか、そうだよな、そうじゃなきゃ、誰がここまでしてくれるかよな。いや、待てよ、加納がまっかになってたぞ。もしかして加納が……。いや、二人ともっていう可能性もある。ああ、知らなかったなあ。そういう場合、どっちかを選んだら、彼女らの友情にひびをいれることになるんだろうか。ワニはあんな奴だし、加納はちょっと暗いしなあ……。

藤沢君は、やっとの思いで自転車を立たせると、足を引きずりながら、深刻な顔つきで帰路についた。

誤解は人生を彩（いろど）る。

バスには、二、三人しか乗っていなかった。どうせ終点なのだから、とショウコは最後尾に座った。腹を立てていたまいは、前の方に座った。

……変な奴……

ショウコは意に介さない。すいているからゆったりと座りたいっていうのならそれも分かる話だ。

バスは歓楽街の裏の川町を抜け、駅前のターミナルでしばらく止まった。思ったより大勢が乗り込んできたので、ショウコも席を移動してまいの隣に座った。

「間に合うかな」

ショウコが声をかけた。まいは返事をしない。

……あれ、聞こえないのかな……

「間に合うかな」

今度は大声で言った。まいは困ったが、成行き上、こらえて返事をしなかった。ことここに至って初めてショウコはまいの変化に気づいた。

「あれ、なんか、腹立ててんのかあ」

それから、しばらく考えていたが、やがてつんつんとまいの肘（ひじ）をつついた。

「そういう場合はだな、きちんと言語化しないと、事態は悪化の一途をたどるばかり、って、よく家（うち）の兄貴が言ってたぞ」

ショウコがたいして動揺もしないので、まいもばかばかしくなった。

気に入らない相手を無視する、というのは、まいが前の学校で散々苦しめられた手だ。

なのに、自分も腹を立てた相手に似たような対応をするようになっている。気づかずについた染(し)みのようなものだ。負の遺産だ。まいは、少し、反省した。

「だって、和邇(わに)さん、そもそもの最初、私たち、サシバの渡りを見に行くはずだったのよ。それがあなたの寝坊のおかげでおじゃんになって、今度は展覧会に行くって決めたら、それもあなたの気まぐれで変更になった。わたし、なんだか振り回されているみたい」

「あれえ、あたし、あんたがこうしたいんだとばっかり思ってたよ」

「そりゃあ、これを届けないと誰かの命にかかわるとかいうんだったら、自分の一日台無しにしたってそうするけど。この場合はそうじゃないわ」

「そうか、そうだったのか。その場合はどうなるのかな」

ショウコは考え込んでいる。今日のショウコはやっぱりおかしい。何か企(たくら)んでいるようだ。

「それより、和邇さんこそ、ほんとは、展覧会なんかよりサッカーの試合の方にひかれてるんでしょう」

「……なるほど」

　ショウコは感心したようにうなずいた。まいは、思わず吹き出した。笑いって不思議だ、といつもまいは思う。これでちょっとした感情のしこりなんかはあっというまに解けてしまう。

「でもさ、あんたはいつも自分の立てたプランは実行してきたじゃないか。いいじゃないか、一日ぐらいこんな日があったって」

「……あ、和邇さん、あなた、まさか……」

　まさかショウコは、わざと朝寝坊し、ことごとくプランを変えていったのだろうか。ショウコはかねてから、まいが決めたことは必ずやり通すので、いつも不思議がっていた。まるで、魔法をかけたように、事態がまいの側に好転していくのを。

「いや、それほど意図したわけじゃなかったんだけど……。たまたま朝寝坊して、これでさすがのあんたも計画を変更せざるを得なくなったのかなあ、と思ったら、悪いような、けど実験してみたいような、気になって」

「あっきれた」

怒る気にもなれない。
　バスは郊外の上り坂に差し掛かっていた。
　山奥の道にもかかわらず、きれいに整備されていて交通量も多いのは、この道路が国道のバイパスとして使われているからだ。
「あ」
　突然まいが声をあげた。
「どうしたんだよ」
「帰りのバス」
「あ」
　これは、時刻表で見る限り、最後のバスだった。終点の市立競技場でそのまま折り返して帰っていくだろう。
「あーあ」
「まあ、どうにかなるさ」
　ショウコは屈託がない。

バスは更に走り続けた。乗っているのは、もうショウコとまいの二人だけだ。

「だって、試合があるんだぜ。きっと、みんな車で見にくるだろう、誰かに頼んで乗せて貰えばいいじゃないか。藤沢の兄貴だって、きっとなんとかしてくれるよ」

「そうね」

まいはうなずいた。「誰かに頼んで乗せて貰う」というのは名案とは思えない。そんな善人の溢れた時代に私たちは生きていない。が、「藤沢の兄貴がなんとか」というのはあてにできそうだ。

バスはやがて「市立競技場」と書かれた矢印に沿って左折し、円形の大きな建物の前の広い駐車場の脇に止まった。

大急ぎでバスから降りて、入口まで走った。入口のところで、ジーンズと格子縞のシャツを着た女の人が、選手の一人らしい男の人と話していた。その男の人はショウコたちに気づくと声をかけた。

「ぼく、藤沢、藤沢隆の兄の。君たちユニフォームもってきてくれたんじゃない?」

「そうです」

まいとショウコは思わず同時に声をあげた。その瞬間乗ってきたバスは快音をあげて走り去った。
「あー、やっぱり」
「あれ、最後のバス？」
藤沢さんは、気の毒そうにきいた。
「ええ」
「そうかあ。とにかく助かったよ、ありがとう」
藤沢さんは心からお礼を言って、ショウコとまいを見比べた。
……折角の日曜をつぶしてまでユニフォームをもってきてくれるなんて。きっと、隆の『特別の友人』に違いない。どっちがそうなのかな。もしかして、遠い将来義妹になるかもしれない。ここは一番、あいそよく。
「お礼に食事でもごちそうして、送っていきたいところだけど、ここからナイトゲームになるんだ。君たちはもうそろそろ帰った方がいい」
藤沢さんは女の人に目配せした。女の人はうなずいた。

「私、仕事の途中でちょっと立ち寄ったところなの。これから、まだ仕事が残ってるけど、よかったら乗っていかない？　帰りでよかったら送ってあげる」

選択の余地はない。まいは、頭を下げた。

「お願いします」

ショウコはゲームが見られなかったので、見るからにがっかりしていた。

まったく、なんて一日なのだろう。

その女の人の車というのは、驚いたことに大型のダンプカーだった。女の人は軽やかに運転席に上がった。西部劇で馬に乗る人みたいだ、とまいは思った。

「さ、乗って」

女の人は内側から助手席のドアを開けた。これで少し元気の出たショウコがまずよじ登った。

「広いんですね」

後から続いたまいは、楽々二人座れる助手席にびっくりした。

「閉めた？　じゃ、行くわよ」

ダンプはバスのような響きを立てて前進した。

藤沢さんはそのトラックに向けて手を振ったあと、公衆電話に直行して、自宅に電話をかけた。

……あいつ、まだまだ赤ん坊だと思っていたのに。照れくさがってこういうこと言わないからな。よし、かまかけよう。

「もしもし、隆か」

「あ、兄さん、どうだった、来た？　二人」

「おう、来たぜ、おまえのガールフレンド」

「え、なんでわかった？　本人がそう言ったの？」

「まあな、雰囲気でわかるってもんさ」

「さっすが」

思い込みの激しいところはよく似た兄弟だ。一呼吸おいて、二人とも同時に質問した。

「で、どっちが？」

「で、どっちが？」

対向車の運転手が、皆一様にあっけにとられた表情をする。こんな大型のダンプカーに、若い女性と少女が二人乗っているのが意外なのだろう。
「えっと、まだ名前きいてなかったわね。私は笹島あや」
ショウコとまいもそれぞれ自己紹介した。
「なんで、こんなダンプの運転手になったんですか？」
「不思議？」
「ええ」
「そう？　ただ、好きだったのよ。藤沢君は、サッカーが好きだから、サッカーをする。それと同じ。私は小さいときから、大きい車にあこがれていたの。小山を動かしているような気にならない？　ダンプの運転手になりたくて、そのためにずっとがんばってきたの」
「へえ」
確かに、こうやって高いところから他の車を見降ろしながら悠々と運転するのは気持

ちよさそうだった。あやさんの運転している姿には、誇りとすがすがしさがあった。
「でも、大変じゃないですか」
「そりゃあ、いろいろあるわよ。でも、いろんなトラブルを一つ一つ解決していくのって何ともいえない快感よ。自分の人生を自分の力で切りひらいていってるって実感があるわ」
あやさんの運転は、堂々としていて、しかも思いやりがあった。必要以上に前の車に接近して威圧感を与えることもなく、変に遠慮して車線変更をためらうこともなかった。流れに入れないで困っている車には、スピードを緩めて早く入るように合図した。
ああ、いろんな女の人がいる、と、まいは思った。まいのママのように、仕事が大好きで、あまり家事の好きでないタイプ。それから、ショウコの母親の順子さんのようにどっしりと家庭を営んでいくタイプ。皆口には出さないけれど、それぞれの幸福があり、また不幸もあるのだろう。でも、あやさんの場合は、何というか、鮮やかだった。
「いいなあ、そういうの」
ショウコが珍しく好意的な感想を漏らした。

「ことは、とても単純（シンプル）よ。好きなこと、やりたいことを仕事にする」
あやさんは言いきった。
……ああ、かっこいい……
ショウコとまいは同時にそう思った。
「ずっと？　結婚しないの？」
「あら、するわよ、もちろん。ほら、さっき会った藤沢君と。さっき、式場の情報をやりとりしていたの」
「えー、そうだったんですか」
「そうよ。私、やりたいことは全部トライする主義なの」
ショウコとまいは思わず顔を見合わせた。ショウコの顔には、追跡調査が必要だな、という表情があった。
まいは、これからどんどんこんな女性が出てくるのかもしれない、と思った。まいの母親とも、ショウコの母親とも違う、新しい人たち。いつか自分たちもその中の一人になるのだ。

そう思うと、全身に不思議な力が湧(わ)いてくる。
「さあ、もうすぐ仕事場につくわ。今日は同僚が先に現場でまってるはずなの」
「あれ、ここ」
そこは、美術館の裏庭だった。
「絵の搬出が今日の仕事よ。今日が展覧会の最終日なのよ」
「実は、私たち、今日、ここにくるつもりだったんです。この人のおかあさんに画集を買ってきてって頼まれて……」
まいは急にわくわくと嬉(うれ)しくなってきた。
「あら、それなら急げばなんとかなるかもしれないわ。私からもいっしょに頼んであげる」
三人は大急ぎで裏口から中へ入った。天井の高い、声のよく響く館内では、すでに大部分の絵が外されて梱包(こんぽう)されようとしていた。あやさんは、真っ先に売り場へ行って、係の人に事情を説明し、一部だけ画集を売って貰うことに成功した。
ショウコがそれを受け取っている間、まいは、壁面一つ全部使って展示されていた、

大きな一枚の絵に釘付けになっていた。
それは、岬の真上から、遥かな水平線を目指して力強く飛翔を続けるサシバの群れの絵だった。
何の迷いもない、確信に満ちた一途さが、画面全体から溢れていてまいの心を打った。
……私、知っている。この、衝動。一つの方向を目指している。
いつか、私たちも行くだろう、とまいは思った。
……あやさんのように。このサシバたちのように。だって、この道きり、ほかにないんだもの……
まいの目に涙が溢れた。絵を見て泣くなんて初めてだ。
「あれ、どうした？」
立ち尽くしているまいに、ショウコが声をかけた。そして、梱包されようとしている絵に目を遣り、「あ」と声をあげた。そしてしばらくショックを受けたように動かなかった。
「結局、立てたプランは、全部達成したんだなあ」

と、ショウコが呟いた。

「サッカーの試合の他は」

「あら」

さっと、涙を拭いて、まいがにやりと笑った。

「サッカーの試合なんか私のプランにはなかったもの」

ショウコは目を丸くして、

「途中から完全にプランに入ったんだと思ってた」

「つきあっただけよ、友達のよしみで。私サッカーそれほど好きじゃないもの」

「……好きなんだと思ってた」

まいは鼻の下をこすりながら、すました顔で、

「だいたいあなたは自分が興味のあるものは人もそのはずと思いこむ癖があるのよ、よかったわ、この際誤解がとけて」

ショウコはため息をついた。これからはまいといっしょにサッカー観戦にも行けると秘かにもくろんでいたのだ。

「とけてがっかりの誤解だったのか」

「とけてがっかりの誤解だったりして」

その夜、藤沢君の家で、将来の義弟から悩みを打ちあけられたあやさんは明るく言い放ったのだった。

# 解説

早川司寿乃

日々の中で、人間は、自らが作り出した化学物質をはじめとする人工的な物に囲まれ、さらに、人工的なよくわからない物が沢山入ったたべものを食べて生きています。それは少しずつ人間を歪め、社会全体を歪めてきたように思います。いつのまにかそんなおかしな格好になってしまった人間も、本来は、他の生物と同じ自然の一部ですから、本能的にどこか変だと感じていても、すぐにはどうすることもできずに毎日を生きています。様々な社会問題は、全て、そんな人間の歪みが引き起こしているのではないかと思えてなりません。

この物語に出てくるまいは、そんな社会の中にいて、真っ直ぐ立とうとするがゆえに重圧を受けてしまった女の子です。(多少の差はあっても、私たちは皆、まいの要素を持って生きているのではないでしょうか。)まいは立ち止まり、両親の勧めで、田舎に住むおばあちゃんの元へ行きます。そこで触れる自然と、自然にごく近い姿をしたおばあちゃんによって、徐々に、生命力を回復してゆきます。おばあちゃんがまいに施した薬は、人が永い間に自然から教わり受け継いできた知恵や、生活の基本を見せることではなかったでしょうか。難し

い理論があるわけでなく、ただ普段そのままを見せるだけです。でも、そこには、人が生きるに必要なものが満ちていました。そして嬉しいのは、物語の中に、その生活の知恵が、さりげなく、あちらこちらにちりばめられていることです。ジャムを作る場面（41頁）、エプロンを作る場面（50頁）、洗濯の場面（82頁）他々……。これらは、物語の縁の下の力持ちとも言える役目を果しているように思います。

自然の中での規則正しい生活で、まいの生物としてのリズムが目覚め、体と心がしっかりしてくると同時に、まいの「魔女修行」は始まりました。この、その人の持つ素質を伸ばす・自分で考え自分で決めるという魔女修行は、本来の人らしい人になるということなのかもしれません。また特別な人達だけがするのを許されたものではなく、実は、子供も大人も、男の人も女の人も、私たちみんなができることなのです。まいは、クラスのこと、死のこと、ゲンジさんのこと他をかかえて毎日を送ります。魔女修行は一朝一夕でできるものではありません。すぐに答えが出ないこともよくあります。おばあちゃんは、答えを示すのではなく、厳しさと優しさをもって、まいが、自分で考え自分で決めるのを見守る姿勢をとり続けます。

いろんな出来事を経験しながら日は過ぎ、やがてまいは、ゲンジさんのことで心にしこりを残したままおばあちゃんの元を去ります。そのまま二年の月日が流れ、おばあちゃんは亡くなります。直接言葉を交わすことによっての目に見える仲直りは不可能になり、まいの辛

さは深まります。でも、ガラス窓に、おばあちゃんの残した素晴しい伝言がありました。おばあちゃんの魂によって、まいの魂は救われます。確かな魂の存在が感じられます。そして、この場面でもうひとつ際立つのは、死が清々しく描かれているということです。今の時代、生は○、死は×、というようにされがちですが、ここでは、生がいきいきと描かれているのと同じく、死もまたいきいきと描かれています。親しい人が死んでいなくなってしまうというのは、たいへん悲しいです。しかし、自分の肉体と相手の肉体との物理的な距離が無くなったぶんだけ、かえって近くなれるというふうにも考えられるのではないでしょうか。魂と魂との間には、隔てる距離や、遮る何かがあるわけでなく、とても自由です。

私は、この物語には、人によって形は異なりはしても、私たちが実際にしあわせに生きるためのヒントが幾つも書かれていると思います。おばあちゃんの、この一見古風な生き方は、実は、古くもあり、同時に最も新しくもあります。それは、まさに現代社会に生きているまいが、自分の力で立ち直り、自分の足で歩きはじめるのに有効であったということからもわかります。本当に価値のあるものは何であるのか。今、現実に私たちのいる社会が求めた答えのひとつがここに在り、書かれるべくして書かれた物語のように思えてなりません。

これから先、私は人間のひとりとして、何をしなくてはならないのか、また、何をするのを止めなくてはならないのかを考え続けています。人間が、自分で作っておきながら、自分

の手に負えなくなってしまっているもので溢れている日常にいて、私は、自分が居たいと思える空間を求め、絵を描いています。今回、表紙の絵を描くのに際し、先ず、この物語を読み始めました。数頁を読み、まいがおばあちゃんの家に着くあたりから、穏やかな陽ざし、草木のにおいが、私のまわりに漂い出して、読み進むうち、いつのまにか、おばあちゃんの家の近所に住んでいて、同じ空気をすっているかのような気持ちになっていました。最初「西の魔女が死んだ」という題名を見た時、白と黒、それと渋い色合いが頭に浮かびました。でも物語を読み終えた時には、明るい色合いが心に広がっていて、私は、太陽の光をプリズムで分解して、その出来た光の色を、混ぜたり、重ねたりして描かれた絵がぴったりだと考えました。しかし、残念なことに、そのやり方が、今のところ私にはよくわかりません。それから次に、絵の内容についてです。おばあちゃんは、美しく実った果実のようだという印象がありました。その精神の普遍性を、8（永遠のマーク）で表わし、まいに受け継がれてゆくための「種」として、果実の中に置きました。こんなふうな思いを経て、表紙の絵は仕上ってゆきました。

最後に、私から提案したいことがあります。一つめは、ごはんの時、ひとくち、ひとくちをよーく噛んで食べてください（なるべく、今自分がいる国で産した、旬のものを）。すると、食べたものたちが体にしみ込んでゆくかんじがして元気が出ます。米・野菜・魚・肉……。料理される前は、みんな自分と同じように生きていたのだという事実、そのお陰で自

「西の魔女が死んだ」は平成六年四月楡出版より刊行され、平成八年四月小学館より新装版が刊行された。
「渡りの一日」は「日本児童文学」平成八年一月号に発表された。

分は生きていられるのだという事実も思い出してください。二つめは、もしも、テレビやラジオなどが、身の回りで常についている状態にあるのでしたら、一度、それらを全部消してみてください。何だか落ち着かない気持ちになるかもしれませんが、今まで、あふれる音に埋もれていた「自分」が現われてきます。そして三つめは、庭があるお家ならば庭で良いですし、無ければ、近くの公園などへ行って、そこの土や草の上に、裸足(はだし)で立ってみてください。靴と靴下を脱ぐのは、最初ちょっと抵抗があるかもしれませんが、きっと何かが目覚めるような感覚を体験できると思います。この三つのこと、ぜひ一度試してみてください。そうしたら、この物語をより実感をもって読んでいただくことができると思いますし、また、そんなふうに読んでもらえたらと、心から願っています。

（平成十三年六月）

## 歌行燈・高野聖
泉　鏡花著

淫心を抱いて近づく男を畜生に変えてしまう美女に出会った、高野の旅僧の幻想的な物語「高野聖」等、独特な旋律が奏でる鏡花の世界。

## 婦系図
泉　鏡花著

『湯島の白梅』で有名なお蔦と早瀬主税の悲恋物語と、それに端を発する主税の復讐譚を軸に、細やかに描かれる女性たちの深き情け。

## 額田女王（ぬかたのおおきみ）
井上　靖著

天智、天武両帝の愛をうけ、〝紫草（むらさき）のにほへる妹〟とうたわれた万葉随一の才媛、額田女王の劇的な生涯を綴り、古代人の心を探る。

## 流れる
幸田　文著

新潮社文学賞受賞

大川のほとりの芸者屋に、女中として住み込んだ女の眼を通して、華やかな生活の裏に流れる哀しさはかなさを詩情豊かに描く名編。

## おとうと
幸田　文著

気丈なげんと繊細で華奢な碧郎。姉と弟の間に交される愛情を通して生きることの寂しさを美しい日本語で完璧に描きつくした傑作。

## 木
幸田　文著

北海道から屋久島まで訪ね歩いた木々との交流の記。木の運命に思いを馳せながら、鍛え抜かれた日本語で生命の根源に迫るエッセイ。

梨木香歩著

**裏庭**

児童文学ファンタジー大賞受賞

荒れはてた洋館の、秘密の裏庭で声を聞いた——教えよう、君に。そして少女の孤独な魂は、冒険へと旅立った。自分に出会うために。

梨木香歩著

**からくりからくさ**

祖母が暮らした古い家。糸を染め、機を織る、静かで、けれどもたしかな実感に満ちた日々。生命を支える新しい絆を心に深く伝える物語。

芥川龍之介著

**河童・或阿呆の一生**

珍妙な河童社会を通して自身の問題を切実にさらした「河童」、自らの芸術と生涯を凝縮した「或阿呆の一生」等、最晩年の傑作6編。

安部公房著

**水中都市・デンドロカカリヤ**

突然現れた父親と名のる男が奇怪な魚に生れ変り、何の変哲もなかった街が水中の世界に変ってゆく……。「水中都市」など初期作品集。

有川　浩著

**レインツリーの国**

きっかけは忘れられない本。そこから始まったメールの交換。好きだけど会えないと言う彼女にはささやかで重大なある秘密があった。

赤川次郎著

**ふ　た　り**

交通事故で死んだはずの姉の声が、突然、頭の中に聞こえてきた時から、千津子と実加、二人の姉妹の奇妙な共同生活が始まった……。

大江健三郎著

ピンチランナー調書

地球の危機を救うべく「宇宙?」から派遣されたピンチランナー二人組! 内ゲバ殺人から右翼パトロンまでをユーモラスに描く快作。

小澤征爾
広中平祐 著

やわらかな心をもつ
—ぼくたちふたりの運・鈍・根—

我々に最も必要なのはナイーブな精神とオリジナリティ、即ちやわらかな心だ。芸術・学問から教育問題まで率直自由に語り合う。

小野不由美著

屍鬼
(一〜五)

「村は死によって包囲されている」。一人、また一人、相次ぐ葬送。殺人か、疫病か、それとも……。超弩級の恐怖が音もなく忍び寄る。

小野不由美著

魔性の子
—十二国記—

孤立する少年の周りで相次ぐ事故は、何かの前ぶれなのか。更なる惨劇の果てに明かされるものとは——「十二国記」への戦慄の序章。

小野不由美著

東京異聞

人魂売りに首遣い、さらには闇御前に火炎魔人、魑魅魍魎が跋扈する帝都・東京。夜闇で起こる奇怪な事件を妖しく描く伝奇ミステリ。

西原理恵子著

パーマネント野ばら

恋をすればええやんか。どんな恋でもないよりましやん。俗っぽくてだめだめな恋に宿る、可愛くて神聖なきらきらを描いた感動作!

池澤夏樹著 **マシアス・ギリの失脚**
谷崎潤一郎賞受賞

のどかな南洋の島国の独裁者を、島人たちの噂でも巫女の霊力でもない不思議な力が包み込む。物語に浸る楽しみに満ちた傑作長編。

池澤夏樹著 **ハワイイ紀行【完全版】**
JTB紀行文学大賞受賞

南国の楽園として知られる島々の素顔を、綿密な取材を通し綴る。ハワイイを本当に知りたい人、必読の書。文庫化に際し2章を追加。

遠藤周作著 **母なるもの**

やさしく許す〝母なるもの〟を宗教の中に求める日本人の精神の志向と、作者自身の母性への憧憬とを重ねあわせてつづった作品集。

江國香織著 **つめたいよるに**

愛犬の死の翌日、一人の少年と巡り合った女の子の不思議な一日を描く「デューク」、デビュー作「桃子」など、21編を収録した短編集。

江國香織著 **流しのしたの骨**

夜の散歩が習慣の19歳の私と、タイプの違う二人の姉、小さな弟、家族想いの両親。少し奇妙な家族の半年を描く、静かで心地よい物語。

岡本かの子著 **老妓抄**

明治以来の文学史上、屈指の名編と称された表題作をはじめ、いのちの不思議な情熱を追究した著者の円熟期の名作9編を収録する。

北原亞以子著
その夜の雪
暴漢に手籠めにされ自刃した愛娘の復讐に燃える同心森口慶次郎の執念の追跡。市井の人人の生きざまを描き上げた七つの傑作短編集。

北原亞以子著
夢のなか 慶次郎縁側日記
嫁き遅れの縹緻よしにも、隠居を楽しむ慶次郎にも胸に秘めた想いがある。江戸の男女の心の綾を、哀歓豊かに描くシリーズ第九弾！

北原亞以子著
傷 慶次郎縁側日記
空き巣のつもりが強盗に――お尋ね者になった男の運命は？ 元同心の隠居・森口慶次郎の周りで起こる、江戸庶民の悲喜こもごも。

倉田百三著
出家とその弟子
恋愛、性欲、宗教の相剋の問題について、親鸞とその息子善鸞、弟子の唯円の葛藤を軸に「歎異鈔」の教えを戯曲化した宗教文学の名作。

倉橋由美子著
パルタイ 女流文学者賞受賞
〈革命党〉への入党をめぐる女子学生の不可解な心理を描く表題作など、著者の新しい文学的世界の出発を告げた記念すべき作品集。

呉茂一著
ギリシア神話（上・下）
時代を通じ文学や美術に多大な影響を与え続けたギリシア神話の世界を、読みやすく書きながら、日本で初めて体系的にまとめた名著。

梶井基次郎著　檸檬（れもん）

昭和文学史上の奇蹟として高い声価を得ている梶井基次郎の著作から、特異な感覚と内面凝視で青春の不安や焦燥を浄化する20編収録。

川端康成著　名人

悟達の本因坊秀哉名人に、勝負の鬼大竹七段が挑む……本因坊引退碁を実際に観戦した著者が、その緊迫したドラマを克明に写し出す。

開高健著　地球はグラスのふちを回る

酒・食・釣・旅。――無類に豊饒で、限りなく奥深い〈快楽〉の世界。長年にわたる飽くなき探求から生まれた極上のエッセイ29編。

開高健著　フィッシュ・オン

アラスカでのキング・サーモンとの壮烈な闘いをふりだしに、世界各地の海と川と湖に糸を垂れる世界釣り歩き。カラー写真多数収録。

開高健著　日本三文オペラ

大阪旧陸軍工廠跡に放置された莫大な鉄材に目をつけた泥棒集団「アパッチ族」の勇猛果敢な大攻撃！　雄大なスケールで描く快作。

木下順二著　夕鶴・彦市ばなし　毎日演劇賞受賞

人の心の真実を求めて女人に化身した鶴の悲しい愛と失意の嘆きを抒情豊かに描く「夕鶴」ほか、日本民話に取材した香り高い作品集。

神坂次郎著
**縛られた巨人**
—南方熊楠の生涯—
生存中からすでに伝説の人物だった在野の学者・南方熊楠。おびただしい資料をたどりつつ、その生涯に秘められた天才の素顔を描く。

湯本香樹実著
**夏の庭**
—The Friends—
米ミルドレッド・バチェルダー賞受賞
死への興味から、生ける屍のような老人を「観察」し始めた少年たち。いつしか双方の間に、深く不思議な交流が生まれるのだが……。

小池真理子著
**浪漫的恋愛**
月下の恋は狂気にも似ている……。禁断の恋の果てに自殺した母の生涯をなぞるように、激情に身を任す女性を描く、濃密な恋物語。

佐藤愛子著
**こんなふうに死にたい**
ある日偶然出会った不思議な霊体験をきっかけに、死後の世界や自らの死へと思いを深めていく様子をあるがままに綴ったエッセイ。

酒見賢一著
**後宮小説**
日本ファンタジーノベル大賞受賞
後宮入りした田舎娘の銀河。奇妙な後宮教育の後、みごと正妃となったが……。中国の架空王朝を舞台に描く奇想天外な物語。

志賀直哉著
**清兵衛と瓢箪・網走まで**
瓢箪が好きでたまらない少年と、それを苦々しく思う父との対立を描いた「清兵衛と瓢箪」など、作家としての自我確立時の珠玉短編集。

北村　薫　著
## スキップ
目覚めた時、17歳の一ノ瀬真理子は、25年を飛んで、42歳の桜木真理子になっていた。人生の時間の謎に果敢に挑む、強く輝く心を描く。

北村　薫　著
## ターン
29歳の版画家真希は、夏の日の交通事故の瞬間を境に、同じ日をたった一人で、延々繰り返す。ターン。ターン。私はずっとこのまま？

北村　薫　著
## リセット
昭和二十年、神戸。ひかれあう16歳の真澄と修一は、再会翌日無情な運命に引き裂かれる。巡り合う二つの〈時〉。想いは時を超えるのか。

北　村　薫　著
おーなり由子　絵
## 月の砂漠をさばさばと
9歳のさきちゃんと作家のお母さんのすごす、宝物のような日常の時々。やさしく美しい文章とイラストで贈る、12のいとしい物語。

阿川佐和子・角田光代
沢村凜・柴田よしき
谷村志穂・乃南アサ
松尾由美・三浦しをん　著
## 最後の恋
―つまり、自分史上最高の恋。―
8人の女性作家が繰り広げる「最後の恋」をテーマにした競演。経験してきたすべての恋を肯定したくなるような珠玉のアンソロジー。

阿川佐和子・井上荒野
大島真寿美・島本理生
乃南アサ・村山由佳
森絵都　著
## 最後の恋 プレミアム
―つまり、自分史上最高の恋。―
これで、最後。そう切に願っても、恋の行く末は選べない。7人の作家が「最高の恋」の終わりとその先を描く、極上のアンソロジー。

## 新潮文庫最新刊

重松清著
**ポニーテール**
親の再婚で姉妹になった四年生のフミと六年生のマキ。そして二人を見守る父と母。家族のはじまりの日々を見つめる優しい物語。

原田マハ著
**楽園のカンヴァス**
山本周五郎賞受賞
ルソーの名画に酷似した一枚の絵。秘められた真実の究明に、二人の男女が挑む！ 興奮と感動のアートミステリ。

窪美澄著
**晴天の迷いクジラ**
山田風太郎賞受賞
どれほどもがいても好転しない人生に絶望し、死を願う三人がたどり着いた風景は――。命のありようを迫力の筆致で描き出す長編小説。

安東能明著
**出署せず**
新署長は女性キャリア！ 混乱する所轄署で本庁から左遷された若き警部が難事件に挑む。人間ドラマ×推理の興奮。本格警察小説集。

吉川英治著
**新・平家物語（七）**
五条大橋での義経・弁慶の運命の出会い。そして、後白河法皇の子・以仁王によって、平家追討の令旨が、諸国の源氏に発せられる。

檀ふみ編
**映画狂時代**
映画好きは皆、どこかオカシい……。谷崎、太宰から村上龍、三浦しをんまで。銀幕をめぐる小説＆エッセイを集めたアンソロジー。

塩野七生著　人びとのかたち

銀幕は人生の奥深さを多様に映し出す万華鏡。数多の現実、事実と真実を映画に教えられた。だから語ろう、私の愛する映画たちのことを。

重松　清著　きみの友だち

僕らはいつも探してる、「友だち」のほんとうの意味——。優等生にひねた奴、弱虫や八方美人。それぞれの物語が織りなす連作長編。

重松　清著　ナ　イ　フ
坪田譲治文学賞受賞

ある日突然、クラスメイト全員が敵になる。私たちは、そんな世界に生を受けた——。五つの家族は、いじめとのたたかいを開始する。

杉浦日向子著　風流江戸雀

どこか懐かしい江戸庶民の情緒と人情を、「柳多留」などの古川柳を題材にして、現代の浮世絵師・杉浦日向子が愛情を込めて描く。

杉浦日向子著　百　物　語

江戸の時代に生きた魑魅魍魎たちと人間の、滑稽でいとおしい姿。懐かしき恐怖を怪異譚集の形をかりて漫画で描いたあやかしの物語。

梨木香歩著　り　か　さ　ん

持ち主と心を通わすことができる不思議な人形りかさんに導かれて、古い人形たちの遠い記憶に触れた時——。「ミケルの庭」を併録。

# 新潮文庫最新刊

関 裕二著
**古代史謎解き紀行Ⅱ**
―神々の故郷出雲編―

ヤマトによって神話の世界に隠蔽された出雲。その真相を解き明かす鍵は「鉄」だった！古代史の謎に鋭く迫る、知的紀行シリーズ。

「選択」編集部編
**日本の聖域（サンクチュアリ）アンタッチャブル**

「知らなかった」ではすまされない、この国に巣食う闇。既存メディアが触れられないタブーに挑む会員制情報誌の名物連載第二弾。

藤井直敬著
**つながる脳**
毎日出版文化賞受賞

壁にぶつかった脳科学に、真のブレークスルーはあるか。理研期待の若き俊英が、社会性を鍵に、脳そして心の核心に迫る刺激的論考。

増村征夫著
**和名の由来で覚える300種 高山・亜高山の花ポケット図鑑**

山の花を草地、湿地、礫地、岩場といった場所ごとに分けて、和名の由来から解説。『野と里・山と海辺の花ポケット図鑑』の姉妹編。

東本昌平著
**RIDEX2**

想い出がいっぱいのこのバイク、好きでいとおしくて、だからときどき嫌いになる。極上のオールカラー・バイクコミック第2弾！

有川浩著
**三匹のおっさん**

剣道の達人キヨ、武闘派の柔道家シゲ、危ない頭脳派ノリ。還暦三人組が、ご町内の悪を成敗する！痛快活劇小説シリーズ第一作。

# 新潮文庫最新刊

小澤征爾・村上春樹 著
**小澤征爾さんと、音楽について話をする**
小林秀雄賞受賞
音楽を聴くって、なんて素晴らしいんだろう……世界で活躍する指揮者と小説家が、「良き音楽」をめぐって、すべてを語り尽くす！

櫻井よしこ 著
**何があっても大丈夫**
帰らぬ父。ざわめく心。けれど私には強く優しい母がいた。出生からジャーナリストになるまで、秘められた劇的半生を綴る回想録。

森見登美彦 著
**森見登美彦の京都ぐるぐる案内**
傑作はこの町から誕生した。森見作品の名場面と叙情的な写真の競演。旅情溢れる随筆二篇。ファンに捧げる、新感覚京都ガイド！

内田 樹 著
**呪いの時代**
巷に溢れる、嫉妬や恨み、焦り……現代日本を覆う「呪詛」を超える叡智とは何か。名著『日本辺境論』に続く、著者渾身の「日本論」！

玄侑宗久 著
**無常という力**
―「方丈記」に学ぶ心の作り方―
八百年前、幾多の天災や荒廃する人心を目にし、人生の不運をかこちながら綴られた「方丈記」。その深い智慧と覚悟を説く好著。

川又一英 著
**ヒゲのウヰスキー誕生す**
いつの日か、この日本で本物のウイスキーを造る――。"日本のウイスキーの父"竹鶴政孝と妻リタの夢と絆を描く。増補新装版。

新潮文庫

## 梨木香歩の本


裏庭
西の魔女が死んだ
からくりからくさ
りかさん
エンジェル エンジェル エンジェル
春になったら苺を摘みに
家守綺譚
ぐるりのこと
沼地のある森を抜けて
渡りの足跡
不思議な羅針盤



カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

# 西の魔女が死んだ

新潮文庫　な－37－2

平成十三年八月一日　発行
平成二十六年七月十五日　八十七刷

著者　梨木香歩

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社 新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
　　　読者係(〇三)三二六六―五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・凸版印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Kaho Nashiki 1994　Printed in Japan

ISBN978-4-10-125332-9 C0193

中学に進んでまもなく、どうしても学校へ足が向かなくなった少女まいは、季節が初夏へと移り変るひと月あまりを、西の魔女のもとで過した。西の魔女ことママのママ、つまり大好きなおばあちゃんから、まいは魔女の手ほどきを受けるのだが、魔女修行の肝心かなめは、何でも自分で決める、ということだった。喜びも希望も、もちろん幸せも……。その後のまいの物語「渡りの一日」併録。

9784101253329
1920193004601

定価：本体460円（税別）

ISBN978-4-10-125332-9
C0193 ¥460E